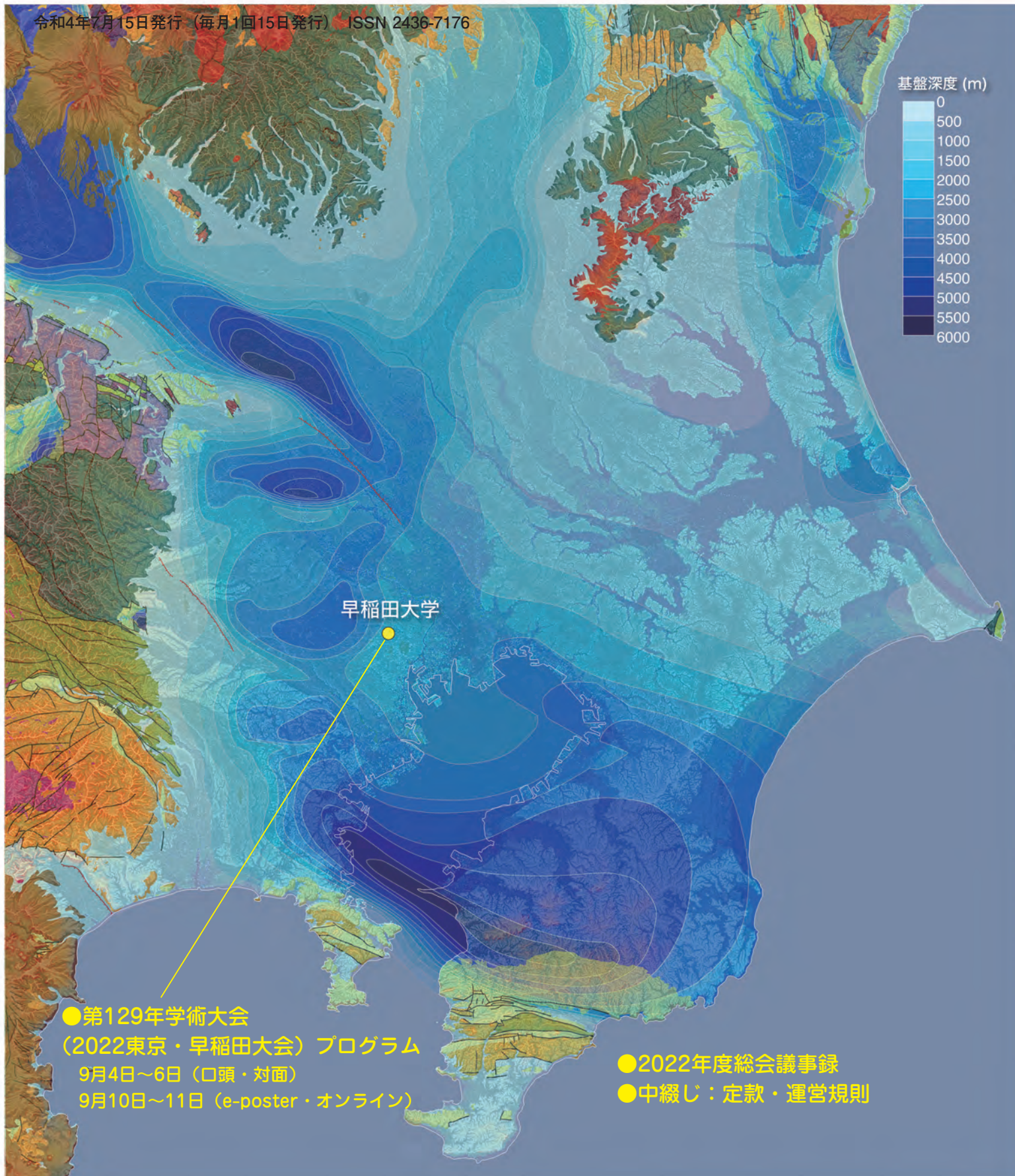




日本地質学会 *News*
Vol.25 No.7 July 2022



日本地質学会会長就任にあたって



一般社団法人日本地質学会
会長 岡田 誠

岡田 誠

2022年6月11日より代表理事（会長）を務めることになりました。日本地質学会の維持・発展に最善を尽くしてまいりますので、2年間よろしくお願い申し上げます。

本会は、我が国における地球科学系最大規模の学協会であり、自然科学としての地質学の発展に寄与するという使命を帯びています。同時に、社会に実装されている様々な地質系関連分野と緊密に連携することで、地質学の最新知見を伝えるとともに、社会における地質学的課題解決への貢献が求められています。さらに将来の地質学発展を担う人材の育成への貢献も必須であり、このために大学との繋がりも不可欠です。一方、本会では毎年80名前後の会員数減が続き、早晩学会活動の継続が困難になることが予測されています。本会の使命を果たし続けるためには、会員数の維持が必要不可欠です。このために、本年度より学生の入会を促進するために会費制度の大幅な変更を実施しました。同時に社会人となっても継続して会員として活動頂けるよう、継続的な教育機会の提供や、CPD発行など社会人会員のメリット向上を図る施策のさらなる充実考えています。また、学会内における学問の健全な発展を促す上で不可欠な、年齢・性別・階層・分野などのダイバーシティ維持に積極的に取り組んでまいります。しかしながら、実際に入会して頂き、会員として継続して頂くためには、学会自体が魅力的でなければなりません。そのためには、日本地質学会が地質学の発展に大きく貢献することで「地質学は面白い」ということを一般社会に示し続ける必要があります。

地質学は面白い。この言葉の意味は、本会会員のように地質学を専門としている人々の中では無意識に理解されていることでしょう。しかし世間一般には、この面白

さは認識されてはいないことも事実です。何かが「面白い」と思うためには、それに「関心」があることが前提です。地質学はその基本に立ち返ることで、人類共通の関心事と深く関わっていることがわかります。

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」。フランスの画家、ポール・ゴーギャンによる絵画のタイトルとして発せられたこれらの問は、我々人類の普遍的な問でもありましょう。「我々」を「生命」や「地球」と読み替えることで、これらの問はさらに普遍的なものとなります。高度に発展し拡大した人類の経済活動は、私たちのすみかである地球の姿を大きく変えつつあります。現代の経済活動は地質時代にゆくりと蓄積されてきた天然資源を急速に採掘することで支えられていますが、その天然資源が早晩枯渇してしまうことはあきらかです。そして「我々はどこへ行くのか」。ゴーギャンの最後の問の答に対するより確からしい予測値を探すが、まさに世界共通の関心事となっています。しかしその予測値は、先立つ2つの問、「我々はどこから来たのか」および「我々は何者か」に対する確かな答えの上に立脚する必要があります。そしてこれら2つの間に答える上で大きな鍵を握っているのが地質学です。

地質学は、地層に刻まれた様々なできごとの痕跡を探ると同時に、地層の積み重なる方向を時間が流れる方向と認識することで、空間内の移動と時間軸上の移動を区別することなく行うことができます。地質学はこの特別な能力を駆使することで、地球誕生以来起こってきた様々なできごとを探ってきましたが、いまだ道半ばです。地質学の責務は、我々がどこから来て、何者であるのかについて確かな答えを探し、それを世界に伝えることではないでしょうか。そうした行動は地質学に対する一般社会の関心をひきつけ、やがては「地質学は面白い」ことを社会に伝えることにもつながります。そしてより確かな答えを探すために、地質学は常に発展し続ける必要があるのです。

日本地質学会の使命は、地質学の発展に寄与し、その発展を牽引することです。そして「地質学は面白い」ことを一般社会に広めることができれば、本会を取り巻く厳しい状況も自ずと解決されてゆくと、私は確信しています。これから会員の皆様とともに、日本地質学会の維持・発展に取り組んでまいりますので、お力添えの程、よろしくお願い申し上げます。

2022年7月5日

日本地質学会第 129 年学術大会 (2022 東京・早稲田)

口頭発表（現地開催）：2022 年 9 月 4 日（日）～ 6 日（火）

ポスター発表（e-poster）：2022 年 9 月 10 日（土）～ 11 日（日）

共催：早稲田大学 教育・総合科学学術院

現地会場：早稲田大学 早稲田キャンパス 14 号館, 15 号館（東京都新宿区西早稲田 1 丁目）



会場への交通機関のご案内

現地会場へのアクセス

(注) ポスター発表はオンラインで実施します (e-poster 形式).
現地会場での対面形式ポスター発表はありません.

1. JR 山手線（西武新宿線）高田馬場駅から徒歩 20 分

2. 都営バス（学 02）高田馬場駅発早大正門行き - 早大正門（終点）より徒歩 3 分
3. 東京メトロ東西線早稲田駅から徒歩 7 分
4. 東京さくらトラム（都電荒川線）早稲田駅から徒歩 5 分
※お車での来場はできません.

現地会場での当日の受付について

受付時間

4日(日) 8:00～16:00
5日(月) 8:00～16:00
6日(火) 8:00～15:00

■ 事前参加登録者

- ・「会員カード」もしくは申込時の確認メール(「注文番号」or「請求書ID」が明記されているもの)を印刷して持参して下さい。会員カードでの受付は、裏面バーコードを読み込むだけで簡単スピーディです。ぜひ「会員カード」を持参してください。当日「会員カード」や確認メールを忘れた方は、専用の用紙に申込内容をご記入いただきます。受付に時間がかかる場合があります。確認がスムーズに行えますよう、ご協力をお願い致します。
- ・会場受付にてネームカードホルダーをお渡ししますので「会員カード」を入れ、名札として現地会場内では身に付けてください。カードをお忘れの場合は、無記名の名札をお渡しますので、ご自身で名前を記入して身につけて下さい。

【入金済みの場合】 領収書のダウンロードURLとオンラインプログラム(要旨閲覧, e-poster)へアクセスするためのログイン情報(ID/PW)を事前にメールでお知らせします。

【期日までに入金確認が取れていない場合】 現地会場受付で代金の清算をして下さい。請求金額は「当日参加登録費」の金額となります。期日を過ぎて入金された場合でも、差額分のご精算をお願いします。その際は、入金時の控え等を会場

にお持ちください。入金が完了するまで、オンラインプログラム(要旨閲覧, e-poster)のログイン情報を発行できません。ご注意ください。

巡検参加者の受付: 巡検当日に集合場所にて名簿で確認します。巡検参加のCPD単位のための参加証明書や領収証は巡検当日に各コースの案内者からお渡しします。

領収書について: 入金済みの方に対して、領収書のダウンロードURLをメールでお知らせします。各自PDFファイルをダウンロードしてください。また別途領収書が必要な方は、現地会場受付もしくは学会事務局までお申し出ください。

■ 事前登録をしていない方

9/4-6の期間、現地会場でのみ当日受付を行います。参加登録費の有料・無料に関わらず備え付けの『参加登録票』に必要事項を記入し当日用受付で、手続きしてください。その際オンラインプログラム(要旨閲覧, e-poster)へアクセスするためのログイン情報(ID/PW)も発行します。

当日参加登録費

正会員: 8,000円

正会員(65歳以上): 5,000円

院生割引会費適用正会員: 3,500円

名誉会員、学部学生割引会費適用正会員、非会員招待者、非会員(学部学生): 無料

非会員(一般): 15,000円

非会員(院生): 9,500円

(注) 当日のお支払いは、現金のみの取扱いとなります。クレジットカードはご利用いただけません。

名誉会員証授与・会員顕彰式・各賞表彰式・受賞記念講演

日程: 9月4日(日) 15:30～17:40(予定)

会場: 早稲田大学 早稲田キャンパス14号館 201(大教室)

15:30～15:40 会長挨拶、来賓挨拶(早稲田大学教育・総合科学学術院長)

15:40～16:10 名誉会員授与式、50年会員顕彰式、各賞授与式

16:10～16:25 日本地質学会小澤儀明賞受賞記念スピーチ: 石輪健樹会員「最終間氷期以降の東南極氷床変動史の構築に向けて: 堆積物試料分析とGIAモデルによるアプローチ」

16:25～16:40 日本地質学会棚山雅則賞受賞スピーチ: 岡崎啓史会員「地球内部でおこる多様な変形と物質循環の理解を目指して」

16:40～16:55 日本地質学会棚山雅則賞受賞スピーチ: 宇野正起会員「プレート収束帯の動的な流体活動に関する研究: 時空間スケールの壁に挑戦する動的な岩石学を目指して」

16:55～17:10 日本地質学会H.E.ナウマン賞受賞記念スピーチ: 片山郁夫会員「実験室データからフィールドスケールへ」

17:10～17:40 日本地質学会功績賞受賞記念講演: 高橋正樹会員「日本の『地質学革命期』前後における花崗岩研究ー1974～1986年を中心にー」

巡検および巡検案内書

巡検参加事前申込みは8月10日が締め切りです。参加者への連絡などは大会ホームページもしくは、案内者よりご連絡いたします。

巡検案内書は、個別の冊子体は作成せず、例年同様、地質学雑誌に掲載いたします(地質学雑誌は、2022年1月より完全電子化となっています。冊子体の作成は原則ありません。掲載論文は順次J-STAGE<<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>>にて公開をしています。

なお、予告記事でもお知らせの通り、巡検参加者には各参加コース箇所の巡検案内書を巡検当日に配布します。

学術大会に関連したプレス発表

学術大会での注目すべき学術発表や行事について、9月上旬にプレス発表を行う予定です。例年多数のメディアに取り上げられ、会員の研究成果が大いに注目されています。プレス内容は、プレス発表後学会ホームページに掲載いたします。

企業等団体展示／書籍販売

企業等団体展示会、書籍・その他物品の販売ブースを対面形式で大会会場内に設置いたします（場所：14号館4F）
※出展の企業、団体については、大会ホームページをご覧ください。

ランチョン・夜間小集会

現地会場で開催いたします（オンラインでの開催はありません）。

ランチョン：9/4（日）12:30-13:30

第2会場 構造地質定例会（世話人：濱田洋平）構造地質部会の予算・決算と活動報告、今後の活動等についての議論と、JpGU提案予定のセッションについて、部会承認を行う。

第4会場 火山部会ランチョン（世話人：上澤真平）火山部会幹事 新体制の提案・承認/連合大会セッション共同開催の提案・承認

第5会場 文化地質（世話人：大友幸子）・文化地質研究会会員近況の交流、会場参加者の感想等の交流/書籍『変動帯の文化地質学』進捗状況/その他

ランチョン：9/5（月）12:30-13:30

第1会場 法地質学研究委員会（世話人：川村紀子）今年発足した法地質学研究委員会のキックオフミーティング。議題はこれまでの活動報告や今後の啓発活動について。ご興味のある方はお気軽にお問い合わせください。

第2会場 構造地質部会若手発表会（世話人：濱田洋平）構造地質分野の若手支援 と部会員の研究交流促進を目的とし、学生や若手研究者の研究発表会をおこなう。1～2名による15～30分程度の発表を予定している。

第3会場 岩石部会ランチョン（世話人：遠藤俊祐）岩石部会に関連した事項について、審議・報告を行う。

第4会場 堆積地質部会ランチョン（世話人：野田 篤）堆積地質部会の活動報告および国内外の堆積学に関する情報交換

第5会場 多様な背景を持つ会員のためのEDI（Equity, Diversity and Inclusion）（世話人：堀 利栄）地質系分野における若手採用やキャリア継続における問題点、およびダイバーシティ推進に関わる全般的な問題について、会場参加者との意見交換などを予定しています。また、ジェンダーダイバーシティ委員会新メンバーの情報交換も同時に行います。少人数での開催予定。

第6会場 地域地質・層序部会合同ランチョン（世話人：佐藤大介）両部会の人事の承認と、学術大会の状況等の情報交

換および各種検討課題の議論。

ランチョン：9/6（火）12:30-13:30

第1会場 海洋地質部会ランチョン（世話人：小原泰彦）海洋地質部会を構成する主要機関の代表から近況の活動報告を行うとともに、情報交換を行う。

夜間小集会：9/5（月）18:00-19:30

第2会場 南極地質研究委員会（世話人：外田智千）第63次南極地域観測隊（2021/22）地質調査報告/南極地質将来計画について/その他

第3会場 炭酸塩堆積学に関する懇談会（世話人：松田博貴）炭酸塩堆積学に関する最近の話題・トピックスについて議論するとともに、最新研究動向・情報について意見交換を行う。

第4会場 環境地質部会（世話人：田村嘉之）環境地質部会に関する事務連絡等

第5会場 地質学史懇話会（世話人：会田信行）徳永重康・徳永重元の生涯と業績に関する講演2題

第6会場 学生・若手のための交流会（世話人：鈴木 志村、佐久間、下岡、菊川）3枚程度のスライドを使って、研究やフィールド、研究室の様子、留学など、自身の体験記を自由に紹介しあって交流する会です（聴講のみも大歓迎）。

学生・若手のための交流会（zoom・オンライン）

日時：9月10日（土）18：00～20：00

世話人：神谷奈々、桑野太輔

ドクターやポスドクの研究生活、IODPの航海での経験など、将来の研究生活で役立ちそうな事を紹介します。紹介後に交流会を開催します。

CPD 単位取得

学術大会でCPD単位が取得出来ます

日本地質学会は、地質技術者への継続教育の一環として、大会参加者・発表者・巡検参加者へCPD単位を発行します。希望者は、大会HPから専用申し込みフォームにアクセスして、お申し込みください。会期後PDFメール添付にて参加証明書をお送りいたします。

【CPD単位】

（注）取得単位は下記を参照して下さい。

・学術大会参加：時間に応じて 例）7時間聴講 = 7単位

（注）休憩時間等は除きます。

・口頭発表：5×発表時間（h） 例）口頭発表15分の場合：
 $5 \times 1/4h = 1.25$ 単位

・ポスター発表：1×ポスター制作時間（h）（上限15）例）
ポスター制作時間6時間の場合： $1 \times 6h = 6$ 単位

・巡検参加：時間に応じて 例）日帰り8単位、1泊2日16単位（注）集合・解散時間等により異なります。

日本地質学会は、土質・地質技術者生涯学習協議会ジオ・スクーリングネット（GEO・Net：<https://www.geoschooling.jp/>）に加入し、地質技術者の継続教育（CPD）に携わっています。大会への参加だけでなく、講演や巡検の参加についてもそれぞれ単位が取得出来ます。またGEO・Netに掲載されている協議会加盟団体（支部主催行事も含む）のイベント情報についても同様に検索・参加申込などができ、参加した場合はCPD単位が取得できます。積極的にGEO・Netをご活用下さい。

技術者継続教育、CPD単位については、下記をご参照ください。

<http://www.geosociety.jp/engineer/content0003.html>

地質情報展 2022 とうきょう 都心の地下を探る

日程：2022年9月3日（土）～5日（月）

（注）学術大会の会期とは異なります

3日（土）9:30～17:00（ただし、入場は16時30分まで）

4日（日）9:30～17:00（ただし、入場は16時30分まで）

5日（月）9:30～16:00（ただし、入場は15時30分まで）

※入場制限がつくことがあります

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 15号館ロビー（東京都新宿区西早稲田1-6-1）〔入場無料〕

主催：産業技術総合研究所 地質調査総合センター・一般社団法人日本地質学会

共催：早稲田大学 教育・総合科学学術院

後援：一般社団法人不動産協会、一般社団法人全国地質調査業協会連合会、特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク

概要：東京都心および周辺地域の地質に関する最新の研究成果や地下水・地中熱の利用、地震・津波の起こる仕組みをわかりやすく展示・解説する特別展です。都心の地下を可視化した3次元地質地盤図のデモや体験学習コーナーでの実験・実演を通じて、東京で安全に暮らすのに役立つ「地質」を、研究者とともに楽しみながら学ぶことができます。

展示内容：東京都の地史・地質、地下水・地中熱の利用、首都圏の地震・津波等の各種解説パネル展示、東京都区部の3次元地質地盤図の解説パネル展示とデモ、各種体験コーナー（地盤の揺れ実験、地盤の液化化実験、地質ジオラマ模型）

地質学会コーナー：第13回惑星地球フォトコンテスト入選作品等の展示

問い合わせ先：

産業技術総合研究所 地質調査総合センター

「地質情報展2022とうきょう」事務局

TEL：029-861-3540 e-mail：M-johoten2022-ml@aist.go.jp

※展示の内容は予定です。予告なく変更あるいは取りやめになる場合がございます。

学生のための地質系業界説明会

学生会員が将来就職する可能性のある地質・資源・建設分野に関わる地質系企業・団体との対面説明会を企画・開催し、学生会員が業界を研究するサポートサービスです。今年度は、対面説明会とオンラインによる説明会の2つを行います。

対面説明会

会社別の専用ブースで会社担当者がポスター、資料、PCによる画像などを用いた説明を行います。大いに質問をして業界の情報入手してください。

日時：2022年9月5日（月）11:00～16:00

会場：早稲田キャンパス14号館5階

参加会社の紹介資料を、8月中旬から大会HPに掲載します。訪問時の参考にしてください。

学術大会の事前参加登録は不要ですが、当日の人数把握のため、本企画への参加申し込みを8月末から行います。当日の飛び込み参加もOKですが、事前申込者を優先します。なお、コロナ感染防止を考慮し、ブース毎に人数制限を行うことがあります。

オンライン説明会

学会のHPを介して参加会社の紹介資料を閲覧し、その後オンライン説明を受ける企画です。全国どこからでも手軽に参加できます。

日時：2022年9月16日（金）午後

実施方法：Zoomのブレイクアウトルーム機能を利用して行います。各会社1時間枠の説明会を5つ予定しています。HPに掲載する各会社の紹介資料をご覧になって訪問したい会社があれば、最大5社オンライン訪問ができます。

学術大会の事前参加登録は不要ですが、当日のオンライン入室の人数を把握するため、本企画への参加申し込みを8月末から行います。当日の飛び込み参加もOKですが、事前申込者を優先します。

詳しくは、大会HPをご確認ください。 https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp129/static/gyokai_support

参加企業一覧

会社・団体名（50音順）	対面 9/5	オンライン 9/16
株式会社INPEX	●	●
応用地質株式会社	●	●
川崎地質株式会社	●	●
基礎地盤コンサルタンツ株式会社	●	●
クニミネ工業株式会社	●	●
株式会社 建設技術研究所	●	●
原子力発電環境整備機構	●	●
興亜開発株式会社	●	●
国土防災技術株式会社	●	
株式会社コスモ建設コンサルタント		●
株式会社サクセン	●	●
三和ボーリング株式会社	●	●
株式会社J-POWER設計コンサルタント	●	
住鉱資源開発株式会社		●
住友大阪セメント株式会社	●	●
住友金属鉱山株式会社		●
石油資源開発株式会社	●	●
太平洋セメント株式会社	●	●
株式会社ダイヤコンサルタント	●	●
株式会社地圏総合コンサルタント		●
株式会社地層科学研究所	●	
中央開発株式会社	●	●
株式会社ドーコン		●
トキワ地研株式会社		●
飛島建設株式会社		●
株式会社日さく		●
日鉄鉱業株式会社	●	●
日特建設株式会社	●	●
日本工営都市空間株式会社		●
株式会社ニュージェック	●	●
ハイテック株式会社	●	●
株式会社バスコ	●	●
株式会社芙蓉コンサルタント		●
株式会社村尾技建		●
明治コンサルタント株式会社	●	●

市民講演会『関東の自然災害と防災』

日時：2022年9月4日（日）13:00～16:30（無料、事前申込不要）

会場：早稲田大学早稲田キャンパス15号館03教室

13:00～13:05 支部長挨拶

13:05～14:10 講演1 宍倉正展氏（産業技術総合研究所）「関東の海溝型地震・津波履歴に関する最近の知見」

相模トラフで発生する関東地震の履歴は、古くから研究されてきたが、海岸段丘年代の見直しや、津波堆積物の発見、歴史記録の再検討により、新たな発生履歴とメカニズムが提示されている。またこれまで不明確だった日本海溝沿いの海溝型地震の履歴についても、明らかになりつつある。これら

の最近の新たな知見について紹介していく。

14:10～15:15 講演2 山崎晴雄氏（東京都立大学名誉教授）「東京の地形と自然災害」

地球温暖化に伴って、これまでの想定を上回る豪雨や台風などによる自然災害が頻繁に認められるようになった。引き起こされる自然災害の多くは、地域の地形や地質の細かな特徴と密接に関係している。そこで、今回の講演では、東京の地形についてその成り立ちを説明し、そこから導かれる災害や防災、更には防災における自然環境教育の重要性を説明する。

15:15～15:25 休憩

15:25～15:30 講演3 土屋信行氏（公財 リバーフロント研究所）「東京低地の災害に備える防災まちづくり」

東京の東部は大河川と多くの支川が流下する低地帯で、大正から昭和40年代にかけて進行した地盤沈下の影響で、地盤高が潮位より低い「ゼロメートル地帯」が広範囲に分布しており、昭和30年代頃までたびたび大きな水害に見舞われてきた。また地震時には液状化の原因ともなる軟弱な地盤が厚く堆積している。この地域では様々な整備が進められ、近年では大水害は発生していない。しかし今後起こりうる大規模な洪水や大潮、大規模地震等に対する脆弱性を踏まえ、様々な工夫を凝らした防災まちづくりが必要であり、それを着実に実現していく方策が求められている。

16:30 閉会

問い合わせ先：第129年学術大会実行委員会

担当：笠間友博 メール：kasama@mh.scn-net.ne.jp

※本講演会は、令和4年科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業です。

徳永重康展

日程：9月4日（日）～6日（火）

会場：14号館1Fロビー（予定）

早稲田大学教授で日本地質学会長も務めた徳永重康は、県の石・東京都の化石「トウキョウホタテ」の記載命名を行った事でも知られています。今大会では早稲田大学の協力のもと、会場にて、徳永重康に関するパネル展示（標本も展示予定）を行います。

家族巡検「生命の進化を楽しく学ぼう」

家族巡検の参加事前申込みは8月8日（月）に締め切りです。上野動物園と国立科学博物館で動物と恐竜を見学しながら、家族で楽しく「生命の進化を学べる」企画です。家族で大会に参加される予定の方は是非参加下さい（会員の場合どなたでも申し込み可能ですが、会員の家族が優先となります）。

・実施日：2022年9月3日（土）

・予定：9:50 上野動物園集合、15:00 国立科学博物館解散
午前：上野動物園（講師 犬塚則久氏）

午後：国立科学博物館（講師 對比地孝亘氏）

- ・募集人数：25名（学会員であれば応募可能ですが、学会員の家族を優先とします）
- ・参加費：大人2500円、子供（中学生以下）500円
- ・大会HPにある専用申し込みフォームから申し込み下さい。

<https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp129/static/gyoji#family>

ジュニアセッション（e-poster）

コアタイム 9月10日（土）
10:30～12:30

日本地質学会地学教育委員会では、地学普及行事の一環として、地学教育の普及と振興を図ることを目的として、学校における地学研究を紹介する発表会をおこなっています。名称は「日本地質学会ジュニアセッション」と変更しています。本大会でも、小・中・高等学校の地学クラブの活動、および授業の中で児童・生徒が行った研究の発表を予定しています。今年は、学術大会セッションと同様にe-posterによる発表となりますが、zoomでのリアルタイム質疑応答も予定しています。

参加校等の最新情報については大会HPをご参照ください。

懇親会・会期中の飲食について

- ・懇親会は行いません。
- ・今大会ではお弁当の予約・販売は実施しません。
- ・休憩室に給水器等は設置はありません。飲料水は学内の売店、自動販売機などのご利用をお願いします。
- ・講演会場内では、原則水分補給のみ可ですが、ランチョンなどの時間配分の制約から、お食事可とします。ただし、黙食にご協力下さい。
- ・会期中大学内の食堂／生協は営業しておりません。周辺店舗／コンビニ等を各自ご利用ください。

その他のお知らせ

- ・手荷物について：会場内での手荷物のお預かりは致しません。参加者各自での管理をお願い致します。
- ・無料WiFiなどのご用意はありません：ただし、14、15号館においてeduroamの利用は可能です。eduroam参加機関のアカウントをお持ちの方は、無線LAN接続が利用できます。利用方法については、eduroam JP (<https://www.eduroam.jp/>) を参照してください。場所によって電波状況が弱い場合があります。ご了承ください。

対面会場での注意点

- 会場内ではマスク着用にご協力ください。

残暑厳しい時期です。軽装でお出かけいただき、各自水分補給を心がけ、無理のない範囲でご協力をお願いいたします。

- 発表終了時には拍手をお願いします

1題の口頭発表はわずか15分で終了します（セッションの場合）。しかし、その発表の裏には、発表者の弛まぬ努力と、研究や発表準備に費やした多くの時間があるはずです。講演終了時には、惜しめない拍手をお願いします。

- 無断で撮影をしてはいけません！

口頭発表・ポスター発表を、発表者に無断で写真撮影・ビデオ撮影してはいけません。撮影には発表者の許可が必要です。また、それらを発表者の許可なく、SNS等で配信もしてはいけません。

オンライン（e-poster）会場での注意点

- 参加登録した本人以外はアクセスできません。

参加登録していない方のアクセスは認めません。参加登録していない方にログイン情報を伝えるのはルール違反です。絶対にしないでください。不正なアクセスが判明した場合には退室いただく場合があります。

- 無断で撮影をしてはいけません

無断で録画・録音したり、スクリーンショットとして画像保存しないでください。撮影には発表者の許可が必要です。また、それらを発表者の許可なくSNS等で配信してもいけません。

問い合わせ先

【口頭発表期間中（9/4～6）の問い合わせ】

○日本地質学会第129年学術大会現地事務局
（株式会社ソウブン/ドットコム 担当：丸山）
電話：090-6132-8299（会期中のみご利用頂けます）

【上記以外の問い合わせ先】

○日本地質学会行事委員会／地学教育委員会／学会事務局
※9/10～11以外は平日9:30～18:00
〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15井桁ビル6F
TEL：03-5823-1150
FAX：03-5823-1156
e-mail：main@geosociety.jp
○日本地質学会第129年学術大会現地事務局
（株式会社ソウブン/ドットコム 担当：丸山）
TEL 03-3893-0111（平日9:30～17:30のみ可）
FAX 03-3893-6611
e-mail: h.maruyama@soubun.biz

発表者へ

発表者は本学会または共催学協会の会員に限ります（招待講演者を除く）。共同発表の場合は、この制限を代表発表者（講演要旨に印のついた著者）に適用します。やむを得ない事情により、あらかじめ連記された共同発表者内で発表者の変更を希望する場合は、必ず事前に行事委員会（会期前は学会事務局、会期中は学会本部）に連絡して下さい。この場合も、シンポジウム以外の場合は「最大2題まで申し込みが可能（招待講演を含む）」の制限を守るものとします。代理人の代読、会場内での突然の発表者変更、発表順序の変更は認めません。

口頭発表

- ・1題15分（質疑応答と講演者の交代時間3～5分を含む）。ただしシンポジウムとセッション招待講演は除きます。
- ・口頭発表者は発表時間を厳守して下さい。持ち時間15分のうち、発表は10～12分とし、質疑応答と講演者の交代時間を確保してください（30分の招待講演の場合、発表20～25分）。発表に際しては座長の指示に従い、会場運営がスムーズに行われるようご協力下さい。
- ・何らかの理由で自身の発表時間に間に合わない場合（遅刻）であっても、発表時間帯の変更は行いません。遅刻の場合、原則その発表はキャンセルと判断し、その時間帯は休憩時間といたします。
- ・口頭発表会場には液晶プロジェクターとWindowsパソコン（OS: Windows 10対応、PowerPoint2010.2013.2016対応）を用意します。発表はできるだけ会場備え付けのWindowsパソコンをご使用下さい（ただしMacご利用の方、動画を使用する方などはご自身のパソコンをご用意下さい）。プロジェクター解像度は1024×768ドット（XGA）です。
- ・セッション開始前に試写し正常に投影されることを必ず確認してください。確認作業の混雑とそれによるセッション開始の遅れを防ぐため、早めの確認作業をお願いします。なお、発表者が事前確認を怠ったために発表時にトラブルが生じて時間延長等の措置は取りません。

【講演ファイルをUSBメディアでご持参の方】

ファイルのインストールは、セッション開始前に、講演会場前方パソコン設置台に行ってください。各会場のパソコンのデスクトップ上には日付（例0904）のフォルダが配置されており、その中にセッション番号のサブフォルダ（例：T1）が配置されています。そのサブフォルダ内に講演ファイルを保存してください。ファイル名は「発表番号と演者氏名」にしてください（例：R1-O-1東京太郎、T1-O-13早稲田花子）。インストール後、ファイルが正常に投影されることを必ず確認してください。特に、会場のPCと異なるバージョンで作成されたパワーポイントのファイルは、レイアウトが崩れる場合がありますのでご注意ください。フォントは特殊なものではなく、PowerPointに設定されている標準的なものを使用して下さい。セッション終了後、世話人がファイルを削除します。

【ご自分のパソコンを使用して講演する方】

Macパソコンをお使いになる方、ソフトの互換性からレイアウトが崩れる可能性のある方、パワーポイント以外のプレゼンテーションソフトをご利用の方は、ご自身でパソコンをご用意ください。会場の液晶プロジェクターにパソコン接続ケーブル（ケーブル形状はD-SUB15ピン）を用意します。会場に準備されている講演用パソコンからケーブルを外し、ご自身のパソコンに接続してください。プロジェクターの解像度設定はXGA（1024×768）です。講演前に出力調整の上、接続してください。Macパソコンなどパソコンによってはコネクタが必要になる場合があります。必ずD-SUB15ピンのアダプターをご持参ください（会場にはありません）。接続は発表者自身が責任を持って行ってください。セッション開始前に試写し、正常に

投影されることを必ず確認してください。

ポスター発表（e-poster）

- ・ポスター発表は全て学術大会運営システムConfit (<https://about-confit.atlas.jp/>) のe-poster機能を利用したオンライン発表となります。e-poster作成要領は大会HPを参照してください。
 - ・e-posterの掲示・閲覧可能期間は9月4日から10月11日までの予定です。この期間、大会参加者はe-posterにアクセスして閲覧でき、e-posterシステムのコメント機能（文字チャット）を使ったディスカッションも可能です（後述のコアタイム以外の時間も可能）。文字チャットでの質問・コメントに対して発表者はできるだけ応答するようにしてください。コアタイムは、10日（土）が10:30～12:30、11日（日）が11:00～13:00です。質疑応答はzoomブレイクアウトルームを利用して行います。プログラムもしくは各講演画面よりzoomに接続して下さい。講演者にはzoomアクセス情報を事前にメールで連絡します。zoomブレイクアウトルームへの入り方は、大会HPも参照してください。
 - ・ポスター内に発表番号・発表題名・発表者名を必ず明記して下さい。
 - ・申込時にエントリーをしたポスター発表に対し、別記要領にて優秀ポスター賞の審査が行われます。
 - ・e-posterの投稿を9月1日（木）まで受け付けます。これを過ぎるとアップロードできなくなります（発表キャンセルになります）。この日まで必ずシステムにe-posterファイルをアップロードしてください。
- （注）e-poster推奨環境：以下のブラウザで正常に動作することを確認しています。

Google Chrome 最新版/Mozilla Firefox 最新版/Microsoft Edge 最新版/Safari 最新版

優秀ポスター賞について

今大会でも学術発表の優秀ポスターに対して「日本地質学会優秀ポスター賞」を授与します。また、優秀ポスター賞はエントリー制になります。エントリーされた講演には「エントリー」と記してありますので、ご確認ください。賞の授与は毎日3～5件の予定です。受賞者には後日賞状・副賞を送付します。受賞ポスターは、その栄誉をたたえ、大会期間中、大会サイトに公表します。大会終了後、News誌（年会報告記事）に氏名、発表題目、受賞理由を掲載します。

【審査】

審査は各賞選考委員会が行い、学会長がこれを承認します。選考委員会は日替わりで、行事委員会委員5名、大会実行委員会代表1名および各賞選考委員会委員2名の合計8名により構成されます。選考委員氏名は大会終了後に公表します（News誌11月号を予定）。

【審査のポイント】

（研究内容）オリジナリティ
（プレゼンテーション）レイアウト・中心点の明示・わかりやすさ・美しさ・斬新さ

第129年学術大会 (2022東京・早稲田大会) 全体日程

発表方法		口頭 1日目 9月4日(日)		口頭 2日目 9月5日(月)		口頭 3日目 9月6日(火)	
発表会場	14号館 教室番号 (収容人数)	12:30-13:30 ランチョン	13:30-15:30	12:30-13:30 ランチョン	8:45-12:00	13:30-17:45	12:30-13:30 ランチョン
1	B101 (243)	T4.地球史		T14.ジオパーク		T10.鉱物資源研究の最前線	
2	101 (293)	G1.構造地質		T5.グローバル層序学・年代学		T6.日本列島の起源再訪	
3	102 (293)	S1.関東の地質		T1.変成岩とテクトニクス		G6.岩 鋳火山	
4	401 (160)	T7.マグマソースから…※		T11.堆積地質学の最新研究		T2.新生界地質から読み解く 西南日本弧の成立	
5	402 (160)	G2.第四紀		T3.南大洋・南極氷床		T13.都市地質学	
6	403 (160)	G3.環境地質		T8.文化地質学		T9.カーボンゼロエミ ッションに貢献する…※	
		G4.地学教育		G5.地域地質・層序		T13.都市地質学 G8.応用地質…	
その他		市民講演会 (13:00-16:30 ; 15号館)		学生のための地質系業界説明会 (11:00-16:00 ; 14号館5階)			
		地質情報展2022とうきょう (15号館) (注) 9/3-5開催		地質情報展2022とうきょう (15号館)		徳永重康展 (14号館1階ロビー)	
		徳永重康展 (14号館1階ロビー)		徳永重康展 (14号館1階ロビー)		徳永重康展 (14号館1階ロビー)	

e-poster	ポスター1日目 9月10日(土)		ポスター2日目 9月11日(日)	
	フラッシュトーク (任意) 各3分	コアタイム	フラッシュトーク (任意) 各3分	コアタイム
	9:00-10:30	10:30-12:30	9:00-11:00	11:00-13:00
	ジェネラルセッション G1.構造地質 G4.地学教育・研究史 G5.地域地質・層序・年代 G7.海洋地質 G8.応用地質・地質災害・技術 G9.古生物・古環境		トピックスセッション T1.変成岩とテクトニクス T2.新生界地質から読み解く西南日本弧の成立 T4.地球史 T6.日本列島の起源再訪 T7.マグマソンスからマグマ供給システムまで T8.文化地質学 T12.火山噴出物から読み解く火山現象と防災への応用 T13.都市地質学：自然と社会の融合領域	

※口頭発表

T7. マグマソースからマグマ供給システムまで

T9. カーボンゼロエミッションに貢献する石油天然ガス石炭地質学・

有機地球化学

T12. 火山噴出物から読み解く火山現象と防災への応用

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 4 日（日）午前

会場	第 1 会場（14 号館 B101 教室）	第 2 会場（14 号館 101 教室）	第 3 会場（14 号館 102 教室）
	T4. 地球史	G1. ジェネラル サブセッション構造地質	S1. 関東の地質：露頭から大深度地下まで
	座長：富松由希, 佐藤峰南, 武藤 俊	座長：岡崎啓史, 中村佳博, 神谷奈々	座長：加藤 潔, 笠間友博
9:00	09:00 T4-O-1 硫化鉱物の局所イオウ同位体と微量元素分析による海洋中の硫酸と微量金属元素濃度の定量法の開発とエディアカラ紀海洋への応用. *小宮 剛, 難波恒太, 澤木祐介, 平田岳史, 牛久保孝行, 清水健二 09:15 T4-O-2 西オーストラリア・タンビアナ累層(27億年前)のストロマトライトの堆積環境と後期太古代表層水のリン濃度. *長尾亮佑, 吉田 聡, 澤木佑介, 大野 剛, 上野雄一郎, 小宮 剛 09:30 T4-O-3 グリーンランド北西部の中原生界Qaanaaq層堆積岩中のアクリタク化石の化学分類学的研究. *安藤卓人, 原 勇貴, 三瓶良和, 沢田 健 09:45 T4-O-4 東北日本ジュラ紀付加体中の遠洋深海堆積岩層における石炭紀-ペルム紀境界. *武藤 俊, 高橋 聡, 村山 雅史 10:00 T4-O-5 (招待講演) 堆積有機分子を活用した地球生命史イベントの復元. *齊藤諒介 10:30 (休憩) 10:45 T4-O-6 九州～四国に分布する三宝山帯上部三疊系玄武岩の地球化学的特徴とWrangellia LIPとの関連. *神田橋知成, 山下勝行, 川上高平, 尾上哲治 11:00 T4-O-7 後期三疊紀Carnian Pluvial Episodeにおけるパンサラッサ遠洋深海域での古海洋環境変動の復元. *曾田勝仁, 尾上哲治 11:15 T4-O-8 イタリア南部の後期三疊紀ノーリアン/レーティアン境界における強親鉄性元素およびオスミウム同位体比変動. *佐藤峰南, 石川 晃, 富松由希, 尾上哲治, Rigo Manuel 11:30 T4-O-9 層状チャートのオスミウム同位体比からみた三疊紀-ジュラ紀境界の環境変動. *村井亮太, 黒田潤一郎, 岡田有希, 吉田夏子, 鈴木勝彦, 堀 利栄 11:45 T4-O-10 美濃帯犬山地域の三疊紀/ジュラ紀境界における放散虫-コノドント化石層序. *富松由希, 尾上哲治, Rigo Manuel	09:00 G1-O-1 西南日本付加体で見られる複数の空隙率 - P波速度曲線. *矢部 優, 濱田洋平, 北村真奈美, 福地里菜, 橋本善孝 09:15 G1-O-2 オパールガウジの摩擦特性の温度変化と沈み込み帯の断層運動への適用. *金川久一, 中西智哉, 藤森純矢, 嵯峨野紗弓, 澤井みち代 09:30 G1-O-3 過去の地震断層の発熱履歴・ひずみ・変形機構：白亜系四万十帯横浪メランジュ. *橋本善孝, 川路真子, 三谷陣平, 内田泰蔵 09:45 G1-O-4 深部沈み込み境界面での流体活動:長野県大鹿村中央構造線の例. *中村佳博, Sasidharan Kiran, Madhusoodhan Satish-Kumar 10:00 G1-O-5 地震サイクルに伴う動的な流体圧変動量の地質学的制約. *細川 貴弘, 橋本善孝 10:15 G1-O-6 古地磁気学的手法による地震断層の熱イベントの認定：四国白亜系四万十帯横浪メランジュ. *内田泰蔵, 橋本善孝 10:30 G1-O-7 軟岩に対する圧密試験の有用性と新生界宮崎層群の形成過程. *吉本剛瑠, 鈴木雄大, 張 鋒, 千代延 俊, 大森康智, 山本由弦 10:45 G1-O-8 長野県南部, 下条山麓断層の活断層露頭と活動性. *亀高正男, 下釜耕太, 岩崎将明, 酒井 亨, 岡崎和彦, 中田英二, 相山光太郎, 林崎 涼, 飯田高弘 11:00 G1-O-9 遠洋性堆積物の続成過程における水の起源. *水野 瞳, 山口飛鳥, 井尻 暁, 佐野貴司 11:15 G1-O-10 サンカルロスオリビン多結晶体の脆性塑性遷移領域におけるレオロジーと海洋プレートの断層強度プロファイル. *岡崎啓史 11:30 G1-O-11 単純な地形パラメータによる浅部プレート境界断層における摩擦分布推定手法の開発. *高下裕章, 芦 寿一郎, 朴 進午, 宮川歩夢, 矢部 優 11:45 G1-O-12 構造イベントでは説明できない表層での変状. *中田英二, 平田康人, 林崎 涼	09:00 S1-O-1 白亜紀古日本陸弧-海溝系の連続性と前弧堆積盆の地質分布からみた関東地域の位置付け. *安藤寿男 09:30 S1-O-2 関東平野地下における中央構造線の東方延長. *高木秀雄 10:00 S1-O-3 日本列島の第四紀東西圧縮の原因と房総前弧海盆の急激な隆起テクトニクス. *高橋雅紀 10:30 S1-O-4 関東地域の地殻・マントル構造の特徴. *佐藤比呂志, 阿部進, 松原 誠, 石山達也, 加藤直子, 蔵下英司, 岩崎貴哉, 平田 直 11:00 S1-O-5 南関東における上総層群下部の指標テフラとその意義 - 2.5Maのざくろ石テフラを中心に-. *田村糸子 11:30 S1-O-6 上総層群とテフラからみた関東における海域から陸域への地形変化過程. *鈴木毅彦

※講演番号は、シンポジウム (S)、トピックセッション (T)、ジェネラルセッション (G) のそれぞれに、ポスター (P) / 口頭 (O) の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者、(招待)：招待講演、(エントリー)：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 4 日（日）午前

会場	第 4 会場（14 号館 401 教室）	
	T7. マグマソースからマグマ供給システムまで	
	座長：江島圭祐, 下岡和也	
9 : 00	09:00	T7-O-1 ミクロネシアコスラエ島のアルカリ火山岩類中に含まれる超塩基性捕獲岩類. *坂本 泉
	09:15	T7-O-2（招待講演） 単一火山におけるマグマ多様性とその成因：千島弧南部・利尻火山での例. *谷内 元 , 栗谷 豪, 中川光弘
	09:45	T7-O-3 美濃帯犬山セクションの層状チャートに貫入する塩基性岩脈の意義. *新保陽輔 , 平野直人, 秋澤紀克, 角野浩史
	10:00	T7-O-4 島根県奥出雲町高田付近に分布する高田花崗閃緑岩の成因. *中山瀬那 , 亀井淳志, 岩田智加, 葉師寺 亜衣
	10:15	T7-O-5 ブチスポット火山がもたらすケイ長質捕獲岩:太平洋プレート最古部の海洋地殻物質断片. *三國和音 , 平野直人, 秋澤紀克, 町田嗣樹
	10:30	T7-O-6 洞爺火砕流堆積物の長石組成分布. *飯島碩耶 , 佐々木 実
	10:45	T7-O-7 斜長石中の元素拡散を用いた深成岩体形成過程の制約可能性評価 -三河地域に分布する深成岩体を例として-. *諸星暁之 , 山岡 健, ウォリス サイモン
	T12. 火山噴出物から読み解く火山現象と防災への応用	
	座長：辻 智大, 古川邦之	
	11:15	T12-O-1 大分県姫島, 城山溶岩に産出する黒曜石の地質学的研究. *古川邦之 , 宇野康司, 堀内 悠, 壺井基裕
	11:30	T12-O-2 阿蘇カルデラから170 km離れた山口市徳地におけるAso-4火砕流堆積物の発見. *辻 智大 , 太田岳洋, 藤原尚起, 中田英二, 潮田雅司, 中村千怜
	11:45	T12-O-3 遠方に流下したタービダイト堆積物から火山発達史の情報を得る試み：小笠原硫黄島火山の例. *長井雅史 , 三輪学央, 小林哲夫

第 5 会場（14 号館 402 教室）	
G2. ジェネラル サブセッション第四紀地質	
座長：渡辺正巳, 竹下欣宏, 三田村宗樹, 長橋良隆	
09:00	G2-O-1 恵比須峠福田テフラ降灰時の近畿地方の水系接続の推定. *里口保文
09:15	G2-O-2 長野盆地の地下地質－長野市川中島温泉ボーリングのカッティングスの岩相記載に基づいて. *竹下欣宏 , 浅田愛美
09:30	G2-O-3 北海道石狩平野の縄文時代の海面変化と遺跡群. *嵯峨山 積 , 越田賢一郎, 渡井 瞳
09:45	G2-O-4 山口県南東部, 島田川中流域の古植生変遷-弥生時代における高地性集落と生業-. *渡辺正巳 , 田畑直彦
10:00	G2-O-5 有孔虫群集に基づく中海における過去約600年間の古環境の変化. *嶋池実果 , 辻本 彰, 廣瀬孝太郎, 瀬戸 浩二, 赤対紘彰, 入月俊明
10:15	G2-O-6 北海道に分布する周氷河性斜面における堆積物の特徴. *小安浩理 , 加瀬善洋, 川上源太郎, 石丸 聡, 仁科健二
10:30	G2-O-7 2021年熱海土石流災害の発生原因の究明のための地球科学的研究. *北村晃寿
G3. ジェネラル サブセッション環境地質	
座長：田村嘉之	
11:00	G3-O-1 千葉県九十九里浜におけるガス湧出地点の堆積構造の例. *吉田剛 , 小島隆宏, 風岡 修
11:15	G3-O-2 旧荏山町地下水・地盤沈下シミュレーションの事後監査（その2）. *藤崎克博
11:30	G3-O-3 自治体観測井による2017年と2020年の関東地下水盆の地下水位. *古野邦雄 , 香川 淳
11:45	G3-O-4 印旛沼流域における谷津の地下水調査. *岩井久美子 , 楠田 隆, 田村嘉之, 瀧 和夫, 中村正直, 近藤昭彦

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。
 ※太字氏名：代表発表者、（招待）：招待講演、（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 4 日（日）午後

会場	第 1 会場（14 号館 B101 教室）	第 2 会場（14 号館 101 教室）	第 3 会場（14 号館 102 教室）
	T4. 地球史	G1. ジェネラル サブセッション構造地質	S1. 関東の地質：露頭から大深度地下まで
	座長：富松由希，佐藤峰南，武藤 俊	座長：神谷奈々，高下裕章	座長：笠間友博，向山 栄
13：30	13:30 T4-O-11（招待講演） 中生代における海洋ベントスの行動生態の変遷：生痕化石からの証拠. *泉 賢太郎 14:00 T4-O-12 白亜系海洋無酸素事変層準堆積岩の菌類バリノモルフ分析による菌類フロラの変遷復元. *池田雅志，沢田 健，安藤卓人，高嶋礼詩，西 弘嗣 14:15 T4-O-13 後期白亜紀東アジア大陸縁後背地レビューと後背地の隆起が前弧海盆堆積体に及ぼす影響について. *才鴈純平 14:30 T4-O-14 ルテチウム-ハフニウム放射年代を用いた遠洋性褐色粘土の年代決定手法の開発. *大田隼一郎，木村純一，常 青，加藤泰浩 14:45 T4-O-15 和歌山県の中部中新統田辺層群から産出したブンブク目化石. *小原正顕 15:00 T4-O-16 秋田県北部榎山沢地域に分布する上部鮮新統～下部更新統天徳寺層・笹岡層の浮遊性有孔虫化石群集に基づく古環境変動の復元. *山崎 誠，向江祐貴，根本直樹，池原 実 15:15 T4-O-17 砂に潜るタマサンゴに認められる横分裂による世代交代. *千徳明日香，清水啓介，名嘉 翼，徳田悠希	13:30 G1-O-13 足柄層群中の安山岩脈群から復元される伊豆弧衝突帯の古応力方向. *竹山翔悟，高木秀雄 13:45 G1-O-14 塩ノ平一車断層帯から読み取られた複合面構造と応力逆解析による運動履歴の推定. *酒井 亨，亀高正男，青木和弘，島田耕史，高木秀雄 14:00 G1-O-15 根尾谷断層破砕帯地下浅部における断層ガウジの特徴と鉱物充填. *大谷具幸，矢田部和真，森 崇，梅村綾子，吉田英一，勝田長貴 14:15 G1-O-16 カルサイト双晶密度による多鉱岩石とセメント材料の歪・応力の推定方法. *坂口有人 14:30 G1-O-17 新第三系前弧海盆に発達する褶曲構造と圧密異方性. *神谷奈々，林 為人，林田 明 14:45 G1-O-18 Evolution of quartz crystallographic preferred orientation (CPO) with increasing strain. *Yeo Thomas，Shigematsu Norio，Wallis Simon，Katori Takuma 15:00 G1-O-19 四万十帯伊田層に見られる混在岩のダイアピル状の構造と成因. *岩見 丞，坂口有人 15:15 G1-O-20 小断層方位から複数の応力と摩擦係数を自動検出する逆解析法. *佐藤浩志	13:30 S1-O-7 東京の地盤と応用地質的課題. *中山俊雄 14:00 総合討論
	T1. 変成岩とテクトニクス		
	座長：大柳良介		
			14:30 T1-O-1 カナダスレーブ地質区アカスタ片麻岩の黒雲母と角閃石のK-Ar 及び⁴⁰Ar/³⁹Ar年代. 佐藤 恵，兵藤博信，*板谷徹丸 14:45 T1-O-2 釜石スカルン鉱床中のザクロ石U-Pb年代とスカルンの地球化学的特徴. *福山繭子，小笠原正継，堀江憲路，竹原真美 15:00 T1-O-3 板状鉱物の形態選択配向の変形による改変：マーチモデルを用いた2次元シミュレーション. *増田俊明 15:15 T1-O-4 Seismo - Crystal Diagram in Shear Crack Jog of the Plate Boundary Metamorphic Rocks. *鳥海光弘

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 4 日（日）午後

会場	第 4 会場（14 号館 401 教室）	第 5 会場（14 号館 402 教室）	第 6 会場（14 号館 403 教室）
	T11. 堆積地質学の最新研究	T8. 文化地質学	G4. ジェネラル サブセッション地学教育
	座長：松本 弾，横川美和	座長：大友幸子，石橋弘明	座長：浅野俊雄，矢島道子
13：30	13:30 T11-O-1 コア画像の解析に基づいた海底扇状地システムの発達に伴う生痕化石 <i>Phycosiphon</i> の密度の長期変動. *菊地一輝，成瀬 元 13:45 T11-O-2 上部白亜系和泉層群砂岩層に見られる多重逆級化構造の特徴－CNN を用いた画像認識技術による粒子配列解析－ *長門巧，成瀬 元 14:00 T11-O-3 人工データを用いた日本海溝における二次元混濁流逆解の検討. *蔡 之榕，成瀬 元 14:15 T11-O-4 混濁流・土石流ハイブリッドイベント層の堆積構造区分の成因: 粒子配列解析に基づく流れプロセスの推定. *田中凌悟，成瀬 元 14:30（休憩） 14:45 T11-O-5 機械学習を用いた津波堆積物の逆解析による断層パラメーターの推定. *飯嶋耕崇，成瀬 元，菅原大助 15:00 T11-O-6 生物源物質の混入と続成作用による化学組成改変を補正する化学風化指標（RW index）の提示. *張 天逸，太田 亨 15:15 T11-O-7 河川と海岸の礫形デジタル計測：海岸には扁平円礫が多い. *石渡 明	13:30 T8-O-1（招待講演） 大地が生環境に与えたかたち. *中谷礼仁 14:00 T8-O-2 地質と城郭：足尾山地ジュラ紀付加体の例. *伊藤 剛，市澤泰峰 14:15 T8-O-3 京都市安楽寿院の平安時代後期凝灰岩製石仏の石材産地の検討. *川村教一，崎山正人，中井淳史 14:30 T8-O-4 兵庫県六甲山地南東麓，住吉－御影地域と芦屋－西宮地域の花崗岩とその利用. *先山 徹 14:45 T8-O-5 地質状況に適したシン垣型式の選定－沖縄県大宜味村の猪垣を例に－ *箴島聖二 15:00 T8-O-6 遺跡内堆積土の透水性と岩石の風化過程について～溶結凝灰岩の風化皮膜に着目して～ *猪股雅美 15:15 T8-O-7 宮沢賢治「台川」の地質概説. *大友幸子，赤坂真奈	13:30 G4-O-1 ジオ鉄のさががけ脇水鉄五郎（1867-1942）. *矢島道子 13:45 G4-O-2 忘れられた地学教育 - 福田連の実験鉱物地質学. *宮下 敦 14:00 G4-O-3 地域地質を活かしたICT教材－iPad を使った飯能河原の礫の調査－ *加藤 潔，阿部葉子，岡田 織，石橋文人，田口凌太 14:15 G4-O-4 教員を対象にしたアウトリーチ活動－神戸の地質・地形を学ぶ会/ Kobe Geo study Meeting－. *有道俊雄 14:30 G4-O-5 防災教育での地学の役割. *浅野俊雄 14:45 G4-O-6 学生のヒマラヤ野外実習プログラム10年間. *吉田 勝，学生のヒマラヤ野外実習プロジェクト 15:00 G4-O-7 博物館における砂標本収集の意義とその活用. *中条武司，別所孝範 15:15 G4-O-8 遠隔教育におけるネットワーク利用によるリモート実験室：走査型電子顕微鏡実験の実施例. *大森聡一

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 5 日（月）午前

会場	第 1 会場（14 号館 B101 教室）	第 2 会場（14 号館 101 教室）	第 3 会場（14 号館 102 教室）
	T14. 大地と人間活動を楽しみながら学ぶジオパーク 座長：天野一男，松原典孝	T5. グローカル層序学・年代学 座長：高嶋礼詩，折橋裕二，星 博幸	T1. 変成岩とテクトニクス 座長：遠藤俊祐，平内健一
8：45	09:30 T14-O-1 箱根ジオパーク実践報告～テーマの補強とガイド研修への活用～ *笠間友博 09:45 T14-O-2 箱根ジオパークによる国土地理院自然災害伝承碑への取組み及びその活用。 *小笹直人，市川 燈 10:00 T14-O-3 山陰海岸ジオパーク京丹後エリアにおける漁港の立地と地形的特徴・地質学的特徴の関係性解明。 *松原典孝，石井三重子，目代邦康 10:15 T14-O-4 GigaPanを用いて作成した超高解像度露頭画像の活用：山陰海岸ジオパークを例として。 *川村教一，澤口 隆2，佐野恭平，松原典孝 10:30 T14-O-5 GEO×アクティビティプロジェクト ～ジオパークがつなぐ地域の和～ *藤原勇樹，山陰海岸ジオパーク推進協議会 10:45 T14-O-6 筑波山地域ジオパークにおけるジオサイトの再設定と評価。 *高木秀雄 11:00 T14-O-7 糸魚川ユネスコ世界ジオパークにおける県立高校と連携したジオパーク学習の実践。 *小河原孝彦，香取拓馬，茨木洋介，郡山鈴夏，竹之内 耕，小林猛生 11:15 T14-O-8 SDGsを活用した地学教育プログラム。 *郡山鈴夏，茨木洋介，小河原孝彦，香取拓馬，小林猛生，竹之内 耕 11:30 T14-O-9 日本海拡大事件とジオパーク。 *天野一男 11:45 T14-O-10 奈良大仏建立に使われた鉱物資源とジオパーク。 *佃 栄吉	08:45 T5-O-1（招待講演） チバニアンGSSPの批准とその年代層序学的意義。 *岡田 誠 09:15 T5-O-2（招待講演） 古海洋Os同位体記録から読み取る古環境情報。 *松本廣直 09:45 T5-O-3 別府湾堆積物は年縞か：表層堆積物と珪藻群集の経年観測に基づく葉理の成因検討。 *鈴木克明，加 三千宣，松浦寿樹，守屋和佳 10:00 T5-O-4 青森県，下北半島西部に分布する新第三紀珪長質火山岩類年代層序の再検討：「仏ヶ浦カルデラ」の提唱。 *盛合 秀，折橋裕二，佐々木 実，沼田翔伍，仁木創太，浅沼 尚，平田岳史 10:15 T5-O-5 長野県中部に分布する守屋層火山岩類（中新統）のジルコンU-Pb年代とその層序学的意義。 *星 博幸，岩野 英樹，檀原徹 10:30 T5-O-6 凝灰岩のアバタイト微量元素組成の層序学的・文化地質学的研究への利用。 *高嶋礼詩 10:45 T5-O-7 モンゴル国ゴビ砂漠，恐竜歯化石のU-Pb年代測定：最初の試み。 田辺美羽，千葉謙太郎，*青木一勝 11:00 T5-O-8 宮城県気仙沼大島に分布する上部ジュラ系～下部白亜系（鹿折層群・大島層群）の炭素同位体比層序と凝灰岩の年代。 *大坪拓史，高嶋礼詩，黒柳あずみ，山中寿郎 11:15 T5-O-9 福島県上部ジュラ系～下部白亜系相馬中村層群の炭素同位体比層序と凝灰岩のU-Pb放射年代。 *都丸大河，高嶋礼詩，西 弘嗣，黒柳あずみ，山中寿朗，折橋裕二，浅原良浩 11:30 T5-O-10 フランス南東部，ボコンチアン堆積盆地に露出する白亜系中部の浮遊性有孔虫化石層序と群集。 *村上一成，黒柳あずみ，高嶋礼詩，西 弘嗣 11:45 T5-O-11 フランス南東部，ボコンチアン堆積盆地の下部白亜系アブチアン階の浮遊性有孔虫化石層序と群集。 *高澤拓夢，黒柳あずみ，高嶋礼詩，西 弘嗣，SageMan Bradley 12:00 T5-O-12 西三河平野における100万年前以降の浅海生珪藻化石群集。 *納谷友規，阿部朋弥，水野清秀	08:45 T1-O-5 深部スロー地震が発生する地質環境：三波川変成帯の例。 *小山雪乃丞，ウォリス サイモン，永治方敬 09:00 T1-O-6 前弧マントルウェッジ蛇紋岩の破壊様式に対する間隙流体圧の影響。 *平内健一，永田有里奈，岡崎啓史 09:15 T1-O-7 Naturally injected short-lived fluid flow in a single fracture related to seismic events in the middle crust. *Diana Mindaleva，Masaaki Uno，Noriyoshi Tsuchiya 09:30 T1-O-8 沈み込み帯の流体で形成されたアンチグライト脈に記録された過渡的な流体移動。 *吉田一貴，大柳良介，木村正雄，Plümper Oliver，福山繭子，岡本 敦 09:45 T1-O-9 スラブ起源物質によるマントルウェッジの多様な交代作用：北海道神居古潭帯の蛇紋岩からの検討。 *高見澤 駿，市山祐司，山崎秀策，田村明弘，森下知晃 10:00 T1-O-10 スラブーマントル境界における交代作用と物質移動：四国中央部三波川帯富郷地域の蛇紋岩岩体からの知見。 *大柳良介，宇野正起，岡本 敦 10:15 T1-O-11 沈み込み帯海洋地殻の構造スライス化におけるCASH-CO ₂ 交代作用の重要性：三波川帯の例。 *遠藤俊祐，栗原那知，田口知樹 10:30 T1-O-12 変成岩の体積変化推定に基づくフランスカン沈み込み帯でのシリカと水の移動の定量的評価。 *副島祥吾，ウォリス サイモン 10:45 T1-O-13 海洋底変質に伴う定量的な元素移動量とその支配パラメーター：北西太平洋と南太平洋の元素移動形態の相違。 *松野哲士，宇野正起，岡本 敦 11:00 T1-O-14 四国三波川帯五良津東部岩体産エクロジイト相大理石の炭素・酸素同位体組成再訪。 *原田浩伸，辻森 樹，高柳栄子，井龍康文 11:15 T1-O-15 放射光micro-XANES分光法による三波川変成帯エクロジイト岩岩体の温度圧力構造再評価。 *伊藤泰輔，ウォリス サイモン，高橋嘉夫，遠藤俊祐，小暮敏博，浅原良浩 11:30 T1-O-16 チェコ共和国・ボヘミア地塊に産する珪長質グラニュライトの最高変成圧力。 *内藤美桜，山根健輔，中村大輔，平島崇男，マルチン スフォイッカ 11:45 T1-O-17 炭質物ラマンスペクトルから被熱温度を推定する際のピークフィッティングの自動化。 *金木俊也，額額佑衣

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 5 日（月）午前

会場	第 4 会場（14 号館 401 教室）	
	T11. 堆積地質学の最新研究	
	座長：松本 弾，横山由香，山口悠哉	
8：45	08:45	T11-O-8
	駿河湾総合観測―堆積物移動メカニズムの解明を目指して―， *横山由香，中村 希，坂本 泉，馬場久紀，平 朝彦	
	09:00	T11-O-9
	諏訪盆地における上部更新統～完新統の堆積相・古土壌相と化学組成，*葉田野 希，川野律歩，吉田孝紀，福地亮介，朝日啓泰，沢田 健	
	09:15	T11-O-10
	諏訪湖堆積物のバイオマーカー分析による古気候復元および堆積環境の評価，*福地亮介，沢田 健，朝日啓泰，葉田野 希	
	09:30	T11-O-11
	関東平野東部の MIS 5c と 5a の海成段丘の成り立ち（予察），*岡崎浩子，中里裕臣，田村 亨	
	9:45（休憩）	
	10:00	T11-O-12
	富山県八尾地域中新統ファンデルタフロント堆積物中の礫質サイクリックステップの内部堆積構造，*中嶋 健	
	10:15	T11-O-13
	サージ的混濁流によるサイクリックステップの形成と粒度分布：実験的研究，*横川美和，永野 蓮，松波和真，福岡篤生	
	10:30	T11-O-14

非デルタ性海進期における下流域沖積系のモルフォダイナミクス：オート層序学理論及び水槽実験，*武藤鉄司，王 俊輝
10:45 T11-O-15
海底扇状地の堆積形態定向変化傾向と規制要因，*高野 修，徳橋秀一，中嶋 健
11:00（休憩）
11:15 T11-O-16
タービダイトの‘化学堆積学シーケンス’：北海道川端層の例，*沢田 健，朝日啓泰
11:30 T11-O-17
秋田県男鹿半島生鼻崎露頭における更新統北浦層砂岩の淘汰度と孔隙率の関係，*野口貴徳，千代延 俊，荒戸裕之，佐藤宏大，間所洋和，永吉武志
11:45 T11-O-18
沖縄本島，島尻層群新里層と知念層の境界付近にドロマイト・コンクリーションを多産させた更新世“知念変動”とメタンハイドレート分解イベント，*松本 良，武内里香，中川 洋，佐藤時幸，井龍康文，松田博貴，小松原純子，佐藤道夫，山本聡

第 5 会場（14 号館 402 教室）	
T3. 南大洋・南極氷床：地質学から解く南極と地球環境の過去・現在・未来	
座長：石輪健樹，尾張聡子，菅沼悠介，香月興太	
08:45	T3-O-1（招待講演）
過去の温暖期の南極氷床と南大洋，*関 宰，飯塚 睦，入野智久，菅沼悠介，池原 実，板木拓也，山本正伸，堀川恵司	
09:15	T3-O-2
アムンゼン海新世西南極氷床史：Site U1532 におけるガウス-ギルバート境界（約360万年前）付近の珪藻化石，*岩井雅夫，堀川恵司，IODP Exp.379 乗船研究者	
09:30	T3-O-3
南大洋における現在と過去の活動的大陸縁：白鳳丸KH-19-6 Leg 4航海から，*山口飛鳥，谷 健一郎，池原実	
09:45	T3-O-4（招待講演）
東南極における氷床海洋相互作用の観測研究，*平野大輔	
10:15	T3-O-5
完新世における南極半島氷床変動，*池原 実，加藤広大，加藤悠爾，関 宰	
10:30	T3-O-6
完新世における東南極トッテン氷河沖の棚氷後退，*板木拓也，菅沼悠介，関 宰，山本正伸，大森貴之，天野敦子，石輪健樹，清家弘治，尾張聡子，羽田裕貴，池原 実，青木 茂	
10:45	T3-O-7
第61次日本南極地域観測隊（JARE61）によって得られた海底堆積物コア間隙水の地球化学，*尾張聡子，板木拓也，菅沼悠介，石輪健樹	
11:00	T3-O-8
東南極スカルプスネス露岩域の沿岸湖沼・親子池の湖底堆積物に記録された氷床後退後の基盤隆起と環境変化の復元，*香月興太，岩成和弥，菅沼悠介，川又基人，柴田大輔	
11:15	T3-O-9
CDW流入による最終氷期以降の東南極氷床融解プロセス：宗谷海岸露岩域の表面露出年代と海洋モデリングに基づく復元，*菅沼悠介，川又基人，草原和弥，石輪健樹，香月興太，藤井昌和，平林幹啓，奥野淳一	
11:30	T3-O-10
測地・地質観測とGIAモデリングによる完新世南極氷床変動と地球内部粘性構造への制約，*奥野淳一，服部晃久，土井浩一郎，石輪健樹，菅沼悠介	
11:45	
総合討論ほか	

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。
※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 5 日（月）午後

会場	第 1 会場（14 号館 B101 教室）		第 2 会場（14 号館 101 教室）		第 3 会場（14 号館 102 教室）	
	T10. 鉱物資源研究の最前線		S2. 人新世における地質学：年代境界・物質境界研究のフロンティア		T1. 変成岩とテクトニクス	
	座長：町田嗣樹，浅見慶志朗		座長：磯崎行雄，川幡穂高，黒柳あずみ		座長：中野伸彦，足立達朗，吉田一貴	
13：30	13:30	T10-O-1（招待講演） 掘削航海により明らかになった海底熱水鉱床の最新成因モデルおよび初期形成過程。*野崎達生	13:30	S2-O-1 現代，人新世の環境の地質学における位置付け－地球科学は社会に貢献できるか－*川幡穂高	13:30	T1-O-18 The igneous and metamorphic evolution from Neoproterozoic to Triassic in Jangbong Island in the northwestern coastal Gyeonggi Massif on the Korean Peninsula. *Ji Wan Jeong, Chang Whan Oh, Deung-Lyong Cho
	14:00	T10-O-2 新潟県佐渡鉱床における金鉱化作用の鉱物学および地球化学的研究。*澤畠友彦，石田美月，大田隼一郎，中村謙太郎，安川和孝，加藤泰浩	13:45	S2-O-2 学術研究における社会貢献のあり方。*西 弘嗣	13:45	T1-O-19 南インドKulappara産のミグマタイトに認められる多相包有物の微細組織観察。*田口知樹，Madhusoodhan Satish-Kumar，三宅 亮
	14:15	T10-O-3 Spectrum adapted ECM algorithmを用いたレーザー誘起ブレイクダウン分光法における高効率スペクトルデータ解析。*松村太郎次郎，高橋朋子，永田賢二，安藤康伸，矢田 陽，桑谷 立	14:00	S2-O-3 現代と将来社会への地質学の貢献：災害研究の視点から。*後藤和久	14:00	T1-O-20 東南極セール・ロンダーネ山地，プラットニーバネに産する変成岩類のin-situ年代測定に基づくP-T-t履歴解析。*足立達朗，河上哲生，東野文子，宇野正起
	14:30	T10-O-4 深層学習に基づく画像検出システムを用いた南鳥島レアアース泥のイクチオリス層序年代決定。*北澤亮大，見邨和英，安川和孝，大田隼一郎，藤永公一郎，中村謙太郎，加藤泰浩	14:15	S2-O-4 大都市圏での地中熱利用における水質監視の重要性－大阪平野における事例－*益田晴恵，中尾正喜，中曾 康壽，崔 林日，三原伸治，橋本浩一	14:15	T1-O-21 東南極セール・ロンダーネ山地の高度変成岩類中の硫化鉱物と全岩硫黄同位体組成。*河上哲生，Satish-Kumar M.，三堀徳也，Sasidharan Silpa Ammini
	14:45	T10-O-5 独立成分分析に基づく低温熱水活動の推移。*浅見慶志朗，町田嗣樹，平野直人，中村謙太郎，安川和孝，小木曾 哲，加藤泰浩	14:45	S2-O-6 地質学が担う将来の地球環境：海洋酸性化と有孔虫。*黒柳あずみ	14:30	T1-O-22 東南極セール・ロンダーネ山地パーレバンデ南部で見られる二酸化炭素・塩素を含む流体流入。*東野文子，河上哲生，足立達朗，宇野正起
	15:00	T10-O-6 沖縄トラフ海底熱水鉱床における掘削コア化学組成データの多変量統計解析。*安川和孝，愛知昭人，中村謙太郎，野崎達生，高谷雄太郎，石田美月，加藤泰浩	15:00（休憩）	S2-O-7 地質学における「境界」研究：古くて新しい問題。*磯崎行雄	14:45	T1-O-23 東南極リュツォ・ホルム湾西部，ベルナバネの地質と変成作用。*中野伸彦，馬場壮太郎，加々島慎一
	15:15（休憩）		15:15	S2-O-8 ジルコンの母岩判別図作成時の境界問題。*澤木佑介	15:00	T1-O-24 隠岐島後における低圧ザクロ石角閃岩の変成履歴。*高橋瑞季，遠藤俊祐
	15:30	T10-O-7 深海堆積物のグローバル地球化学データ構造の統計解析。*平子雅啓，安川和孝，中村謙太郎，加藤泰浩	15:45	S2-O-9 変成作用に関する境界，そのスケール問題。*辻森 樹	15:15	T1-O-25 富山県宇奈月地域のインド石・十字石含有複変成ホルンフェルス：低圧高温熱変成後の急速冷却の証。*廣井美邦
	15:45	T10-O-8 南鳥島レアアース泥の化学層序：機械学習を用いた新たなアプローチ。*中村謙太郎	16:00	S2-O-10 地球内部での水と炭素循環の転換点。*片山郁夫	15:30	T1-O-26 領家帯柳井地域，滑花崗岩の positioning 過程とミグマタイトの形成。*大和田正明，青木克磨，赤崎英里，亀井淳志
	16:00	T10-O-9 南鳥島EEZで採取された3層のレアアース濃集層を含む深海堆積物コア試料における鉱物組成および粒度の深度方向変化。*小田裕太，大田隼一郎，安川和孝，藤永公一郎，中村謙太郎，加藤泰浩	16:15	S2-O-11 岩石と水の境界：反応と破壊の結合した動的な岩石学のフロンティア。*宇野正起	15:45	T1-O-27 巨大珪長質深成岩体周囲に形成される高温型変成帯脊振山系雷山～糸島半島の例。*宮崎一博，村岡やよい
	16:15	T10-O-10 X線CTと化学特徴マップを用いたマンガンノジュールの成長履歴解析。*町田嗣樹，中村謙太郎	16:30	S2-O-12 大気・海洋系の酸化史および古海洋の酸化還元境界の変遷とその意味。*斎藤誠史	16:00（休憩）	
	16:30	T10-O-11 μXRFによる南鳥島EEZマンガンノジュールの核の元素マッピング。*矢崎 誠，中村謙太郎，町田嗣樹，安川和孝，藤永公一郎，加藤泰浩	16:45	S2-O-13 ペルム紀/三疊紀境界における地球 ³ He流入量の変動：地球科学と惑星科学の境界領域開拓を目指して。*尾上哲治，高畑直人，曾田勝仁，佐野有司，磯崎行雄	16:15	T1-O-28 石英の動的再結晶の発展と含水量の変化。*福田惇一，奥平敬元，大友幸子
	16:45	T10-O-12 南鳥島マンガンノジュールのOs同位体層序年代決定とμXRF元素マッピングによる成長ハイエイトの実態解明。*青柳颯汰，大田隼一郎，矢野萌生，見邨和英，浅見慶志朗，野崎達生，中村謙太郎，安川和孝，町田嗣樹，加藤泰浩	17:00	S2-O-14 第四紀更新世における地質年代境界決定の現状。*岡田 誠	16:30	T1-O-29 固体圧試験機による長崎蛇紋岩の高温高压変形実験：断層変形による脱水反応促進，奥出桜子，*清水以知子，緒方夢顕，道林克禎
	17:00	T10-O-13 横浪アンバーから復元した前期白亜紀の海水Os同位体組成。*藤永公一郎，矢野萌生，安川和孝，中村謙太郎，大田隼一郎，桑原佑典，中山 健，加藤泰浩	17:15	S2-O-15 人新世とデルタ。*齋藤文紀	16:45	T1-O-30 東北日本の中・古生界石灰岩体に記録された古応力。*野口咲紀，今井宏太郎，西川 治
			17:30	総合討論ほか	17:00	T1-O-31 東北日本弧における短波プーグ重力異常と回位に伴う褶曲。*平野光浩，長濱裕幸
					17:15	T1-O-32 周期的背弧拡大のメカニズム。*石井和彦，ウォリス サイモン

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）/口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 5 日（月）午後

会場	第 4 会場（14 号館 401 教室）	
	T11. 堆積地質学の最新研究	
	座長：足立奈津子，加藤大和，白石史人	
13：30	13:30	T11-O-19 鹿児島県徳之島におけるカスケード型トッファと石筍を用いた過去200年間の古気候解析。* 村田 彬 ，加藤大和，狩野彰宏
	13:45	T11-O-20 日本産石筍同位体記録の解釈と量的効果の定量化。* 狩野彰宏 ，加藤大和，村田 彬，柏木健司
	14:00	T11-O-21 日本産石筍が記録したハインリッヒイベント期の気候。* 加藤大和 ，森 大器，狩野彰宏
	14:15	T11-O-22（招待講演） サンゴロジー。* 渡邊 剛
	14:45（休憩）	
	15:00	T11-O-23 ブラジル・ラゴアベルメーリャにおける微生物炭酸塩の分解過程。* 白石史人 ，半澤勇作，朝田二郎，CURY Leonardo，BAHNIUK Anelize
	15:15	T11-O-24 鹿児島県喜界島西部における相対的海水準低下に伴う上部更新統琉球層群の堆積環境と堆積メカニズムの変化（予報）。* 松田博貴 ，林田将英，熊谷優香，得重和希，辻 喜弘，佐々木圭一
	15:30	T11-O-25 和歌山県由良地域に分布する鳥巢石灰岩（上部ジュラ系）で見られる古太平洋での礁構築に果たす被覆性微生物類の役割。* 船場大輝 ，江崎洋一，足立奈津子
	15:45（休憩）	
	16:00	T11-O-26 秋吉石灰岩における石炭紀バシキーリアン期のコケムシー礁構築における役割。* 須蒲翔太 ，江崎洋一，増井 充，清水光基，長井孝一，杵山哲男，足立奈津子
	16:15	T11-O-27 北中国のカンブリア系上部で見られる海綿が関与した微生物岩に類似した岩石。* 江崎洋一 ，足立奈津子，劉 建波
	16:30	T11-O-28 モンゴル西部地域に分布するBayan Gol層（カンブリア系下部）から産出する微小ストロマトライトの形態と分布様式。* 足立奈津子 ，江崎洋一，劉 建波，渡部真人，ALTANSHAGAI Gundsambuu，ENKHBAATAR Batkhuyag，DORJNAMJAA Dorj

第5会場（14号館402教室）	
G3. ジェネラル サブセッション環境地質	
座長：吉田 剛，吉田英一，竹内真司	
13:30	G3-O-5
産業廃棄物最終処分場の立地条件としての地下水益管理と水循環について。*田村嘉之	
13:45	G3-O-6
流れを止めて濁りを堆積させ、濁りを持続させ増大させる穴あきダムは環境に優しくない。*川辺孝幸，阿部 修，清野真人，高桑順一，最上小国川の清流を守る会	
14:00	G3-O-7
堰き止め地形の形成過程と堆積機構。*高嶋 洋	
14:15	G3-O-8
10年後も地盤の沈下が継続している液状化・流動化部分での地質状態：東京湾岸埋立地北部における2011年東北地方太平洋沖地震の地質災害に関する地質調査から。*風岡 修，小島隆宏，荻津 達，香川 淳，八武崎寿史，伊藤直人，吉田 剛	
14:30	G3-O-9
土岐花崗岩における物質移行特性に関する研究：透過拡散試験の結果について。*笹尾英嗣，村上裕晃，尾崎 裕介，湯口貴史	
14:45	G3-O-10
火山岩岩脈分布に関するデータ収集及び予察的な解析（続報）。*川村 淳，賈 華，小泉由起子，丹羽正和，梅田浩司	
15:00	G3-O-11
火山活動の中・長期的予測に関する一考察。松井みのり，*梅田浩司	
15:15	G3-O-12
炭酸塩コンクリーションの水理・力学特性について。*竹内真司，後藤 慧，中村祥子，吉田英一	
15:30	G3-O-13
コンクリーション化による水みち割れ目自己シーリング地下実証試験研究。*吉田英一，山本鋼志，刈茅孝一，松井裕哉	
T8. 文化地質学	
座長：猪股雅美，森野善広	
16:00	T8-O-8
福岡城上之橋御門石垣石材の起源についての考察～苦鉄質深成岩石材の岩相と鉱物組成の特徴に注目して～ *宮本知治，伊福 滯，島田和彦	
16:15	T8-O-9
白老における津波に関するアイヌ民族の口承：17世紀の巨大津波の解明に向けて。*シン ウォンジ，八幡巴絵	
16:30	T8-O-10
文化地質学と地学教育。*久田健一郎	
16:45	T8-O-11
指定天然記念物を活用した地学教育の展開。*坂本昌弥	
17:00	T8-O-12
活用を目的とした岩石園の岩石同定～東京都江戸川区のある小学校を例として～ *石橋弘明，大友幸子	
17:15	T8-O-13
プレート境界地震発生の再現模型の作成とその意義。*小泉奈緒子，松野茂富	

第6会場（14号館403教室）

G5. ジェネラル サブセッション地域地質・層序・年代

座長：佐藤大介，長森英明

13:30	G5-O-1
福井県南条山地美濃帯の中生界石灰岩礫岩。*中川登美雄	
13:45	G5-O-2
熊本県南部黒瀬川帯（日奈久帯）の上部ジュラ系～下部白亜系の層序と堆積環境。*川上高平，尾上哲治	
14:00	G5-O-3
日本列島・韓半島東縁部におけるジュラ紀花崗岩の全岩化学組成とジルコンU-Pb年代，Lu-Hf同位体組成。*川口健太，Oh Chang Whan，Jeong Ji Wan，古姓昌也，柴田悟史，早坂康隆	
14:15	G5-O-4
北東北脊梁山地の白亜紀花崗岩類。*藤本幸雄	
14:30	G5-O-5
北部フォッサ・マグナ北西部の隆起帯に認められる地溝状構造。*長森英明，古川竜太，藤原 寛，山崎誠子，吉川 敏之	
14:45	G5-O-6
西九州古第三系基底層再検討の必要性。*宮田和周	
15:00	G5-O-7
長崎県五島列島中通島有川層の海底地滑り堆積物とそのテクトニックな意義。*川原和博	
15:15	G5-O-8
秋田地域新第三系の続成作用 炭酸塩ノジュールによる検討。*西川 治，長井 香，石山大三	
15:30	G5-O-9
ミャンマー中部テビンガン地域の中新統オボゴン層-イラワジ層間に見られる潮汐から河川への漸移。*楠橋 直，Zin Maung Maung Thein，Thaung Htike，Ye Ko Ko Latt，Man Thit Nyein，成田佳南，高井正成	

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※**太字氏名：代表発表者**，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 6 日（火）午前

会場	第 1 会場（14 号館 B101 教室）	第 2 会場（14 号館 101 教室）	第 3 会場（14 号館 102 教室）
	G7. ジェネラル サブセッション海洋地質	T6. 日本列島の起源再訪	G6. ジェネラル サブセッション岩石・鉱物・火山
	座長：三澤文慶	座長：磯崎行雄，佐藤友彦，澤木佑介	座長：遠藤俊祐
8：45			
		08:45 T6-O-1 地球化学データベースから見る，日本列島基盤岩組成の東西差，地域性と，日本列島形成モデルとの関係，* 原口 悟 ，上木賢太，岩森 光	08:45 G6-O-1 風化度指標 W 値を用いた江若花崗岩中の断層岩の諸特性，* 岩森 暁如 ，小北康弘，島田耕史，立石 良，高木秀雄，太田 亨，菅野瑞穂，和田伸也，大野顕大，大塚良治
		09:00 T6-O-2 北海道東部の碎屑性ジルコン U-Pb 年代研究から推定された古千島弧の起源と北東アジアの進化，* 七山 太 ，山崎 徹，金松敏也，岩野秀樹，檀原 徹，平田岳史	09:00 G6-O-2 太古代超苦鉄質岩から産するジルコンの示す岩体変質履歴，* 沢田 輝 ，森下知見，谷 健一郎
		09:15 T6-O-3 日本列島弧海溝系の北方延長：サハリンにおける白亜紀前弧砂岩の後背地解析，* 佐藤友彦 ，磯崎行雄，堤 之恭，重田康成，小玉一人，長谷川 卓	09:15 G6-O-3 酸化鉄バンドを伴う堆積岩中での無機的なプロセスによる白色スポットの形成，* 河原弘和 ，吉田英一，西本昌司，纈纈佑衣，勝田長貴，梅村綾子
		09:30 T6-O-4 白亜紀西南日本弧の前弧堆積盆地と後背地：熊本県天草に産する白亜系・古第三系砂岩の碎屑性ジルコン U-Pb 年代測定，* 吉田 聡 ，磯崎行雄，中畑浩基，佐藤友彦，堤 之恭	09:30 G6-O-4 カルサイト合成実験における流体包有物の形成条件，* 山内彩華 ，坂口有人
		09:45 T6-O-5 北部九州の白亜紀花崗岩類のジルコン U-Pb 年代，* 堤 之恭 ，谷 健一郎	
10:00 G7-O-1 東京湾における海底近傍のガス層の分布と音響散乱現象との関連性について，* 梶原勘吉 ，鶴 哲郎，井上卓彦		10:00 T6-O-6 日本の白亜紀－古第三紀の火成活動の時空間変遷とテクトニクスとの関連，* 山岡 健 ，ウォリス サイモン	10:00 T2-O-1（招待講演） 新生代グローバルテクトニクス論争と西南日本-海嶺沈み込み，海盆拡大，島弧体系の成立，* 木村 学 ，橋本善孝，山口飛鳥
10:15 G7-O-2 内湾から採取された海洋コアの人新世における重金属および有機物分析による底質環境変化の解析－高知県浦ノ内湾を研究例として，* 村山雅史 ，神徳理紗，新井和乃，原田尚美		10:15 T6-O-7 飛騨帯の起源：二つの中国地塊間の未完の衝突帯，* 磯崎行雄	10:30 T2-O-2 南関東の前弧海盆の分化と海底地すべり：鮮新世の指標テフラと生層序による年代制約，* 宇都宮正志 ，田村糸子，野崎 篤，中嶋輝允
10:30 G7-O-3 南海トラフにおけるタービダイトの堆積年代と堆積間隔－非破壊物性・元素濃度と放射性炭素年代を用いた研究－* 芦 寿一郎 ，中西 諒		10:30 T6-O-8（招待講演） 日本海花崗岩類の Zircon U-Pb 年代と全岩化学組成から制約される，日本海拡大前の本州弧テクトニクス復元，* 谷 健一郎 ，堀江憲路，Dunkley Daniel	10:45 T2-O-3 巨摩山地桃の木亜層群の地質から制約する伊豆弧衝突開始年代，* 箱守 貴 ，谷 健一郎，黒田潤一郎，山口飛鳥
10:45 G7-O-4 浅部構造から紐解く東北沖上盤プレートの変動，* 三澤文慶 ，高下裕章，富士原敏也，荒井晃作		10:45 T6-O-9 根田茂帯・北部北上帯南縁部に散在する古生代の島弧性構造岩塊，* 内野隆之	11:00 T2-O-4 熊野灘南海トラフ海底地すべりと付加体テクトニクスの関連，* 金松敏也 ，芦 寿一郎
11:00（休憩）		11:00 T6-O-10 山口県美祢市における常森層の地質構造及び堆積環境，* 志原早紀 ，辻 智大	11:15 T2-O-5 西南日本弧の前弧海盆に記録された中期中新世の応力，* 安邊啓明 ，佐藤活志
11:15 G7-O-5 窒素ガス吸着法を用いた沈み込み帯断層の微小間隙構造分析，* 中元啓輔 ，亀田 純，濱田洋平，増本広和		11:15 T6-O-11 前期石炭紀における古日本のテクトニックセッティングと古地理：飛騨外縁帯，苦鉄質火山岩類の地球化学的特徴からの制約，* 志村佑亮 ，東田和弘，山本鋼志，ナドミド バヤルト	11:30 T2-O-6 山陰東部の前期中新世の伸長ひずみは小さかった？ * 羽地俊樹
11:30 G7-O-6 ブチスボットパイプを活用してのモホール計画－海洋マントル掘削の新たな提案，* 石井輝秋 ，金子 誠，平野直人，町田嗣樹，秋澤紀克		11:30 T6-O-12（招待講演） 日本列島における古生代前期の動物化石群とその古地理学的特徴，* 田中源吾	
11:45 G7-O-7 中部沖縄トラフ野南熱水地帯で観測された温度潮汐変動とその原因，* 木下正高 ，北田数也，野崎達生		11:45 T6-O-13 オルドビス紀以降の東北日本の地殻進化：U-Pb 年代－Hf 同位体比同時分析を駆使したジルコン学による新知見，* 辻森 樹 ，パストルガラン ダニエル，ガンバット アリアンセッセグ	

※講演番号は，シンポジウム（S），トピックセッション（T），ジェネラルセッション（G）のそれぞれに，ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 6 日（火）午前

会場	第 4 会場（14 号館 401 教室）	第 5 会場（14 号館 402 教室）
	T13. 都市地質学：自然と社会の融合領域	T9. カーボンゼロミッションに貢献する石油天然ガス石炭地質学・有機地球化学
	座長：中澤 努, 小松原純子, 小荒井 衛	座長：三瓶良和, 千代延 俊, 山口悠哉
8 : 45	08:45 T13-O-1 地盤情報に基づく北海道の地盤平均S波速度分布の推定. *廣瀬 亘, 戸松 誠, 竹内慎一 09:00 T13-O-2 常時微動計測結果からみる水戸及び霞ヶ浦周辺の谷底平野の地形発達の特徴と地盤災害特性. *小荒井 衛, 川村直輝, 中島展之, 中野早登, 先名重樹, 中埜貴元 09:15 T13-O-3 小規模な開析谷内の沖積層に記録された海進と海退：埼玉県芝川低地の例. *小松原純子 09:30 T13-O-4 東京山の手に発達する谷底低地のS波速度構造と地盤震動特性. *中澤 努, 長 郁夫, 小松原純子, 坂田健太郎 09:45 T13-O-5 千葉県市原市町田（養老川下流域）の沖積層について（予報）. *小島隆宏, 風岡 修, 中澤 努, 吉田 剛 10:00 T13-O-6 仁和洪水（西暦888年）砂層の堆積学的研究からみた千曲川洪水と土地利用の関係. *保柳康一, 亀谷兼人 10:15 T13-O-7 帯水層蓄熱に関わる大都市圏下の中-上部更新統. *三田村宗樹 10:30 T13-O-8 関東平野中央部野田地域におけるMIS 7e~5e相当層の層相とテフラ・花粉群集の層序関係の検討. *米岡佳弥, 坂田健太郎, 中澤 努, 本郷美佐緒, 中里裕臣 10:45 T13-O-9 災害用井戸を利用した地下水流動方向の把握の精度向上. *吉田 剛, 伊藤直人, 風岡 修, 香川 淳, 八武崎寿史, 小島隆宏 11:00 T13-O-10 関西地域における地盤情報の利活用状況について. *北田奈緒子, 濱田晃之, 水谷光太郎, 三村 衛 11:15 T13-O-11 断層条線から推定する断層すべりと破壊伝播方向：恵那山断層の例. *重松紀生, 吾妻 崇, 中島 礼, 安江健一, 立石 良, 廣内大助 11:30 T13-O-12 人工改変によるローム層分布域の地震時流動性地すべりのリスク変化—多摩ニュータウンを事例に— *鈴木毅彦, 千木良雅弘, 松四雄騎, 中山大地	09:15 T9-O-1（招待講演） カーボンニュートラルとCO₂地中貯留. *辻 健 09:45 T9-O-2（招待講演） 玄武岩を利用したCO₂の地中貯留および鉱物化. *徂徠正夫 10:15 T9-O-3 国内CCSに向けた地質技術者の役割. 島野恭史, 瀬戸口怜子, *池 俊宏 10:30（休憩） 10:45 T9-O-4 本邦中新世～鮮新世火山岩油ガス貯留層におけるCO₂鉱物固定ナチュラルアナログ. *八木正彦 11:00 T9-O-5 長岡CCS実証サイトのCO₂砂岩貯留岩と不均質性. *千代延 俊 11:15 T9-O-6 秋田県に分布する女川層珪質岩タイトオイルの開発にかかる低炭素社会への貢献. *玉川哲也, 辻 隆司 11:30 T9-O-7 Methane hydrate formation process in the forearc basin of Southwest Japan: Methane was generated beneath the trench bottom. *金子信行 11:45 T9-O-8 本邦の石炭と現世陸源有機物の水素指数：斐伊川-宍道湖および飯梨川-中海水系を例として. *三瓶良和, 内堀奈美, 石田貴博

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。
 ※太字氏名：代表発表者、（招待）：招待講演、（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第 129 年学術大会（2022 東京・早稲田）講演プログラム（口頭）

■ 9 月 6 日（火）午後

会場	第 3 会場（14 号館 102 教室）
	T2. 新生界地質から読み解く西南日本弧の成立—付加体形成から背弧拡大まで 座長：羽地俊樹，新正裕尚
13：30	13:30 T2-O-7 紀伊半島東部の四万十付加体竜神コンプレックスに挟在する珪長質凝灰岩のジルコンU-Pb及びFT年代. *星 博幸, 川上裕, 岩野英樹, 檀原 徹 13:45 T2-O-8 室戸半島, 四万十帯葉生層群及び四十寺山層の珪長質凝灰岩ジルコンU-Pb年代. *原 英俊 14:00 T2-O-9 高知県室戸半島に露出する古第三系室戸層に見られる乱堆積層. *松元日向子, 藤内智士 14:15 T2-O-10 四国白亜紀四万十付加体牟岐メランジュの基質頁岩およびユニット境界断層のイライトK-Ar年代. *藤内智士, 西野佑哉, 松島雄飛, 橋本善孝, 八木公史, 富岡尚敬 14:30 T2-O-11 西南日本内帯と外帯の接合様式と接合境界. *中島 隆 14:45 T2-O-12 中央構造線をこえて来たナップ：中新統久万層群の巨礫からの示唆. *山路 敦, 楠橋 直, 谷 健一郎 15:00（休憩） 15:15 T2-O-13 福岡県北西部における日本海拡大後の火山活動. *佐藤大介 15:30 T2-O-14 中期中新世後半の九州と西南日本の背弧における島弧方向の応力勾配. *牛丸健太郎, 山路 敦 15:45 T2-O-15 放射年代と全岩化学組成に基づく九州西部天草地域の中新世貫入岩の起源の検討. *新正裕尚, 赤坂真奈, 折橋裕二, 仁木創太, 佐々木 実, 平田岳史 16:00 T2-O-16 Great earthquake at 7.3 ka inferred from tsunami deposits, southwestern Japan. *七山 太 16:15 T2-O-17 海洋底拡大前夜の背弧海盆の中軸部は冷たいのか熱いのか？沖縄トラフ南部での科学掘削に向けた検討. *大坪 誠, 新井隆太, 土岐知弘, 木下正高, 三澤文慶, 大橋聖和, 久保田好美, 宮川歩夢, 池上郁彦, Christine Regalla, Chih-Chieh Su

第 4 会場（14 号館 401 教室）
T13. 都市地質学：自然と社会の融合領域 座長：中澤 努, 小島隆宏
13:30 T13-O-13（招待講演） 3次元地質モデルを用いた都市地下浅部の地質情報整備と今後の展開. *野々垣 進 14:00 T13-O-14 複合現実（MR）技術による3D地質地盤モデルへの活用事例. *宮城康夫, グエン ティ タオ バン, 尾高潤一郎 14:15 T13-O-15 テキストマイニングを活用した地質情報の要約手法. *戸邊勇人, 松川剛一, 升元一彦 14:30 T13-O-16 2022年トンガ火山噴火で発生した「空振」による地下水位変動. *香川 淳, 吉田 剛 14:45 T13-O-17 房総半島九十九里平野中部における上ガスの分布と噴出状況について：2009～2022年の調査結果. *風岡 修, 小島隆宏, 伊藤直人, 八武崎寿史, 吉田 剛, 香川 淳 15:00 T13-O-18 霧島市における湧水利用上水道の地質特性と持続可能性. *高嶋 洋 15:15 T13-O-19 プラネタリー・バウンダリーと社会. *石川正弘
G8. ジェネラル サブセッション応用地質・地質災害・技術 座長：西山賢一, 加瀬善洋
15:45 G8-O-1 道東地域におけるテフラ層すべりの成因の再検討と空中写真SfM画像から判読した地すべり地形の意義. *加瀬善洋, 小安浩理, 仁科健二, 石丸 聡, 興水健一 16:00 G8-O-2 強震動に伴うテフラ層すべりの発生初期過程-北海道胆振東部地震を例として. *廣瀬 亘 16:15 G8-O-3 崩壊・地すべりの発生可能性リスクモデルの構築. *菅原 宏 16:30 G8-O-4 3次元地質モデルの逐次更新システムの開発と山岳トンネル現場での適用. *吉河秀郎, 福田 毅, 青野泰久, 齊藤寛治 16:45 G8-O-5 地盤情報データベースを用いた徳島平野・鳴門市周辺の地下地質. *西山賢一

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。
※太字氏名：代表発表者、（招待）：招待講演、（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第129年学術大会（2022東京・早稲田大会）講演プログラム（ポスター）

■ 9月10日（土） フラッシュトーク 9:00-10:30（zoom）、コアタイム 10:30-12:30（zoom ブレイクアウトルーム）

T3. 南大洋・南極氷床：地質学から解く南極と地球環境の過去・現在・未来

T3-P-1（エントリー）

東南極・リュツォ・ホルム湾の湖底堆積物コア試料を用いた古環境復元。*石輪健樹，徳田悠希，香月興太，佐々木 聡史，板木拓也，菅沼悠介，奥野淳一

T3-P-2

東南極ラングホブデ浅海域における現生貝形虫群集（予察）。*佐々木聡史，入月俊明，石輪健樹，徳田悠希，板木拓也，菅沼悠介

T3-P-3（エントリー）

東南極宗谷海岸沿岸およびシューマッハオアシスの陸水系に存在する脂肪酸の組成。*梶田展人，菅沼悠介，工藤 栄，杉山 慎，大河内直彦

T3-P-4

新型コアリングシステムにより得られた湖沼堆積物コアと表面露出年代を用いた東南極宗谷海岸における時空間的な氷床融解過程の復元。*川又基人，菅沼悠介，香月興太，佐々木聡史，柴田大輔，大森貴之，工藤 栄

T3-P-5

東南極氷床変動の復元と急激な氷床融解メカニズムの解明。*菅沼悠介，第X期南極地域観測事業重点サブテーマ1-2課題申請メンバー

T5. グローカル層序学・年代学

T5-P-1（エントリー）

北海道芦別岳地域における空知層群下部の無斑晶玄武岩とピクライトの層序関係。*當山凜太郎

T5-P-2

棚倉堆積盆を埋積する新第三系の古地磁気学的研究。*細井 淳，羽田裕貴，岡田 誠

T5-P-3（エントリー）

和歌山県南西部田辺沖の海底音響層序区分の再検討。*古山精史朗，唐澤卓朗，鍵谷祥麦，横山青

T5-P-4

徳島平野沿岸部・沖洲地区における地下第四系層序。*羽田裕貴，中谷是崇，水野清秀，納谷友規，中島 礼

T5-P-5（エントリー）

新潟県佐渡島中新統中山層の火山灰ジルコンU-Pb年代測定および珪藻化石層序年代との比較。*吉岡純平，黒田潤一郎，仁木創太，松崎賢史，平田岳史

T5-P-6（エントリー）

銚子コアの酸素同位体層序に基づく下部更新統年代モデル。*小杉裕樹，桑野太輔，久保田好美，岡田 誠，亀尾浩司

T11. 堆積地質学の最新研究

T11-P-1（エントリー）

駿河湾奥部富士川沖における堆積物の特徴とその堆積状況。*中村 希，坂本 泉，横山由香，平 朝彦

T11-P-2（エントリー）

ピーク分離を用いた石英粒子のカソードルミネッセンス特性評価に基づく源岩判別指標の提示。*中野有紗，丸茂恭徳，太田 亨

T11-P-3（エントリー）

鉱物学的手法に基づいたInvisible砂質津波堆積物の検出。*中西 諒，芦 寿一郎，相澤正隆，成瀬 元，大熊祐一，古知 武

T11-P-4

岩相及び化学・珪藻化石分析に基づく新潟県八石背斜における鮮新・更新統の堆積システムの復元。*田中綾香，保柳康一

T11-P-5（エントリー）

秋田県八峰町八森における中新統女川層の岩相。*松浦三徳郎，大柳快晴，千代延 俊，荒戸裕之

T11-P-6（エントリー）

水面および気泡を覆う炭酸カルシウム沈殿物の形成過程。*白石史人，秋元貴幸，富岡尚敬，齋 聡子，高橋嘉夫

T11-P-7（エントリー）

モンゴル西部ゴビ・アルタイ県のカンブリア系下部Bayan Gol層から産するオンコイドの特徴と形成環境。*上村 葵，足立奈津子，大西 滂，江崎洋一，劉 建波，渡部真人，Gundsambuu ALTANSHAGAI，Batkhuyag ENKHBAATAR，Dorj DORJNAMJAA

G1. ジェネラル：サブセッション 構造地質

G1-P-1（エントリー）

陸上付加体における過去の地震断層を伴う破碎帯のすべり挙動の制約：四国白亜系四万十帯横浪メランジュ。*川路真子，橋本善孝，濱田洋平

G1-P-2

地震時の摩擦発熱に伴う化学反応による剪断集中帯の移動に関する力学モデルの解の不安定化について。*金木俊也，野田博之

G1-P-3

活断層が伴う断層岩の微細構造：阿寺断層・敦賀断層の例。*中尾龍介，相山光太郎，中田英二

G1-P-4

紀伊半島中央部・香肌地域における三波川帯低変成度岩の歪解析。*森 宏，友岡洋介，野部勇貴，山岡 健，常盤哲也，額 頼衣衣

G1-P-5

四国西部の中央構造線沿いの右ずれ変形構造。*窪田安打，竹下 徹

G1-P-6（エントリー）

砂層の強度構造が付加体ウェッジの構造に与える影響：X線コンピュータトモグラフィーによる解析。*橘 隆海，藤内智士，山田泰広

G1-P-7

上高地群発地震の活動推移と断層系その2 —1998年と2020年の再検討—。*津金達郎

G1-P-8（エントリー）

紀伊半島中央部・中央構造線近傍における領家マイロナイトの岩石学的特徴とその空間変化。*木村陽介，森 宏，永治方敬

G1-P-9

過去の地震断層におけるひずみ解析：白亜系四万十帯・横浪メランジ。*三谷陣平，橋本善孝

G1-P-10

南海トラフ沈み込みプレート境界のラフネス解析と応力分布との対比。*福別府 渉

G4. ジェネラル：サブセッション 地学教育・研究史

G4-P-1

第10回学生のヒマラヤ野外実習ツアー（2022年3月）報告と第11回実習ツアーへの誘い。*吉田 勝，Student Himalayan Field Exercise Project Convenors-M. Yoshida, K. Arita, T. Sakai, B.N.Upreti, Paudel Mukunda，在田一則，酒井哲弥，Upreti Bishal

G4-P-2

高等学校の自然科学をテーマとした課題研究における科学倫理教育の実践。*川勝和哉

G5. ジェネラル：サブセッション 地域地質・層序・年代

G5-P-1

メタセコイア化石林における古土壌構成。*吉田孝紀，小澤菜々子，川野律歩，上山瑛梨佳

G5-P-2

韓国の錦山地域における古原生代花崗片麻岩のジルコン・モナズ石の地質年代学的・地球化学的な研究。*岩水 健一郎，姜志勲，堀江憲路，外田智千，竹原真美，早坂康隆，大藤 茂

G5-P-3

兵庫県北西端，浜坂地域の新第三系層序の改定：中新統七釜

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者，（招待）：招待講演，（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第129年学術大会（2022東京・早稲田大会）講演プログラム（ポスター）

■ 9月10日（土） フラッシュトーク 9:00-10:30（zoom）、コアタイム 10:30-12:30（zoom ブレイクアウトルーム）

層、鮮新統千谷火山噴出物および鐘尾火砕流堆積物の提案。
***羽地俊樹**、工藤 崇、佐藤大介、仁木創太、平田岳史
G5-P-4
 愛媛県砥部地域における中期中新統久万層群基底部の化石地すべり堆積物。 ***木村一成**、榊原正幸
G5-P-5（エントリー）
 平山—松田北断層帯の南西端部における層序と地質構造。 ***檜崎真一郎**、服部 海、林 広樹、小田原 啓
G5-P-6
 日本海沿岸沖2019年6月18日M6.7、東北前弧沖2021年2月13日M7.3・2022年3月16日M7.4、能登2022年6月19日M5.4の地震活動伝搬および新幹線脱線と地震断層面・歪軸方位の関係。 ***新妻信明**

G7. ジェネラル：サブセッション 海洋地質

G7-P-1
 熊野沖南海トラフ地すべり表層堆積物の堆積構造。 ***福地里菜**、浜橋真理、村山雅史、白石和也、大熊祐一、芦 寿一郎、山口飛鳥
G7-P-2
 西赤道太平洋における中期中新世から後期漸新世の放散虫生層序の報告(IODP Site U1490)。 ***松崎賢史**、上栗伸一、佐川拓也
G7-P-3
 孔壁画像を用いた褶曲パラメータの簡易取得法の開発と紀伊半島沖・南海トラフ歪み蓄積域への適用。 ***濱田洋平**、真田佳典、廣瀬丈洋
G7-P-4
 南海トラフ地震歪蓄積域における応力状態: 紀伊半島沖超深度ライザー孔C0002の解析。 ***廣瀬丈洋**、濱田洋平、北島弘子、Saffer Demian, Tobin Harold

G8. ジェネラル：サブセッション 応用地質・地質災害・技術

G8-P-1
 秋田県横手市の古海底地すべり及び活断層の断層破砕物質の地球化学的性質。 ***林 宏樹**、林 茉莉花、田中宗一郎
G8-P-2
 断層ガウジの光ルミネッセンス年代—阿寺断層の例一。 ***林崎涼**、谷口友規、平野公平、飯田高弘、相山光太郎、中田英二
G8-P-3
 活断層の上下盤における宇宙線生成核種¹⁰Beの地表濃度の分布特性。 ***大野顕大**、和田伸也、大塚良治、岩森暁如、朝日信

孝、山根 博、林崎 涼、中田英二、松四雄騎
G8-P-4（エントリー）
 道路斜面を対象としたUAV写真計測技術の比較検証。 ***川又基人**、日外勝仁、坂本尚弘、倉橋 稔幸

G9. ジェネラル：サブセッション 古生物・古環境

G9-P-1（エントリー）
 下部三畳系大沢層の堆積場と酸化還元環境の復元：頻発する洪水流がもたらす沿岸域の貧酸素化メカニズム。 ***石寄美乃**、椎野勇太
G9-P-2（エントリー）
 熊本県五木地域に分布するオレネキアン期（前期三畳紀後期）礫石型珪質粘土岩より産出したコノドント自然集合体に基づく*Neostrachanognathus*属摂餌器官復元の再検討。 ***福島佑一**、上松佐知子、松井久美子、藤原謙如、丸岡照幸
G9-P-3（エントリー）
 広島県庄原市西城川における中新統備北層群の貝形虫化石群集とCNS元素分析。 ***山本知真理**、入月俊明、瀬戸浩二
G9-P-4
 北西太平洋北海道日高堆積盆周辺域の後期中新世における海洋表層環境の復元。 ***朝日啓泰**、沢田 健
G9-P-5
 東京都西部の多摩川水系に分布する鮮新—更新統上総層群から産出した海水魚類化石。 ***宮田真也**、尾崎 薫、福岡 徹、樽 創
G9-P-6
 千葉県市原市南部における上総層群柿木台層および長南層の貝形虫化石群集に基づいた古環境復元。 ***小淵俊秀**、山田 桂
G9-P-7
 浮遊性・底生有孔虫殻の酸素・炭素同位体組成変動からみた過去33万年の日本海東縁の海洋環境変動と成層構造の変遷。 ***石浜佐栄子**、久保田好美、Ortakand Mahsa
G9-P-8（エントリー）
 紀伊水道における現生貝形虫群集の水平分布と*Neomonoceratina delicata*の発見。 ***竹内美優**、岩谷北斗、天野敦子、有元 純、鈴木克明、板木拓也、入月俊明

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者、（招待）：招待講演、（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第129年学術大会（2022東京・早稲田大会）講演プログラム（ポスター）

■ 9月11日（日）フラッシュトーク 9:00-11:00 (zoom), コアタイム 11:00-13:00 (zoom ブレイクアウトルーム)

T1. 変成岩とテクトニクス

T1-P-1 (エントリー)

スロベニア・ポホリェ山地に産する藍晶石エクロジヤイトのブ
ログレード変成作用の解説。*西 玄偉, 田口知樹, 小林記之
T1-P-2

Insights into the role of failed rifts in the Archean tectonics,
evidences from the western Dharwar craton, southern India.
*Sreehari Lakshmanan

T1-P-3

泥質変成岩におけるスピネル形成反応、特にスピネル類の活動
度モデルについて。*志村俊昭, 山根季里, 坂本 翔, 郷田翔
一

T1-P-4

東南極リュツォ・ホルム湾西部およびプリンスオラフ海岸東部
に分布する高温変成岩類：2021-2022地質調査報告。*馬場壮太
郎, 加々島慎一, 中野伸彦

T1-P-5

北関東栃木県西部の足尾帯から見出された片麻岩の記載岩石学
的特徴と地質学的意義。*北野一平

T1-P-6 (エントリー)

山口県南部, 大津島に産する変成岩類の変成作用。*Lu
ZEJIN, 大和田正明

T1-P-7

関東山地の白亜紀後期－古第三紀初期の領家帯と領家外縁帯。
*小野 晃

T1-P-8 (エントリー)

野母半島長崎変成岩類における蛇紋岩メランジュの構造岩石学
的研究。*木村太星, 平内健一

T1-P-9 (エントリー)

TG-DTAを用いた蛇紋岩中の含水鉱物量の定量化の試み。*山
崎秀策, 倉橋稔幸

T1-P-10 (エントリー)

マントル－地殻境界におけるマグネシウムとシリカの相対的移
動度。*岡本 敦, 吉田一貴, 大柳良介

T1-P-11 (エントリー)

パラワンオフィオライトにおける基底部かんらん岩の変形・熱
水変質作用：沈み込み開始過程への影響。*阿部日登里, 平内
健一

T1-P-12 (エントリー)

Cathodoluminescence and EBSD observations on quartz
phenocrysts from a weakly deformed granite porphyry in
the Ryoke belt, Awaji Island, SW Japan. *Chenghan LIU, Qi
Wang, Takamoto OKUDAIRA, Norio SHIGEMATSU

T1-P-13 (エントリー)

Relationship between the strain and the activity of slip
systems in deforming quartz from misorientation and shape-

preferred orientation of quartz phenocrysts in a deformed
granite porphyry. *王 琦, 奥平敬元, 重松紀生

T2. 新生界地質から読み解く西南日本弧の成立－ 付加体形成から背弧拡大まで

T2-P-1

西南日本 丹後半島の中新世～鮮新世火山活動と堆積盆発達。

*辻野 匠

T2-P-2 (エントリー)

日本海拡大期の溶岩の古地磁気学的記録：丹後半島に分布する
北但層群の例。*長坂知佳, 清杉孝司, 鈴木桂子, 中岡礼奈,
三木雅子

T2-P-3

岩相解析に基づいた兵庫県但馬御火浦－浜坂・居組周辺に分布
する北但層群の古環境復元およびU-Pb年代測定。*松原典孝,
郡山鈴夏, 佐野恭平, 羽地俊樹, 檀原 徹, 岩野英樹, 平田岳
史

T2-P-4

鳥取－岡山県境の中新一鮮新統から産出する伯耆植物群の再検
討－古植生・古環境とその応用。*矢部 淳, 清水道代, 齊藤
毅, 小林真生子

T2-P-5 (エントリー)

愛媛県千原鉱山周辺の三波川帯の地質と桜樹屈曲の運動像。
*崎 海斗, 遠藤俊祐

T2-P-6

反射法音波探査記録から明らかになったトカラ列島南部宝島周
辺海域の海底地質構造。*石野沙季, 井上卓彦, 三澤文慶, 高
下裕章, 有元 純

T2-P-7

精密地球物理探査による北部沖縄トラフの地質構造。*高下裕
章, 佐藤太一, 石野沙季, 三澤文慶, 有元 純, 鈴木克明, 石
塚 治, 横山由香, 佐藤悠介, 永井あすか, 古山精史朗, 梶原
勘吉, 田村千織, 小松亮介, 井上卓彦

T4. 地球史

T4-P-1 (エントリー)

陸と海の動物の大量絶滅の規模と気候変化の関係。*海保邦夫
T4-P-2

長崎県, 中新統五島層群中の泥岩層についての堆積場復元。
*高橋宏明, 清川昌一, 安永 雅, 池端雄太, 池原 実

T4-P-3 (エントリー)

上総層群黄和田層上部の微化石分析に基づく北西太平洋の前
期更新世海洋変動。*桑野太輔, 土屋祐貴, 亀尾浩司, 林 広

樹, 宇都宮正志, 久保田好美, 万徳佳菜子, 大浦佑馬, 岡田
誠

T4-P-4 (エントリー)

沖縄県久米島の礁性微生物皮殻中に見られるスフェルライトの
起源。*佐々木佑二郎, 藤田和彦, 白石史人

T6. 日本列島の起源再訪

T6-P-1 (エントリー)

西南日本外帯秩父帯, 高知県梼原地域の蛇紋岩と地質構造形成
史。*西川謙吾, 辻 智大

T7. マグマソースからマグマ供給システムまで

T7-P-1 (エントリー)

愛媛県東温市滑川溪谷の中部中新統石鎚層群高野層。*成田佳
南, 楠橋 直, 谷 健一郎

T7-P-2 (エントリー)

島根県隠岐島後に産する変花崗岩類の岩石学的・地球化学的
特徴。*平井智望, 亀井淳志, 藤原まい, 遠藤俊祐

T7-P-3

福岡県西部, 糸島半島周辺に産する花崗岩類の年代値。*村岡
やよい, 宮崎一博

T7-P-4

岩体成長およびマグマ上昇過程の野外地質学的・岩石学的アプ
ローチ：牛斬山花崗閃緑岩の例。*江島圭祐, 大和田正明, 亀
井淳志

T7-P-5

大島半島北部夜久野オフィオライトにおける大深度ボーリング
コアの岩相層序と帯磁率。*和田伸也, 木村皐史, 大山隆弘,
鈴木茂之, 岩森暁如, 大塚良治, 大野顕大, 小割啓史, 木村一
成, 柳田 誠

T7-P-6 (エントリー)

愛媛県伯方島に産する深成岩類の岩石学的特徴と成因関係。
*福井堂子, 齊藤 哲

T7-P-7 (エントリー)

中新世御内花崗岩質岩体のジルコンメルト包有物組成と固結圧
力推定。*谷脇由華, 齊藤 哲

T7-P-8 (エントリー)

西南日本愛媛県四国島梶島に産する白亜紀深成岩のジルコン
U-Pb年代。*下岡和也, 齊藤 哲, 谷 健一郎

※講演番号は、シンポジウム (S), トピックセッション (T), ジェネラルセッション (G) のそれぞれに、ポスター (P) / 口頭 (O) の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者, (招待)：招待講演, (エントリー)：優秀ポスター賞エントリー講演

日本地質学会第129年学術大会（2022東京・早稲田大会）講演プログラム（ポスター）

■ 9月11日（日） フラッシュトーク 9:00-11:00（zoom）、コアタイム 11:00-13:00（zoom ブレイクアウトルーム）

T8. 文化地質学

T8-P-1

土佐山内家大名の墓石に使用された花崗岩の産地同定. *谷川 亘, 望月良親, 徳山英一, 高木翔太, 中村璃子, 山本裕二, 濱田洋平, 渡部 淳

T12. 火山噴出物から読み解く火山現象と防災への応用

T12-P-1

伊豆大島南東部龍王崎域におけるマグマ活動. *森 光貴, 内山涼多, 八束 翔, 坂本 泉

T12-P-2

吾妻火山群最新期, 吾妻小富士噴出物の層序と山体形成史. *鈴木和馬, 戸丸淳晴, 長谷川 健

T13. 都市地質学：自然と社会の融合領域

T13-P-1

地層対比に向けたボーリング柱状図表示システムの開発. *根本達也, 野々垣 進, 升本眞二, 米澤 剛, ラガワン ベンカ テッシュ

T13-P-2

茨城県つくば市および周辺地域の3次元地質地盤情報整備. *坂田健太郎, 野々垣 進, 尾崎正紀, 中澤 努, 宮地良典

T13-P-3（エントリー）

東京湾における浅部海底地質調査概要. *照井孝之介, 古山精史朗

T13-P-4（エントリー）

阿蘇カルデラ西部に位置する出ノ口断層の東方延長の検討～九州中部におけるvolcano tectonics～ *辛島康大, 辻 智大

※講演番号は、シンポジウム（S）、トピックセッション（T）、ジェネラルセッション（G）のそれぞれに、ポスター（P）／口頭（O）の記号と各セッション内での通し番号を付与しています。

※太字氏名：代表発表者、（招待）：招待講演、（エントリー）：優秀ポスター賞エントリー講演



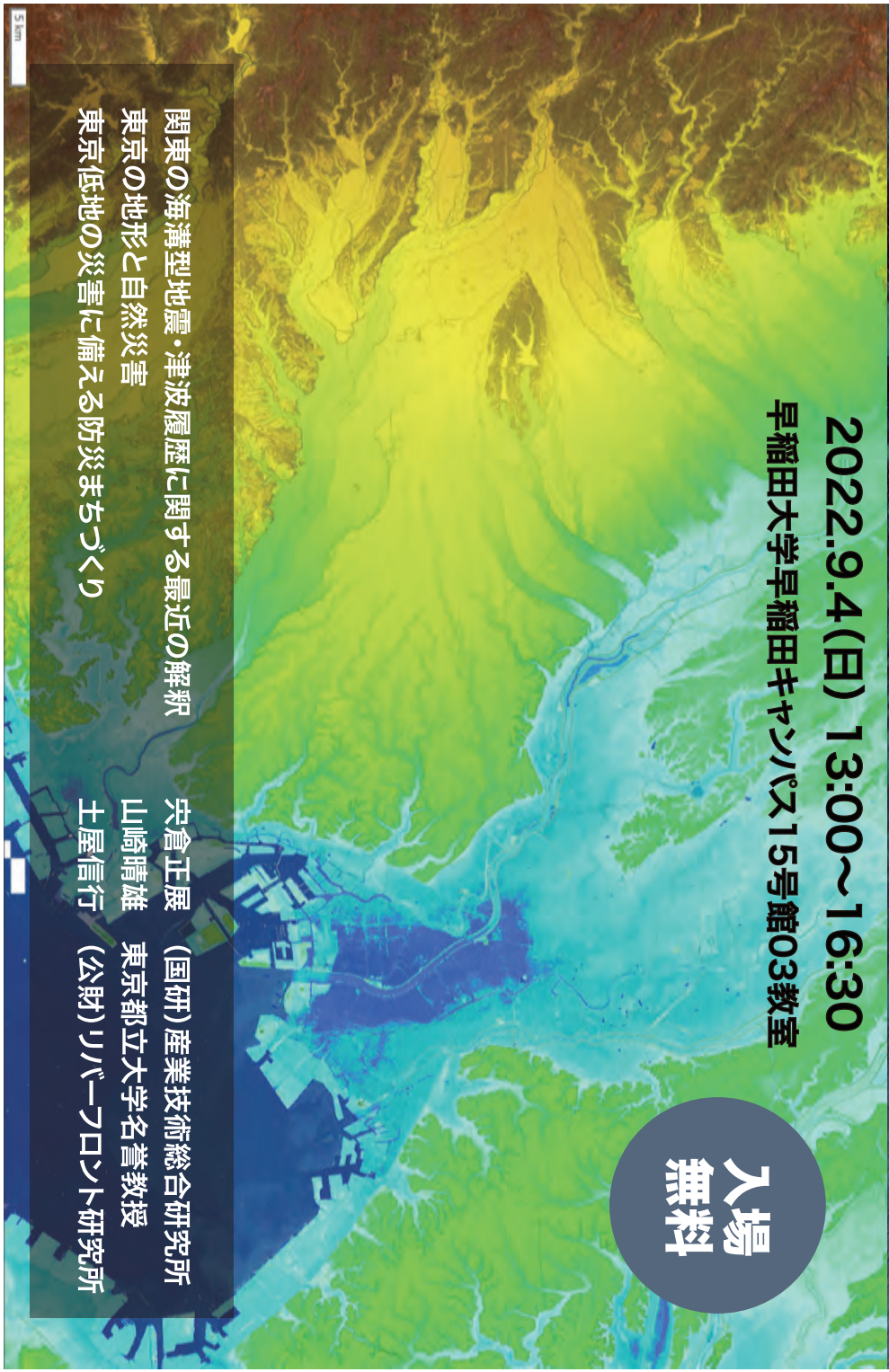
日本地質学会129年学術大会 市民講演会

関東の自然災害と防災

2022.9.4(日) 13:00～16:30

早稲田大学早稲田キャンパス15号館03教室

入場
無料



関東の海溝型地震・津波履歴に関する最近の解釈
東京の地形と自然災害
東京低地の災害に備える防災まちづくり

央倉正展 (国研)産業技術総合研究所
山崎晴雄 東京都立大学名誉教授
土屋信行 (公財)リバーフロント研究所

＊同時開催＊

地質情報展2022とうきょう

2022.9.3(土)～9.5(月)

早稲田大学早稲田キャンパス15号館地階ロビー

主催 一般社団法人日本地質学会
共催 早稲田大学 教育・総合科学学術院

お問い合わせ先 日本地質学会事務局
e-mail: main@geosociety.jp



本講演会は令和4年科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業です。
上段写真:千葉県南房総市白浜町 撮影:央倉正展氏
下段画像:地理院地図

日本地質学会 *News*

Vol.25 No.7 July 2022

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

表2 日本地質学会会長就任にあたって (会長 岡田 誠)

巻頭 日本地質学会第129年学術大会
(2022東京・早稲田) プログラム…… (1) ~ (24)

2022年度新執行理事紹介……2

公募……4

農林水産省で地質地下水関係職員 (係長級 (技術)) 採用公募/令和4年度山梨県職員研究員 (火山防災) 選考採用試験/原子力規制委員会行政職員 (安全審査官 (地震・津波審査担当)) の公募

各賞・助成……5

東レ理科教育賞・企画賞募集/第63回東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦/第44回(令和4年度) 沖縄研究奨励賞推薦応募

案内……5

第38回ゼオライト研究発表会

博物館で地学を学ぼう! (7) ……6

地質標本館 (森田澄人)

CALENDAR……8

TOPIC……9

地学に名を轟かした水戸藩の長久保赤水の改正日本輿地路程全図 (石渡 明)

一般社団法人日本地質学会定款/運営規則……11

地質学露頭紹介……20

国内最長到達の阿蘇4火砕流堆積物 (辻 智大)/広島市安佐北区の80 cm厚始良Tnテフラ (早坂康隆)/市原市南部古敷谷川Byk ~ Ku2B連続露頭と西川右岸露頭 (木村英人)/愛知県知多半島の礫ヶ浦礫岩 (中新統) (星 博幸)/閉じた褶曲と褶曲の重複 (竹下 徹)/飛水峡のチャート・甌穴群と珪質頁岩 (木戸 聡)

地質学雑誌: 新しい論文が公開されています……23

支部コーナー……24

関東支部: 学生・初級者向け「地質断面図」の書き方講座—布良海岸巡検—実施報告

委員会だより……25

法地質学研究委員会: 日本地球惑星科学連合2022年大会における法地質学セッションについて

院生コーナー……26

新青丸による南海トラフ沈み込み帯前弧域調査航海(KS-22-3)乗船報告 (副島祥吾)

一般社団法人日本地質学会2022年度総会……28

議事録/2021年度事業計画に照らした本年度実績概要/2021年度事業経過報告/2022年度事業計画骨子/会計書類/永年会員 (50年会員) 顕彰者/2022年度名誉会員推薦文/2022年度各賞授賞理由

入会申込書……50

巻末 会費口座振替依頼書

一般社団法人日本地質学会定款及び運営規則を掲載します

本誌掲載の総会議事録にもあるとおり、先の6月11日総会において、定款等規則の変更が承認されました。これらの変更は、以前より会員の皆様にお知らせしておりました「学会活性化に関わる会費などの変更」の内容に基づくものです (ニュース誌2022年2月号、学会HP会員ページなど)。また表彰に関する規則については、昨年の表彰制度の見直しからさらに新賞の創設・賞名の変更等を行ったものです。つきましては、本誌に変更後の定款、運営規則を掲載いたします。中綴じ箇所には配置していますので、抜き取ってご利用いただくことも可能です。

表紙: 関東平野の地下基盤深度構造図

高橋雅紀, 2017, 東西日本の地質学的境界【第九話】幻の利根川構造線. GSJ地質ニュース6, 251-260. 第2図を改変。

学会事務局は現在も出勤日数・人数を調整しながら部分的テレワークを導入しております。営業時間は通常通り、電話対応も再開しておりますが、事務局へのご連絡・お問い合わせはできるだけメールでお送りください。ご理解・ご協力のほどよろしくお願い致します。

印刷・製本: 日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

2022 年度 新執行理事 紹介

任期：2022 年 6 月 11 日から
2024 年総会まで
(注) *印は各部長

常務理事：中澤 努（産業技術総合研究所）



昨年に引き続き、常務理事を務めさせていただきましたことになりました。当学会では、近年の会員数の減少に、コロナ禍が追い打ちをかけ、学会体制・学会活動の見

直しを迫られています。限られた人と予算で、学術研究や社会貢献活動を、バランス良く、最大限に発展させるために、昨期より実施している改革を着実に軌道に乗せるとともに、新たな方策を模索することが必要と感じます。会長、副会長の下、微力ながら執行理事会の調整役としてお役に立てればと思っています。よろしくをお願いいたします。

運営財政部会：加藤猛士（川崎地質質）



地質学の研究・開発・調査等の成果は社会にとって貴重な財産であり、その学術情報は社会の発展に貢献する地質技術の基礎でもあります。そこで、運営財政の

担当として、ひとつひとつの事案に丁寧に向き合いながら、学会活動をサポート・推進し、少しでも多くの方々が興味を持って参加していただけるような学会となるよう尽力していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

副会長：杉田律子（科学警察研）



今期は多くの女性や若い会員が代議員、理事となりました。これは、地質学会を変えていこうという強い思いの表れと受け止めています。執行部はその受け皿

となるべく体制を整えなければ、学会の発展はないでしょう。会員減少や厳しい財政等の問題も、より魅力のある活動を行うことで改善されるものもあると思います。そのためには、様々なルールの整備や改正が必要です。足元を固めることで活動しやすい学会にしていく所存です。

副常務理事：緒方信一（中央開発株）



地質学会との出会いは愛媛大での恩師が卒論として四万十帯メランジュの放散虫層序によるプレート論の検証をテーマに与えて頂いた3年生での入会でし

た。その時の地雑は毎号のように四万十帯の成因について地角斜論とプレート論が熱く論戦を繰り広げていました。ワクワクしました。そして今地質学会は学会があるべき形としての会員メリットを第一として新しい活動にシフトしました。これまでに感謝しつつ更なる発展に尽くします。

広報部会：内尾優子*（国立科学博）



地質学は、身近な暮らしから宇宙まで、基礎から応用的な研究分野まで、深く関連して支えているとても重要な科学分野です。日本地質学会は、

125 周年をも超えて地質学の発展を促進しております。私は広報担当として、さらに活発な学会となるよう、そして、社会へ、特に次の世代を担う方に対して、「地質学」の魅力や重要性が適切に伝わることを意識しながら、時代に即した広報活動を行っていきたく考えます。

副会長：星 博幸（愛知教育大学）



地質学と関連分野の研究を始めた学生に「ぜひ入会したい」と思っていた学会。様々な分野の現役世代の会員に「この学会が大切、やめられない」と

思っていた学会。そしてシニア層の会員に「この学会が生涯大切、やめられない」と思っていた学会。そんな地質学会になるように、マニフェストで表明した点（学術面の一層の強化、財政運営健全化、ダイバーシティ推進、地質情報の継続的発信、広報体制強化）に全力で取り組む所存です。

運営財政部会：亀高正男*（株ダイヤコンサルタント）



前期から引き続き、運営財政部会を担当させていただきます。なかなか先が見通せない社会情勢が続いていますが、そんな中でも日本地質学会では、地質

学雑誌の完全電子化や会費の見直しを行うなど、いろいろな改革を進めています。予定より若干遅れ気味ですが、会員管理システムも総入れ替えが進行中です。会員サービスを向上させ、地質学会の活動を盛り上げ、学会の運営財政に貢献していきたいと考えています。

広報部会：松田達生（工学気象研究所）



今期は広報部会を担当させて頂くことになりました。地質学会のプレゼンスを高めるために広報は大変重要な役割を担っているかと存じます。

ニュース誌をはじめ、各種媒体のコンテンツの充実に努めてまいります。

学術研究部会：辻森 樹*（東北大学）



改めて国際的なネットワークが問われる時代になりました。個人ベースの国際学術交流が進展して実績を重ねることで、はじめて組織間での連携・協力の構築が可能になります。海外コミュニティとの中・長期的な連携・協力体制の発展は会員の国際共同研究の推進を可能にするだけでなく、国際的に活躍可能な若手人材を育成するためにも欠かせません。学術研究部会の役割を果たしたいと思います。

改めて国際的なネットワークが問われる時代になりました。個人ベースの国際学術交流が進展して実績を重ねることで、はじめて組織間での連携・協力の構築が可能になります。海外コミュニティとの中・長期的な連携・協力体制の発展は会員の国際共同研究の推進を可能にするだけでなく、国際的に活躍可能な若手人材を育成するためにも欠かせません。学術研究部会の役割を果たしたいと思います。

学術研究部会：尾上哲治（九州大学）



近年インターネットを利用した研究活動や研究交流が活発化しています。このような新しい取り組みは今後重要性を増すでしょうが、対面

で行われる学術大会も、依然として重要な研究交流の場であると考えます。地質学会の間で活発な議論が行えるように、学術研究部会担当として、オンラインと対面の両方面から学会運営に尽力していく所存です。

学術研究部会：高嶋礼詩（東北大学）



昨年度まで地学教育を担当しておりましたが、今年度より行事を担当させていただきますことになりました。コロナ禍、前行事委員長がウェブ主体の様々な新しい企画

画を立案・実行し、地質学会を盛り立ててこられました。コロナ後も、このような企画を引き続き継承するとともに、学術大会を含め、様々な企画を通して会員の皆様が地質学会に所属しているメリットを感じられるよう、頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

学術研究部会：山口飛鳥（東京大学大気海洋研）



今期から行事担当の執理事を務めさせていただきます。行事担当として、学会の柱である学術大会が会員の皆様にとってさらに魅力的なものになるよう取り組むとともに、ご好評いただいているショート

コースも、これまでのアンケート結果を参考に一層の充実を図ります。執理事として、日本地質学会が今後も持続的な発展を遂げられるよう尽力する所存ですので、どうかよろしくお願いいたします。

編集出版部会：狩野彰宏*（東京大学）



引き続き Island Arc 担当の執理事を務めることになりました。現在の編集体制になって2年半が経ちますが、昨年の IF が 2.44 になるなど国際誌としての

認知度を上げることができました。今後も東北大学の辻森氏とともに、迅速かつ厳正な査読プロセスを維持し、さらなる向上に努める所存です。会員の皆様からの活発な Island Arc への投稿をお待ちしております。

編集出版部会：小宮 剛（東京大学）



地質学雑誌担当の執理事の小宮です。地質学雑誌は今年から電子雑誌化され、J-STAGE に速やかに掲載されることになり、広く国民に掲載内容が行

き渡るようになりました。科学に国境や民族間の垣根はないので、国際誌を通じて世界中に学会員の成果が伝えられることが重要であるとともに、遍く国民に成果を還元するという邦文誌の役割も重要です。地質学雑誌が学会員・国民の期待に応えられるように微力ながら尽力する所存です。

社会貢献部会：坂口有人*（山口大学）



本学会の設立目的として、定款には「地質学の進歩と普及を図り、学術の振興と社会の発展に寄与・貢献する」と掲げてあります。この原点を忘れることなくあ

りたいと思います。日本の地質学を代表する機関として声をあげ、社会との連携を深め、地質学の社会的地位向上に資するように会員皆様と協力して努力する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

社会貢献部会：矢部 淳（国立科学博）



生涯教育委員会およびジオパーク支援委員会担当として今期も務めさせていただきます。前期は、コロナ禍、オンラインの講演会などを行って参りましたが、これ

からは対面の事業などについてもより積極的に取り組んでいきます。地質学そして学会のプレゼンス向上のため、微力ながら努力して参ります。皆さんのアイデアもぜひお寄せください。

社会貢献部会：内野隆之（産業技術総合研究所）



今期より社会貢献部会担当の執理事を務めさせていただきますことになりました。研究活動の意義を問われている昨今ですが、地質学がいかに社会に役立っている

かをより多くの方に知ってもらえるよう尽力したいと思います。また、特に若手の研究活動を少しでもサポートできるような取り組みを行えればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



農林水産省で 地質地下水関係職員 (係長級(技術)) 採用公募

民間企業等のご経験を活用して、国の技術行政に携わり、ご活躍いただく方を求めています。

募集機関：農林水産省（人事院）

募集ポスト：係長級

募集人員：技術系全体で約3名

採用時期：原則2023年4月

応募資格：2022年4月1日において、大学等（短期大学を除く。以下同じ。）を卒業した日又は大学院の課程等を修了した日のうち最も古い日から起算して4年を経過した者で、これらの大学等又は大学院の課程等に在学して情報工学、土木、造船工学、数学、物理、地球科学、化学、生物学、薬学、農芸化学、農学、農業経済、畜産、水産、農業農村工学、林学、砂防、造園又は林産に関する課程を修めて卒業又は修了したもの

地球科学系の職務内容：農業農村整備事業等の地質・地下水に関する調査、指導業務その他

受付期間：2022年7月25日（月）～8月15日（月）

詳細情報は以下人事院ホームページをご覧ください。

https://www.jinji.go.jp/saiyo/siken/keikennsy/keikennsy_nousui.html

地球科学系の職務内容につきましては、以下ホームページをご参考になしてください。

業務内容HP：<https://www.maff.go.jp/j/joinus/recruit/lgi/kubun.html>

令和4年度山梨県職員研究員 (火山防災) 選考採用試験

募集区分及び採用予定人数：火山防災1及び火山防災2の募集区分の中から各1名（計2名）
火山防災1：①富士山の噴火履歴の研究②富士山火山防災研究センターで遂行中の研究課題に関わる業務③火山災害の減災対策に資する防災教育等の業務④火山防災対策に関わる業務

火山防災2：①自然災害教育に関わる研究②富士山の火山防災マップ利活用や避難に関する研究③富士山火山防災研究センターで遂行中の研究課題に関わる業務④火山災害の減災

対策に資する防災教育等の業務⑤火山防災対策に関わる業務

応募資格：

(1) 次の各事項に該当する者

①昭和53年5月2日以降に生まれた者で、博士の学位又はこれに準ずる資格を有する者 ②火山防災1の研究分野は、火山学分野で、特に噴火履歴や火山噴火のプロセスに関する研究遂行能力を有する者 ③火山防災2の研究分野は、自然災害に関わる防災研究分野で、特に災害教育、防災マップ、避難に関する研究遂行能力を有する者 ④火山災害の減災対策に資する防災教育等に積極的に関わる者 ⑤火山防災対策に関わる業務に積極的に関わる者

(2) 次のいずれかに該当する者は、応募できません。

①日本国籍を有しない者 ②地方公務員法第16条に該当する者：禁錮以上の刑に処せられ、その執行を終わるまで又はその執行を受けることがなくなるまでの者/山梨県職員として懲戒免職の処分を受け、当該処分の日から2年を経過しない者/日本国憲法又はその下に成立した政府を暴力で破壊することを主張する政党その他の団体を結成し、又はこれに加入した者

勤務場所：富士山科学研究所

採用予定日：令和5年4月1日

受付締切：令和4年8月17日（水）

詳しくは、<https://www.pref.yamanashi.jp/fujisanlb/2022/shokuinsaiyoukazanbousai.html>

上記のほか、任期付研究員（火山防災）選考採用試験の実施もあります（任期：令和5年4月1日から令和9年3月31日（4年）。詳しくはHPを参照してください。

<https://www.pref.yamanashi.jp/fujisanlb/2022/saiyouboshuuninkitsikikazan.html>

原子力規制委員会行政職員 (安全審査官(地震・津波審査担当)) の公募

原子力規制委員会では、原子力施設の安全規制その他これらに関する安全の確保に関する業務を実施しており、安全審査官は、原子力施設における安全審査に係る業務を行います。

今回募集する安全審査官（地震・津波審査担当）は、原子力施設に対する新規制基準への適合性審査として、(1)地震学、地震工学、地質・地質構造、津波、火山に関する分野、又は(2)建築、土木、機械（主に地震工学、耐震設計、耐津波設計）に関する分野に係る専門的な知識と技術を活用し、設置変更許可や工事計画認可に係る地震・津波等に関する審査業務又は耐震・耐津波設計に関する審査業務

を行います。このような審査業務を実施するためには、(1)、(2)の分野に係る高度な専門的知識と実務経験が求められます。当庁職員として採用された後、審査に係る業務を行いつつ「所定の研修を修了する」、又は「審査に係る業務を一定期間経験」した後に原子力安全審査資格を取得した職員は、安全審査官として任用されます。

また、審査に係る業務に携わる職員及び安全審査官には、高度な専門的知識と実務経験に加え、安全に対する強い使命感が求められます。

採用予定数：3名程度

採用予定時期：原則、令和5年4月以降（予定）

応募資格：以下のいずれも満たす者

(1)学校教育法（昭和22年法律第26号）による大学、短期大学、高等専門学校若しくは高等学校を卒業した者又はこれらと同等以上の学力を有すると認められる者 (2) 一定の職務経験（大学を卒業した者は7年以上、短期大学及び高等専門学校を卒業した者は9年以上、高等学校を卒業した者は11年以上）を有する者 (3) 職務を遂行するのに必要な前述の「求める人材」(2)に記載する業務経験を有し、専門性、専門知識を有する者

応募受付締切：令和4年9月30日（金）

応募要領、応募書類等公募の詳細はHPを参照してください。

<https://www.nsr.go.jp/nra/employ/jishintsunami.html>

お問い合わせ先

原子力規制庁長官官房人事課

担当：行政職員（中途）採用担当

電話（代表）03-3581-3352、メールアドレス recruit_nra@nra.go.jp

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

東レ理科教育賞・企画賞募集

東レ理科教育賞・企画賞の対象：

東レ理科教育賞・企画賞は、理科教育を人間形成の一環として位置づけた上で、中学校・高等学校レベルでの理科教育における新しい発想と工夫考案にもとづいた企画・開発を対象としています。教育の現場での授業実践に向けて副賞賞金を活用して開発を行い、開発後は東レ理科教育賞へ応募されることを期待します。東レ理科教育賞・企画賞へは1人1件の応募とします。生徒の科学に対する興味を深めるために、例えば次のような事項が考えられます。

- (1) 実験・観察、演示などの教材・教具の開発とその実践に向けた企画・開発。
- (2) 効果的な実験法、器材の活用法、自発的学習をうながす工夫の企画・開発など。
- (3) よりよい理科教育のための指導展開に向けた企画・開発。

応募資格：中学校・高等学校の理科教育を担当、指導、または研究する方。（中学校・高等学校・高等専門学校・大学などの教員、指導主事、教育研究所・教育センター・博物館の所員など）

(注) 共同の企画・開発である場合は代表者を定めてください。賞は代表者に贈呈されます。

応募事前申込締切：2022年9月9日（金）12時（正午）

申請書送信締切：2022年9月10日（土）24時
詳しくは、<https://www.toray-sf.or.jp/>

第63回東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦

1. 東レ科学技術賞

候補者の対象：(1) 学術上の業績が顕著な方 (2) 学術上重要な発見をした方 (3) 効果が大きい重要な発明をした方 (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献した方
(注) この推薦を受けた候補者は2年間選考の対象となります。

賞：1件につき、賞状、金メダルおよび賞金500万円(2件以内)

締切：令和4年10月7日(金)必着（学会締切：9月12日）

2. 東レ科学技術研究助成

候補者の対象：国内の研究機関において自らのアイディアで萌芽的研究に従事しており、かつ今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者（原則として推薦時45才以下）。本助成が重要な研究費と位置づけられ、これにより申請研究が格段に進展すると期待されることが要件。

助成金額：総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度とします。

締切：令和4年10月7日(金)必着（学会締切：9月12日）

*推薦をご希望の方は、上記学会締切までに執行理事会宛に応募書類をお送り下さい。

*各推薦書要旨は、ホームページからもダウンロードできます。

<http://www.toray-sf.or.jp>

問い合わせ先

公益財団法人東レ科学振興会

〒103-0021

東京都中央区日本橋本石町3丁目3番16号（日本橋室町ビル）

Tel：(03)6262-1655 Fax：(03)6262-1901

<http://www.toray-sf.or.jp>

第44回（令和4年度）沖縄研究奨励賞推薦応募

沖縄研究奨励賞は、沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目的として、昭和54年に創設されました。本奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学、人文科学、社会科学）を行っている新進研究者（又はグループ）の中から、受賞者3名以内を選考し、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものです。

応募資格は、学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた50歳以下（2022年7月15日現在）の方で、出身地及び国籍は問いません。

応募資格：

学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた50歳以下の者で、2022年7月15日現在で50歳以下の者

応募方法：

- (1) 「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」
- (2) 研究成果物（論文3点以内、著書がある場合は1冊）
- (3) 研究成果物の要旨（それぞれA4判横書き各1,000字以内、要旨は日本語とする）
- (4) 研究業績リスト（著書、論文等30点以内、A4横書き）

応募書類の提出先：

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町17-6Siesta日本橋201

公益財団法人沖縄協会 沖縄研究奨励賞係

応募締切：9月30日（当日消印まで有効）（学

会締切9月5日）

詳しくは、<http://www.okinawakyoukai.jp/>



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

第38回ゼオライト研究発表会

テーマ：ゼオライト、メソ多孔体、およびその類縁化合物に関連した研究の基礎から応用まで

協賛：一般社団法人日本地質学会ほか

日時：2022年12月1日（木）～12月2日（金）

会場：あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）（徳島市藍場町2丁目14番地）

特別講演：

村松 淳司 先生（東北大学）「よく定義された結晶性メタロシリケート合成と放射光計測による構造解明に向けて」

松倉 実 先生（東京大学（元ユニオン昭和株式会社））「ゼオライトと共に歩んだ30年－暮らしの中へのゼオライトの適用、福島汚染水への取り組み－」

依頼講演：

山田 岳 先生（ジョンソン・マッセイ・ジャパン合同会社）「自動車排ガス規制の歴史と触媒技術」(仮)

講演申込締切：2022年9月9日（金）

※新型コロナウイルス感染症に関わる対応：現地開催を前提として研究発表会の開催準備を進めておりますが、状況によりオンライン開催となることがあります。

問い合わせ先：

実行委員長 加藤雅裕（徳島大学）

E-mail: kato@tokushima-u.ac.jp

TEL&FAX: 088-656-7429

https://jza-online.org/events/registration_meeting



写真1 地質標本館の外観

info

産業技術総合研究所 地質標本館

茨城県つくば市東1-1-1

<http://www.gsj.jp/Muse/>

博物館で地学を学ぼう！(7)
産業技術総合研究所 地質標本館

研究の現場から地学リテラシーの向上に貢献する

館長 森田澄人

はじめに

地質標本館は、国の地質調査を付託された、産業技術総合研究所（産総研）地質調査総合センター（GSJ）の施設です。茨城県つくば市の産総研つくばセンターの構内に置かれています。GSJは、その前身が日本で最初に設置された国立研究所、地質調査所であり、1882年（明治15年）から140年の歴史を有しています。当館は、筑波研究学園都市の建設による地質調査所の移転を機に1980年（昭和55年）に開館し、この夏で42周年になりました。国の地質標本の展示施設としてはそれ以前の歴史も古く、その始まりは1874年（明治7年）の内務省に置かれた「木石陳列所」になります。それより後に地質調査所が設置され、戦前には三代にわたる「鉱物陳列館」が存在しましたが、震災や大戦に見舞われていずれも短命であったようです。戦後長く待たれて実現した展示施設が、現在の地質標本館です。

1. 成果の発信、地学の普及・啓発のため

地質標本館の設置は、地質の調査で得られたGSJの研究成果を発信していくことを一番の目的にしています。館の名のとおり、多く

の岩石・鉱物・化石などの地質標本を展示することはもちろん、館内には様々な研究成果を展示しています。また同時に、一般的な地学・地球科学の普及や啓発に務める役割も担っています。そのため、大学や研究機関など地質の専門性の高い方々から、国や自治体、企業の方々、またごく一般のご家庭の方々までとても幅広い層にご利用いただいています。現在、GSJには200名を超える研究者が所属していますので、当館の裏側にはそれだけの学会員が控えていると言っても良いでしょう。より研究の現場に近いところから、広く地学リテラシーの向上に努めます。所内の各研究分野における進捗を見張りながら、適切な成果を抽出紹介していくことも当館の重要な役割です。

2. 調査・研究から生まれる標本

エントランスホールに入ると、正面奥に設置された牡鹿半島ジュラ系の巨大な褶曲層が迎えてくれます。また天井に目をやると、日本列島の周辺で発生した地震の震源がボールやライトで立体的に表現され、地下約1,000kmから見上げたそれらの分布イメージをつかむことができます。館内には4つの展示室があり、各室ともに特色を持たせ、地球の歴史、地下資源、海洋の地質と環境、火山と地熱、地震と活断層など、広く地球科学を網羅する形で展示を行っています。

研究現場そのものや、一般の方から見ると「こんなモノも！」と驚かれるものも、ときには標本として展示物になります。たとえば、2011年東北地方太平洋沖地震による津波堆積物の地層断面標本は、現在の仙台平野に少なくとも3度の大津波が到達したことを示して

います。同地震の関連では、千葉県の砂脈の剥ぎ取り標本から当時発生した地盤液状化の様子を実感させられます。糸魚川-静岡構造線を構成する「岡谷断層」標本は、トレンチ調査の現場から採取したもので、活断層の剥ぎ取り標本としては最大級のもので（写真2）。東太平洋海膨の海底熱水チムニー、また当館のエントランス脇に置かれた筑波石の館銘石（表札）なども登録標本の一部です。

館内では、全国または海外からの岩石・鉱物・化石など、様々な地質標本を約2,000点常時展示しています（写真3）。標本館と呼ばれるに最も相応しい第4展示室にはその半数以上が集まり、各地の鉱山で産した鉱石や、様々な時代や環境を示す化石など、地質の専門家にとっても大いに見応えのある標本を多数そろえています。また、GSJとしては15万点以上の登録標本を所蔵しています。調査や研究で得られた試料を公表していただくことは国の機関として重要で、メディアや研究機関によるこれらの二次利用も受け付けています。

3. 日本列島を体感する「大型3Dプロジェクトンマッピング」

当館は新しい技術も取り入れながら、展示の更新にも努めています。近年は、海陸にわたる精密な地形データを利用した立体モデルを作製し、様々な地理情報を投影できる10メートル大の日本列島3Dプロジェクトンマッピングシステムを導入しました。GSJのデータベースから、シームレス地質図ならびに活火山や活断層の分布など、多様な地質情報が投影できます（写真4）。

「地形」と「主要活断層の分布」を照らし合わせると、活断層が谷沿いや山地の際など、地形の境界に分布していることに気付きます。さらに、平野や盆地をなす低地が若い地層で構成されることなどから、日本列島の地形が地質によってつくられていることが理



写真2 岡谷断層の剥ぎ取り標本

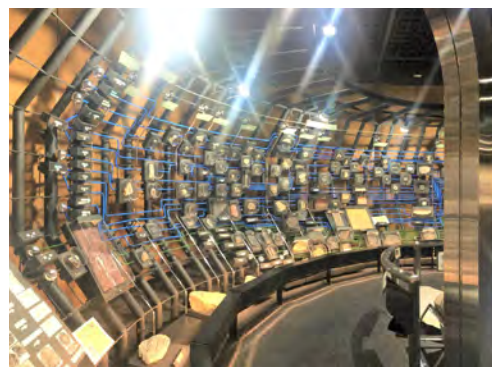


写真3 タイムトンネル



写真4 日本列島大型3Dプロジェクトンマッピング

解できます。一方、「学校」の分布や「交通網」などの生活と結びついた地理情報を重ねて比較してみると、私たちが地形にしたがって生活していることが実感できます。そして、その地形が地質によってつくられているわけですから、私たちの生活が地質に基づいて営まれていることがよく分かります。

「活火山の分布」と「スラブの等深線」を組み合わせると、沈み込んだプレートの深さが100kmを越えたところで火山が列をなしていることが分かります。さらに「温泉」の分布や温度をこれらと比較してみるのも大変興味深いものです。

この展示は、様々な情報を重ねたり比べたりすることができる上に、大型で立体のため空間的な理解を高め、大人数で同時に同じ情報を共有、または共感することができます。平面地図で見る以上の印象から大変好評を得ています。地質が専門の皆さんにもぜひ体験していただきたい展示の一つです。

4. 旬なテーマを取り上げた「特別展・企画展」

特定の研究テーマを取り上げて開催する特別展には、GSJが関わる最先端の研究をいち早く届ける役割があります。しかし、内容が難しいと言われることはしばしばで、ちょっとプロの視点を添えながら一般の方々の興味もそそりたいところ、容易にお腹いっぱいにさせていることもあるようです。

現在（2022年7月～12月）は、特別展「進化する地質図」を開催しています。従来の紙媒体の地質図からネット対応の地質図へ、さらに都市域の三次元地質地盤図やジオツーリズムへの展開など、時代に合わせて多様化するGSJの地質図を紹介しています（写真5）。

近年開催したものには、日本の地名で初めて地質時代に刻まれた「祝チバニアン誕生！」、谷系に分布する砂の分析で実現した全国の元素で見る「地球化学図」、微小地震データから地殻応力場をAIで解析した「日本列島ストレスマップ」、大型の研究プロジェクトを取り上げた「深海の新しい資源にせまる」や「南極の過去と現在、そして未来」などがあります。これらは全国科学博物館協議会（全科協）の巡回展にも登録を進めています。全科協に加入の博物館に限らず、大学等の研究機関や自治体等の施設でもご利用いただけますので、ご要望の場合は当館までご

連絡下さい。過去の開催分も含め、特別展についてはホームページでブックレットがダウンロードできますので、その概要をご覧ください。いただくことが可能です。

また、比較的小規模のテーマ展示は企画展として開催しています。例年の化石の日になんだ展示や、昨年噴火した福徳岡ノ場火山の軽石などを取り上げています。

5. 研究をサポートする「薄片研磨技術」

学会の皆さんならご存じのとおり、地質の研究では顕微鏡観察や分析を行うため、精度の高い岩石の研磨技術が不可欠です。館内展示では、顕微鏡観察用の岩石薄片の作製過程などがご覧いただけます。また、高度な研磨技術で作製した、岩石や鉱物でできたリアルな昆虫標本も多数そろえています（写真6）。

GSJの薄片室は地質標本館に属しており、乾式法を導入するなど世界でも最高水準の技術でGSJの研究を支えています。また、外部からの要請に応じ、薄片作製のための技術研修も例年実施しています。

6. ここだけのオリジナル「ミュージアム・グッズ」

当館で販売しているミュージアム・グッズは、すべてがGSJの研究成果にまつわるものや所蔵標本をモチーフにしたもので、職員の間で考案しデザインした自製の商品です。そのため、どのグッズにも必ず説明書きがあります。例えば化石をモチーフにしていれば、その学術名はもちろん、産地、時代、地層名などの情報が付され、小さなマスキングテープにも、その何倍もの大きさの解説カードが付いてきます（写真7）。最近、日本で最初の全国地質図をプリントした風呂敷「日本群島地質図（明治22年刊行）」や、デスモスチルスの折りたたみ式「トートバッグ」、薄片写真をモチーフにした「マルチケース」などを新たに発売して好評を得ています。また、地質の専門家には野外で使える「フォトスケール」や「フィールドノート」も人気です。どれも地質標本館だけで手に入れられるオリジナルグッズです。

7. ホームページも情報満載

当館はホームページにも力を入れていますが、「おすすめ標本ストーリー」や「地質標



写真5 特別展「進化する地質図」

本鑑賞会」といったコーナーでは各種の登録標本を紹介しています。また、キッズページではミュージアムキャラクター「杏桃（あんも）ちゃん」と騎士（ないと）くん」の地質マンガや、難易度が高いと評判のクイズも盛り込んでいます。

8. 人材育成「博物館実習」

当館では、学芸員を志す学生のための博物館実習を1993年から毎年継続して実施しています。例年10数名の学生を受け入れ、これまでに約400名の実習生を輩出しました。館の裏側の仕事を学ぶとともに、標本清掃や展示解説などの実践的な業務にも取り組んでいたいただきます。毎年春に実習生を募集していますので、志しある学生にはチャレンジしてみてください。

おわりに

当館はリピーターが多く、来館者は全国から、ほぼ半数が県外からいらっしゃいます。学会会員の方ならまず一度は訪ねていただき、さらに活用していただきたいのが地質標本館です。他の研究機関や博物館とのコラボも積極的に実施し、上述のとおり、標本の活用や展示の二次利用にもお応えしています。ぜひ上手く地質標本館を活用してみてください。



写真6 岩石研磨技術で作製した石のハラビロカマキリ（体長53mm、パーツ数143）

写真7 マスキングテープ

CALENDAR

2022.7～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

2022年

7月 July

(後) 青少年のための科学の祭典2022 全国大会

7月30日(土) -31日(日) 10:00-15:30

場所：科学技術館(千代田区北の丸公園)

入場無料・事前予約制

<http://www.kagakunosaiten.jp/>

8月 August

(後) 科学教育研究協議会第68回全国研究大会(岡山大会)

8月10日(水)～12日(金)

会場：岡山理科大学 岡山キャンパス

<https://kakyokyo.org/>

第76回地学団体研究会総会(長野)

8月20日(土)～20日(日)

開催方式：現地開催とオンラインのハイブリッド方式

会場：信州大学教育学部(長野県長野市)

<https://www.chidanken.jp/>

(後) 第9回国際地学教育会議

8月21日(日)～25日(木)

場所：くにびきメッセ(島根県コンベンションセンター)

<https://ja.geoscied9.org/>

9月 September

★日本地質学会第129年学術大会(2022東京・早稲田大会)

口頭(対面) 9月4日(日)～6日(火)

ポスター(オンライン)：9月10日(土)～11日(日)

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス(東京都新宿区西早稲田)

※関連行事「地質情報展2022とうきょう」は同会場で9/3-9/5開催予定です。

(共) 2022年度日本地球化学会第69回年会

9月5日(月)～12日(月)

場所：高知大学朝倉キャンパス会場+オンライン会場(ハイブリッド開催)

<http://www.geochem.jp/meeting/>

(後) 第65回粘土科学討論会

9月7日(水)～8日(木)

(討論会のみの実施、現地見学会は開催しません)

会場：島根大学

http://www.cssj2.org/event/annual_meeting/

日本鉱物科学会2022年年会・総会

9月17日(土)～19日(月)

会場：新潟大学

<http://jams.la.coocan.jp>

第39回歴史地震研究会(高槻大会)

9月17日(土) -19日(月)

場所：関西大学高槻ミュージアムキャンパス

<http://www.histeq.jp/kenkyukai.html>

国際 Gondwana 研究連合 (IAGR) 2022年総会及び第19回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

9月23日～25日(シンポジウム)

9月26日～27日(峨眉山巨大火山区野外巡検)

場所：中国四川省成都工科大学

<https://www.data-box.jp/pdir/4aa617ecc00845c284f085edba48eec5>

11月 November

第35回ヒマラヤ・カラコルム・チベットワークショップ(HKT-35)

11月2日(水)～4日(金)

場所：ネパール・ポカラ

発表要旨締切：7月31日

www.gondwanainst.org/symposium/2022/HKT2022/Interimnotice-HKT-20220518.docx

問い合わせ：

Prof. A.P. Gajurel, apgajurel@fulbrightmail.org

Dr. L.B. Adhikari, lbadhikari@hotmail.com

日本火山学会2022年度・秋季大会

11月3日(木)～6日(日)

会場：三島市民文化会館・三島市民生涯学習センター(状況により開催方法・内容が変更になる可能性があります)

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html>

12月 December

(協) 第38回ゼオライト研究発表会

12月1日(木)～2日(金)

場所：あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)

講演申込締切：9月9日(金)

<https://jza-online.org/>

地質学史懇話会(オンラインとハイブリッド)

12月17日(土) 13:30-16:30

場所：早稲田奉仕園(東京メトロ東西線早稲田駅下車徒歩5分)

山田俊弘・須貝俊彦「望月勝海日記通読プロジェクト」(仮題)

今村遼平「中国地図測量史」

問い合わせ：矢島道子 pxi02070@nifty.com

注意：新型コロナウイルス感染拡大の影響により、行事中止の可能性もあります。実際の行事開催の有無については事前に各主催者、問い合わせ先にご確認ください。

伊能忠敬(1745-1818)は幕府の命により全国を実地測量して精密な地図を作ったが、伊能図(大日本沿海輿地全図:文政4(1821)年完成)は秘密とされ一般人は使用できなかった。それに対し、長久保赤水(1717-1801)が作ったのは10里が1寸の縮尺(約130万分の1)の1枚刷り全国図で、経緯線が入り、郡や村、道路、山川、古跡名勝等が詳しく示され、国別の色分けも美しく、安永9(1780)年に大坂で初版を出版して以来、明治の初めまで約100年間にわたって版を重ね、国内はもちろん国外でも、正確で実用的な日本地図として重宝された。伊能も測量の際には赤水図を携行したという。令和2(2020)年に赤水の地図や資料が国の重要文化財に指定され、令和4年5月31日と6月7日の東京新聞朝刊に「伊能忠敬より42年も前に日本地図を作った男 長久保赤水を語る」という佐川春久の論説が載るなど、評価が高まっている。赤水の出身地は常陸国多賀郡浜村、現在の茨城県高萩市であり、そこでは復刻出版等の顕彰事業が進む。ところで、幕末の文久4(1864)年に江戸で出版された「大日本海陸全図」(笑寿屋庄七梓、竹口滝三郎刻)の作者整軒玄魚の説明文には、「坊間流布の刊本は何れも全備して誤脱なきは未だ見及ばず。ただ往年地学に名を轟かしたりし水府赤水先生の輿地全図は紙幅少くして微細にこそ書記されね錯誤は大方あらぬようなり」(カナを現代風に改変)と書いてある。実際この海陸全図はほとんど赤水図のコピーで、それに不正確な蝦夷島(北海道)の地図を描き加えたものである。この説明文で注目すべきは赤水先生が「地学に名を轟かした」と述べていることで、以下に赤水図が地学的に優れている点を指摘し、「江戸時代中期の地学者」長久保赤水の労作の紹介とした。

まず、赤水図左下の説明文を見ると、各地で観測された北極星の高度によって緯線を引いたこと、緯度1度はほぼ32里に相当することを述べている(32里は約126kmだが、実際の緯度1度は約111km)。江戸付近の緯線を現在の地図と比べると約7分南へずれていて、例えば現在の北緯35度線は伊豆半島の伊東や修善寺の少し北を通るが、赤水図では天城山付近を通る違いはあるものの、当時既に緯度を約0.1度の精度で測定できていたことになる。また、同じ説明文には、太陽は一時(2時間)に30度動き、日本は東海から西海まで経度で10度の差があるから、常陸・陸奥の年の初刻(午前11時頃)は長崎辺の巳の下刻(午前10時過ぎ)だと述べている。これは時差を正確に認識していたことを示す。図の左上には「東都榊原隠士考証」の潮汐についての説明文がある。長門付近の満潮は紀伊の満潮と同期し、瀬戸内海両端から入った潮は75里(約300km)先の備中白石(島、笠岡市)で合すること、明石の潮は大坂より半時(1時間)ほど遅く、備前の潮は播磨より二時遅く、備中の潮は備前より一時遅いこと、北国(北陸)では潮の干満が小さく、時候によっては5~7日間一方的に引き潮になることがあり、これを片潮と言うと述べている。丸善の理科年表によると、東京との干満時間のずれは神戸で+2h30m、高松(備中の対岸)で+6h20m、広島で+4h50m、下関で+4h20mとなっていて、赤水図の記述と大差なく、北陸の干満差が小さいのは現在も同様である。「片潮」は広辞苑に無い語だが、海事関係者の間では今も使われる。

赤水図には各地の自然がよく記入されている。例えば新湯焼山、浅間山、阿蘇山、温泉(雲仙)岳、霧島山などの活火山には山上に噴煙が描かれており(なぜか桜島には噴煙がない)、温泉岳には「デゴクアリ」と注記してあるが、この地図出版の翌1792年、島原大変肥後迷惑と呼ばれる地獄のような火山災害

が起きた。富士山には1707年の噴火でできた宝永山が付記しており、八ヶ岳は山を8つ並べ、妙義山はギザギザの稜線になっている等、山の形は実物に即している。各地の「富士」も示されていて、岩木山には津軽富士と注記され、松山西方の海中に伊予富士(興居島:最近石鎚山系の高知県境の山を伊予富士と言い、この島は伊予小富士という)が描いてある。秋田県にかほ市の象潟は入江になっていて、その中に多数の島が描いてあるが、ここは文化元(1804)年の象潟地震で隆起陸化し、多島海の景観が失われてしまった。山形県大沼にも多数の島が描かれ、「ウキシマアリ」と注記してあるほか、宮城県松島や長崎県佐世保市の九十九島にも多数の島が描いてある。一方、江戸の西には「ムサシの」として多数の樹木を描いてある。また、「越後に七奇ありと。しかした火井と山油を以て奇とするに足る」という注記があり、阿賀野川中流域右岸に火井と山油の産出位置が示してある。当時の重要な鉱山として石見(大森)銀山が示されているが、禁に触れるためか、佐渡金山は示していない。伊豆七島の御蔵島と八丈島の間に「黒瀬川広さ30町(約3km)ばかり。また黒潮と言う。片セ(片瀬、片潮)急流。冬春の間にあり、夏秋はなし。舟行甚だ難し」として流れの位置が示してある。

また、全国3カ所の海上の火について特記されている。有明海・八代海は、「海面時に火有り。累々として相連なり聚散動止す。けだし陰火なり。景行帝この火に感じ、以て其の国を名づく(大化改新前、肥前・肥後は「火の国」と言った)」とある。また、豊前沖には、「海上時に火光を現す。聚散飛動す。初め山より二火出で、空中で合して戦うが如し。而して海に落ちてまた山に帰る。名づけて不知火と言う」とある。そして磐城四ツ倉沖には、「海上に毎夜陰火起こる。大きき炬の如し。竈川(夏井川)を廻り、赤井岳(阿加井岳、関伽井嶽)の麓に至る。大杉の梢を飛び懸け、須臾にして林中に隠る。続いてまた上る。初昏より曉に至る。累々乎として不断。その数幾つかを知らず。凡そ月夜即ち火光薄く、暗夜即ち明らかなり。この火独り阿加井岳に於いてこれを見る。他よりこれを観るところ一点の光影なく、また奇なり。これを名づけて阿加井竜灯という」とある。海岸から関伽井岳までは16kmで、その途中に



寛政3(1791)年の改正日本輿地路程全図(赤水図)第二版(常州水戸 長玄珠子王父製、浪華 浅野弥兵衛発行、京師 畑九兵衛鑄字)の復刻版(129×83cm)。高萩市教育委員会生涯学習課が希望者に有料で配布している。申込方法は同課HP参照。ただし、この復刻版の序文の標題は「改正…」ではなく「新刻…」になっている。

<https://www.city.takahagi.ibaraki.jp/page/page004791.html>

わき（平）市街がある。現在、不知火は漁火や街の灯が海面や河面付近の冷気で屈折し、空中を飛動するように見える現象と説明されている（夏に多い）。

これら赤水図の記述内容を見ると、「地学に名を轟かした」実力がよくわかる。しかし、赤水は旅行好きだったものの、伊能忠敬のように全国を歩いて地図を作ったわけではない。赤水図第二版の「阿波国儒者讃岐柴邦彦」撰の序文によると、自室の壁に白地図を貼って、旅の僧侶や商人を呼び込み、茶菓で歓待してその郷里や道中の地理を聞き出し、新知見を白地図にどんどん書き入れて地図を完成させたのだという。つまり踏査ではなく接待で作上げた地図ということになる。赤水図の出羽湯沢の北の「言語同断」※という書き込みは意味不明だが、もしかしたら、湯沢から来た客が言語道断の振る舞いをしたのかもしれない。また、この図が近年注目されるもう一つの理由は竹島が描かれていることで、「一に磯竹島と言う。高麗と雲州（出雲）を見、隠州（隠岐）を望む」と注記されている。高萩市教委のパンフによると、赤水は朝鮮輿地之図、中国の三国時代の地図、地球万国全図等も描き、天体の運行を説明した初心

者向けの天文書（星座早見盤つき）も刊行したとのことである。

長久保赤水（玄珠、源五兵衛）は農民の子として生を享け、11歳までに両親を失う不幸な生い立ちだったが、勉学に精励して武士格の儒学者となり、晩年には水戸徳川家第6代治保（文公）の侍講を務め、「大日本史」地理誌の編纂を行った。パンフの肖像画からは、明朗快活だが一癖ある、といった性格が伺え、会えば開口一番「お国はどちらですか」と聞かれそうな気がする。江戸時代中期の日本の地学のレベルの高さがよくわかる赤水図のご一覧をお勧めする。

※追記：「言語同断」は地名であることがわかった。読みは「てくら」で、現在の秋田県雄勝郡東成瀬村手倉付近を指した。ここは湯沢・横手の盆地から東へ向かう街道が山に入る所で、江戸時代はここに番所があり、「国払い」にする罪人を久保田（秋田市）からここまで役人が護送してきて、国に戻ることは言語道断である旨を言い渡すなどして、国外に追放したようである。なお、「てくらだ」と読む姓もあるそうである。

一般社団法人日本地質学会定款

第1章 総 則

(名 称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本地質学会（以下「学会」という）と称する。学会の英文名称はThe Geological Society of Japan（略称J.G.S.）という。

(事務所)

第2条 この学会は、主たる事務所を東京都千代田区に置く。

2 この学会は、理事会の議決を経て、日本国内の必要の地に支部を置くことができる。

(目 的)

第3条 この学会は、地質学とその応用についての研究成果の公表、知識の交換、内外の関連学会との連携協力等を行うことにより、地質学の進歩と普及を図り、学術の振興と社会の発展に寄与・貢献することを目的とする。

2 第1項の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 地質学に関する研究開発の推進、奨励ならびに援助
- (2) 地質学に関する研究成果の公表、普及ならびに情報の提供
- (3) 地質学に関する調査、情報収集
- (4) 地質学に関する技術指導、人材育成
- (5) 地質学に関する教育、普及、啓発
- (6) 地質学に基づく献策
- (7) 関連する諸団体ならびに産学官の諸機関との交流および協力
- (8) 前号にあげるもののほか、本会の目的を達成するために必要な事業

3 前項の事業は、日本全国において行うとともに海外との学術交流を通じて行う。

(規 律)

第4条 この学会は、総会の決議により別途定める「一般社団法人日本地質学会倫理綱領」（以下「倫理綱領」という）の理念と規範に則り、公正かつ適正に会を運営し、前条の公益目的の達成と社会的信頼の維持・向上に努めるものとする。

(公 告)

第5条 この学会の公告は、電子公告による。

2 やむを得ない事由により、電子公告によることができない場合は、官報に掲載する方法による。

第2章 会 員

(種 別)

第6条 この学会の会員は次の4種とする。

(1) 正会員 この学会の目的に賛同して入会した個人であり、所属、年齢などにより、正会員を以下の3種に分ける。

・学生会員 大学学部、大学院および高等専門学校の4学年以上に在籍する者で、学生証の写しによりその在籍を証明する者

・一般会員 学生会員を除く、65歳未満の者

・シニア会員 学生会員を除く、65歳以上の者

(2) 賛助会員 この学会の目的に賛同し、この学会の事業を賛助するため入会した個人、法人および団体

(3) 名誉会員 正会員の中から、地質学の発展に関する功績または学会への貢献が特に顕著な者で、代議員総会（以下「総会」という）の決議をもって推薦された者

(4) ジュニア会員 中学校、高等学校あるいは高等専門学校の1学年から3学年に在籍し、地質学およびこの学会に興味をもつ

て入会した個人

2 正会員は、この学会に対し「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」（以下「法人法」という）に定められた以下の社員の権利を社員と同様に行使することができる。

- (1) 法人法第14条第2項の権利（定款の閲覧等）
 - (2) 法人法第32条第2項の権利（社員名簿の閲覧等）
 - (3) 法人法第50条第6項の権利（社員の代理権証明書等の閲覧等）
 - (4) 法人法第52条第5項の権利（電磁的方法による議決権行使記録の閲覧等）
 - (5) 法人法第57条第4項の権利（社員総会の議事録の閲覧等）
 - (6) 法人法第129条第3項の権利（計算書類等の閲覧等）
 - (7) 法人法第229条第2項の権利（清算法人の貸借対照表等の閲覧等）
 - (8) 法人法第246条第3項、法人法第250条第3項および法人法第256条第3項の権利（合併契約等の閲覧等）
- 3 正会員は、代議員選出のための選挙権および被選挙権を持つ。

(入 会)

第7条 入会は、総会の決議により別途定める「一般社団法人日本地質学会運営規則」（以下「運営規則」という）に従い、所定の入会申込書を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

(会 費)

第8条 運営規則に従い、名誉会員およびジュニア会員を除く会員は規定の会費を納入しなければならない。

2 会費は一定の割合を公益に資するものとし、その割合は総会の決議により定める運営規則に別途定める。

(会員の責務)

第9条 会員は学会の目的に従い、倫理綱領を遵守しなければならない。

(資格の喪失)

第10条 会員は、次の各号の一に該当する場合はその資格を喪失する。

- (1) 退会したとき
- (2) 死亡、もしくは失踪宣告を受けたとき
- (3) 成年被後見人または被保佐人になったとき
- (4) 法人および団体が解散したとき
- (5) 会費を滞納し、理事会の議決があったとき
- (6) 総会の決議により除名されたとき
- (7) 全代議員の同意があったとき
- (8) この学会が解散したとき

(退 会)

第11条 会員が退会しようとするときは、退会届を提出し、任意に退会することができる。

(除 名)

第12条 会員が次の各号の一に該当するときは、総会の決議により別途定める「一般社団法人日本地質学会除名規則」に基づき、理事会および総会における各々3分2以上に当たる多数の議決によりこれを除名することができる。

- (1) 会員としてこの学会の名誉を傷つけたとき
- (2) 学会の目的に違反する行為があったとき

(3) 学会の倫理綱領に著しく抵触する行為があったとき

(4) その他の正当な事由があるとき

2 前項の各号に関し、事実確認に必要な手続きは別に定める。

3 第1項により除名が議決されたときは、その会員に対し、通知するものとする。

(会員資格喪失に伴う権利および義務)

第13条 会員が第10条の規定によりその資格を喪失したときは、この学会に対する権利を失い、義務を免れる。ただし、未履行の義務はこれを免れることはできない。

2 会員が第10条の規定によりその資格を喪失した場合、既納の会費はいかなる事由があっても返還しない。

第3章 代議員

(定数)

第14条 この学会に100名以上220名以下の代議員をおく。代議員の数は総会の決議により定める「一般社団法人日本地質学会選挙規則」(以下「選挙規則」という)により別途定める。

(選任)

第15条 代議員は、正会員による選挙により正会員の中から選出する。代議員をもって法人法における社員とする。

2 代議員は役員を兼ねることができない。

3 代議員の選挙は、選挙規則に基づいて行う。

4 代議員の欠員が生じた場合は、選挙規則に従い、速やかに欠員を補充する。

5 理事または理事会は代議員を選出することはできない。

(職務・権限)

第16条 代議員は社員として総会に出席し、総会での議決権を有するものとする。

(代議員の任期)

第17条 代議員の任期は選任後2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時総会の終結のときまでとする。総会の決議によってその任期を短縮すること、および再任を妨げない。

2 代議員が法人法に基づく、総会決議取り消しの訴え、解散の訴え、責任追及の訴えおよび役員解任の訴えを提起している場合には当該訴訟が解決するまでの間、当該代議員は社員としての地位を失わない。

3 欠員または増員により選任された代議員の任期は、前任者又は現任者の残任期間とする。

4 代議員は、その辞任または任期満了後でも後任者が就任するまでは、その任務を行う。

(代議員の解任)

第18条 代議員が次の各号の一に該当するときは、理事会および総会の各々の3分の2以上に当たる多数の議決により、解任することができる。

(1) 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき

(2) 職務上の義務に違反し、またはその職務を怠ったとき

(3) その他、代議員たるにふさわしくない行為があると認められるとき

(代議員の報酬)

第19条 代議員は無報酬とする。

第4章 総会

(構成)

第20条 この学会の総会は、すべての代議員をもって構成し、

法人法に定める社員総会とする。

(権限)

第21条 総会は、法人法に定める事項およびこの定款で定める事項を議決する。

(1) 役員の選任および解任、代議員の解任

(2) 役員等の報酬の額またはその規定

(3) 定款の変更

(4) 各事業年度の事業報告および計算書類等

(5) 各事業年度の事業計画および予算

(6) 会費等の金額

(7) 会員の除名

(8) 長期借入金ならびに重要な財産の処分および譲受け

(9) 役員等の損害賠償責任

(10) 解散および残余財産の処分

(11) 合併、事業の全部もしくは一部の譲渡または公益目的事業の全部の廃止

(12) 理事会において総会に付議した事項

2 前項にかかわらず定時および臨時総会においては、予め書面をもって通知した総会の目的以外の事項は、議決することができない。

3 第1項第10号に関し、総会は、剰余金の分配に関する決議をすることはできない。

(開催)

第22条 定時総会は毎事業年度終了後、3ヵ月以内に開催する。

2 臨時総会は、次の各号の一に該当する場合に開催する。

(1) 理事が必要と認め、理事会に招集の請求をしたとき

(2) 議決権の10分の1以上を有する代議員から、会議の目的である事項および招集の理由を記載した書面により、招集の請求が理事にあったとき

3 前項第2号の請求をした代議員は、請求後遅滞なく招集の手続きが行われない場合、また、請求をした日から6週間以内の日を総会の日とする招集の通知が発せられない場合には、裁判所の許可を得て、総会を招集することができる。

(招集)

第23条 総会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき会長が招集する。ただしすべての代議員の同意がある場合には、その招集手続きを省略することができる。

2 会長は、前条第2項第2号の規定による請求があったときは、その日から6週間以内に臨時総会を招集しなければならない。

3 総会を招集するときは、会議の日時、場所、目的および審議事項を記載した書面または電磁的方法をもって、開催日の2週間前までに役員および代議員に通知しなければならない。

4 代議員以外の正会員は別途定める「一般社団法人日本地質学会総会規則」(以下「総会規則」という)に従い総会に陪席することができる。

(議長)

第24条 総会の議長は、会議のつど、出席代議員の中から選出する。

(定足数)

第25条 総会は、総代議員の議決権の過半数を有する代議員が出席しなければ、議事を開き決議することができない。

(議決権)

第26条 総会における議決権は、代議員1名につき1個とする。

(決議)

第27条 総会の決議は、法人法第49条第2項に規定する事項およびこの定款に特に規定するものを除き、出席した代議員の議決権の過半数をもって行う。

(議決権の代理・書面による行使)

第28条 やむを得ない理由のため総会に出席できない代議員は、予め通知された事項について、書面または電磁的方法により議決権を行使し、または他の代議員を代理人として議決権を行使することができる。この場合、代議員は出席したものとみなす。

2 理事または代議員が、総会の決議の目的である事項について提案した場合において、代議員の全員が書面または電磁的方法により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の同意があったものとみなす。

(報告の省略)

第29条 理事が代議員の全員に対し、総会に報告すべき事項について予め通知した場合において、その事項を総会において報告することを要しないことにつき、代議員の全員が書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときには、その報告が総会においてあったものとみなす。

(議事録)

第30条 総会の議事については法令の定めに従って議事録を作成しなければならない。

2 議事録は速やかに全会員に公開し、議決事項を知らせるものとする。

3 議事録は総会の日から10年間、主たる事務所に備え置く。

(総会規則)

第31条 総会の運営に関し必要な事項は、法令またはこの定款に定めるもののほか、総会において定める総会規則による。

第5章 役員等

(種類および定数)

第32条 この学会には、次の役員を置く。

(1) 理事 40名以上60名以内

(2) 監事 1名以上

2 理事のうち1名を代表理事とし、代表理事をもって会長とする。また、理事のうち2名を副会長とする。理事のうち15名以内を執行理事とし、そのうちの各1名を常務理事・副常務理事とする。

(選任等)

第33条 理事および監事は、総会の決議により別途定める選挙規則に基づき、代議員の選挙により選任する。

2 理事会は、一般社団法人日本地質学会理事会規則（以下理事会規則という）により会長1名、副会長2名、常務理事1名、副常務理事1名および執行理事を選任し、代議員に報告する。

3 監事は理事または使用人を兼ねることができない。

4 理事のいずれか1名とその配偶者または3親等内の親族その他特別の関係にある者の合計数は、理事数の3分の1を超えてはならない。監事についても同様とする。

5 他の同一団体の理事または使用人である者、その他これに準ずる相互に密接な関係にあるものとして法令で定める者である理事の合計数は、理事総数の3分の1を超えてはならない。監事についても同様とする。

6 理事会は、前2項に関し、当該者間の特別な利益の授受および供与を禁止する。

7 この学会が公益社団法人及び公益財団法人認定法（以下

「公益認定法」という）の規定に基づく公益認定を受けた場合において、理事または監事に異動があったときは、2週間以内に登記し、登記簿の謄本を添え、遅滞なく行政庁に届け出なければならない。

(理事の職務・権限)

第34条 理事は理事会を構成し、法令およびこの定款の定めるところにより、理事会が決定したこの学会の業務を分担執行する。

2 会長はこの学会を代表し、業務の執行を統括する。

3 副会長は会長を補佐し、会長の業務を分担執行する。

4 常務理事、副常務理事は会長、副会長を補佐しその他の執行理事とともに、この学会の業務を分担執行する。

5 理事および執行理事の権限は理事会が別に定める職務権限規定による。

6 会長、副会長、常務理事、副常務理事および前項の業務を執行する理事は、毎事業年度ごとに3ヵ月を超える間隔で3回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

(監事の職務・権限)

第35条 監事は、次の各号に規定する職務を行う。

(1) 理事の職務執行の状況を監査すること

(2) 学会の業務ならびに財産の状況を監査すること

(3) 総会および理事会に出席し、意見を述べること

(4) 理事が不正の行為をし、もしくはその行為をする恐れがあると認めるとき、または法令もしくは

定款に違反する事実、もしくは著しく不当な事実があると認めるときは、これを理事会、総会に報告すること

(5) 前号の報告をするため必要があるときは、会長に理事会の招集を請求すること。ただし、請求のあった日から5日以内に、2週間以内の日を理事会とする招集通知が発せられないときは、直接理事会を招集すること

(6) 理事が総会に提案しようとする議案、書類その他法令で定めるものを調査し、法令もしくは定款に違反し、または著しく不当な事項があると認めるときは、その調査の結果を総会に報告すること

(7) 理事が学会の目的範囲外の行為とその他法令もしくは定款に違反する行為をするおそれがあるときは、その理事に対し、その行為をやめることを請求すること

(8) その他監事に認められた法令上の権限を行使すること

(任期)

第36条 理事の任期は選任後2年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時総会の終結のときまでとし、総会の決議によってその任期を短縮すること、および再任を妨げない。

2 監事の任期は選任後4年以内に終了する事業年度のうち、最終のものに関する定時総会の終結のときまでとし、再任を妨げない。

3 補欠または増員により選任された理事の任期は、前任者または在任者の残任期間とする。

4 補欠として選任された監事の任期は、前任者の残任期間とする。

5 役員は、その辞任または任期満了後でも後任者が就任するまでは、その職務を行う。

(解任)

第37条 役員が次の各号の一に該当するときは、総会において解任することができる。ただし、監事を解任する場合は3分の2以上に当たる多数の議決に基づいて行わなければならない。

なお、議決する前に理事会および総会でその役員に弁明の機会を与えなければならない。

- (1) 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき
- (2) 職務上の義務に違反し、またはその職務を怠ったとき
- (3) その他、役員たるにふさわしくない行為があると認められるとき

(報酬等)

第38条 役員は、有給とすることができる。

2 役員には、職務執行に要する費用の支払いをすることができる。

3 役員の報酬は、総会の決議により定め、支給方法等については別途定める「一般社団法人日本地質学会役員報酬規則」による。

(取引の制限)

第39条 理事が次にあげる取引をしようとする場合は、その取引について重要な事実を開示し、理事会の承認を得なければならない。

- (1) 自己または第三者のためにするこの学会の事業の部類に属する取引
- (2) 自己または第三者のためにするこの学会との取引
- (3) この学会がその理事の債務を保証すること、その他理事以外のものとの間におけるこの学会とその理事との利益が相反する取引

2 前項の取引をした理事は、その取引の重要な事実を遅滞なく、理事会に報告しなければならない。

3 前2項の取り扱いについては、第51条に定める理事会規則によるものとする。

(責任の免除または限定)

第40条 この学会は、法人法第111条第1項の役員の賠償責任については、法人法第112条の規定にかかわらず、総正会員の同意がなければ免除することができない。ただし、法令に定める要件に該当する場合には、理事会および総会で各々の3分の2以上に当たる多数の議決によって、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。

2 この学会は、外部役員との間で、前項の賠償責任について法令に定める要件に該当する場合には、賠償責任を限定する契約を締結することができる。ただし、その契約に基づく賠償責任の限度額は、金50万円以上で予め定めた額と法令の定める最低責任限度額とのいずれか高い額とする。

第6章 理事会

(構成)

第41条 この学会に理事会をおき、理事会はすべての理事をもって構成する。

(権限)

第42条 理事会は、この定款に別に定めるもののほか、次の職務を行う。

- (1) 総会の日時および場所ならびに目的事項の決定
- (2) 規則の制定、変更および廃止に関する事項
- (3) 前各号に定めるもののほかこの学会の業務執行の決定
- (4) 理事および執行理事の職務の執行の監督
- (5) 会長、副会長、常務理事、副常務理事および執行理事の選定および解職

2 理事会は、内部管理体制の整備および以下にあげる事項、その他の重要な業務執行の決定を、理事に委任することができる。

ない。また、以下の事項については、理事会の議決を経て総会の議に付すものとする。

- (1) 重要な財産の処分および譲り受け
- (2) 多額の借財
- (3) 重要な使用人の選任および解任
- (4) 従たる事務所その他重要な組織の設置、変更および廃止
- (5) 理事の職務の執行が、法令および定款に適合することを確認するための体制、その他この学会の業務の適正を確保するために必要な、法令で定める体制の整備
- (6) 第40条第1項の責任の免除および同条第2項の責任限定契約の締結

3 業務の執行は、執行理事会がこれを行う。執行理事会については別に定める理事会規則によるものとする。

(開催)

第43条 定例理事会は毎事業年度に3回以上開催する。また、次の各号の一に該当する場合は臨時理事会を開催する。

- (1) 会長が必要と認めたとき
- (2) 会長以外の理事から、会議の目的である事項を記載した書面をもって招集の請求があったとき
- (3) 前号の請求があった日から5日以内に、その日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集通知が発せられない場合に、その請求をした理事が招集したとき
- (4) 第35条第5号の規定により、監事から招集の請求があったとき、または監事が招集したとき

(招集)

第44条 理事会は会長が招集する。ただし、前条第3号により理事が招集する場合および第4号後段の監事が招集する場合を除く。

2 会長は、前条第2号、4号前段または法人法第101条第2項に該当する場合は、その請求があった日から2週間以内に臨時理事会を招集しなければならない。

3 理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的である事項を記載した書面または電磁的方法により、開催日の5日前までに各理事および各監事に対して通知しなければならない。

4 前項の規定にかかわらず、理事および監事の全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく理事会を開催することができる。

5 事前に傍聴を希望した会員は、理事会に陪席することができる。また、理事が必要とし会長が認める者を招聘することができる。

(議長)

第45条 理事会の議長は、執行理事以外の理事の互選により選出された理事がこれに当たる。

(定足数)

第46条 理事会は、理事の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

(議決)

第47条 理事会の議事はこの定款に定めがあるもののほか、議決に加わることができる理事の過半数が出席し、その過半数をもって決する。

(決議の省略)

第48条 理事が、理事会の決議の目的である事項について提案した場合において、その提案について議決に加わることができる理事の全員が、書面または電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の理事会の議決があっ

たものとみなす。ただし、監事が異議を述べたときは、その限りではない。

(報告の省略)

第49条 理事または監事が理事または監事の全員に対し、理事会に報告すべき事項を通知した場合においては、その事項を理事会に報告することを要しない。ただし、法人法第91条第2項の規定による報告についてはこの限りではない。

(議事録)

第50条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成し、出席した理事および監事は、これに署名しなければならない。

(理事会規則)

第51条 理事会に関する事項は、法令またはこの定款に定めるもののほか、理事会規則による。

第7章 財産および会計

(事業年度)

第52条 この学会の事業年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(基本財産の維持および処分)

第53条 第3条第2項の事業を行うために学会は基本財産を設け、その適正な維持および管理に務めるものとする。

2 やむを得ない理由により、基本財産の全部もしくは一部を処分または担保に提供する場合は、理事会において議決に加わることのできる理事の3分の2以上に当たる多数の議決を経て、総会の議事に付す。

3 基本財産の維持および処分について必要な事項は、理事会の決議により別に定める「一般社団法人日本地質学会財産管理運用規則」(以下「財産管理運用規則」という)によるものとする。

(財産の管理・運用)

第54条 この学会の財産の管理・運用は会長が行うものとし、その方法は理事会の決議により別に定める財産管理運用規則によるものとする。

2 以下の各号を財産の管理運用上の禁止事項として定める。

- (1) 余剰金を分配すること。
- (2) 会員、役員もしくは使用人、基金の拠出者並びにこれらの親族に対し、特別の利益を与えること。
- (3) 株式会社その他の営利事業を営む者又は特定の個人もしくは団体の利益を図る活動を行うものとして政令で定める者に対し、寄附その他の特別の利益を与える行為を行うこと。ただし、公益法人に対し、当該公益法人が行う公益目的事業のために寄附その他の特別の利益を与える行為を行う場合は、この限りでない。

(事業計画および予算)

第55条 この学会の事業計画および予算、資金調達および設備投資の見込みを記載した書類については、毎事業年度の開始の日の前日までに会長が作成し、理事会の決議を経て直近の総会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。

2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情により予算が成立しないときは、理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じて実施することができる。

3 前項により実施されたものは、新たに成立した予算とみな

す。

4 第1項の書類については、当該事業年度終了まで主たる事務所および従たる事務所に備え置き、一般の閲覧に供する。なお、この学会が公益認定法の規定に基づく公益認定を受けた場合においては、遅滞なく行政庁に届け出なければならない。

(事業報告および計算)

第56条 この学会の事業報告および決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受け、理事会の承認を得たうえで、定時総会に報告しなければならない。ただし、第3号から第6号までの書類について、法人法施行規則第48条に定める要件に該当しない場合には、定時総会への報告に代えて総会の承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属明細書
- (3) 貸借対照表
- (4) 損益計算書(正味財産増減計算書)
- (5) 貸借対照表および損益計算書(正味財産増減計算書)の附属明細書
- (6) 財産目録

2 前項の計算書類のほかに、次の書類を主たる事務所に5年間、また、従たる事務所に3年間備え置き、一般の閲覧に供する。また、定款を主たる事務所および従たる事務所に、代議員名簿を主たる事務所に備え置き、一般の閲覧に供するものとする。

- (1) 監査報告書。
- (2) 理事および監事の名簿
- (3) 理事および監事の報酬等の支給の基準を記載した書類(役員報酬規則)
- (4) 運営組織ならびに事業活動の状況の概要およびこれらに関する数値のうち、重要なものを記載した書類
- (5) その他法令で定める帳簿および書類

3 前項各号の帳簿および書類等の閲覧については、法令の定めによるほか、第69条第2項の定めによるものとする。

4 第1項の定時総会終了後直ちに、法令の定めるところにより、貸借対照表を公告するものとする。

(公益目的取得財産額の算定)

第57条 会長は、公益認定法に関する施行規則第48条の規定に基づき、毎事業年度の末日における当該事業年度の公益目的取得財産残額を算定し、前条第2項第4号の書類に記載するものとする。

(長期借入金および重要な財産の処分または譲受け)

第58条 資金借り入れをしようとするときは、その会計年度の収入をもって償還する短期借入金を除き、総会において代議員の半数以上であって、総代議員の議決権の3分の2以上の議決を経なければならない。

2 重要な財産の処分または譲受けを行おうとするときも、前項と同じ議決を経なければならない。

(会計原則)

第59条 この学会の会計は、一般に公正妥当と認められる公益法人の会計の慣行に従うものとする。

第8章 定款の変更、合併および解散等

(定款の変更)

第60条 この定款は第63条の規定を除き、総会において、総代議員の半数以上であって、総代議員の議決権の3分の2以上の議決により変更することができる。

2 この学会が公益認定法の規定に基づく公益認定を受けた場合においては、前項の変更を行ったときは、遅滞なく行政庁に届けなければならない。

(合併等)

第61条 総会において、総代議員の半数以上であって、総代議員の議決権の3分の2以上による多数の議決により、他の法人法上の法人との合併、事業の全部または一部の譲渡および公益目的事業の全部を廃止することができる。

2 なお、この学会が公益認定法の規定に基づく公益認定を受けた場合においては、前項の行為をしようとするときは、予めその旨を行政庁に届け出なければならない。

(解散)

第62条 この学会は法人法第148条第1号および第2号ならびに第4号から第7号までに規定する事由によるほか、総会において、総代議員の半数以上であって、総代議員の議決権の3分の2以上に当たる多数の議決により解散することができる。

(公益認定等の取り消し等に伴う贈与)

第63条 この学会が公益認定の取り消しの処分を受けた場合、または、合併により消滅する場合には、(その権利義務を継承する団体が公益法人の場合を除いて)総会の決議を経て、公益目的取得財産残額に相当する額の財産を、1ヵ月以内にこの学会と類似の事業を目的とする公益法人または国、もしくは地方公共団体に贈与するものとする。

(残余財産の帰属)

第64条 この学会が解散等により清算するときに有する残余財産は、総会の議決により、この学会と類似の事業を目的とする他の公益法人または国、もしくは地方公共団体に寄付するものとし、分配は行わない。

第9章 専門部会・研究委員会・委員会

(専門部会)

第65条 理事会はこの学会の事業を推進するために理事会規則により、専門部会を設置することができる。

(研究委員会)

第66条 理事会は、会員の要請により地質学およびこれに関連する諸科学の特定課題を研究するために、理事会規則により研究委員会を設置することができる。

(委員会)

第67条 理事会は、この学会の事業を推進するために必要あるときは、理事会規則により委員会を設置することができる。

第10章 事務局

(設置)

第68条 この学会の事務を処理するため、事務局および必要な事務局職員を置く。

2 事務局職員は、理事会の承認を得て会長が任免する。

3 事務局の組織および運営に関し必要な事項は、理事会の議決により別に定める。

第11章 情報公開および個人情報の保護

(情報公開)

第69条 この学会は、公正で開かれた活動を推進するため、その活動状況、運営内容、財務資料等を積極的に公開するものとする。

2 情報公開に関する必要な事項は、理事会の議決により別に

定める。

(個人情報の保護)

第70条 この学会は業務上知り得た個人情報の保護に万全を期すものとする。

2 個人情報の保護に関する必要な事項は、理事会の議決により別に定める。

第12章 附 則

(委任)

第71条 この学会の運営に必要な事項は、この定款に定めるほか、理事会の議決により別に定める。

(最初の事業年度)

第72条 この学会の設立初年度の事業計画および予算は第55条に関わらず、設立総会の定めるところによる。

2 この学会の設立初年度の事業年度は、この学会の成立の日から2009年3月31日までとする。

(設立時社員の氏名等)

第73条

この学会の設立時社員の氏名、住所は次のとおりである。(氏名のみ掲載。一住所記載せず)

設立時社員

井龍康文 上砂正一 倉本真一 齋藤 眞 坂口有人 高木秀雄 藤本光一郎 宮下純夫 矢島道子 渡部芳夫

(設立時役員の氏名等)

第74条

この学会の設立時理事・監事および代表理事は次のとおりである。

設立時理事

石渡 明 井龍康文 岩森 光 上砂正一 倉本真一 小嶋智 齋藤 眞 坂口有人 高木秀雄 佃

栄吉 久田健一郎 藤林紀枝 藤本光一郎 宮下純夫 向山 栄 矢島道子 渡部芳夫 足立勝治 阿部國廣 荒戸裕之 安

藤寿男 磯崎行雄 伊藤谷生 ト部厚志 永広昌之 大友幸子 岡 孝雄 小山内康人 狩野謙一 川端清司 北里洋 木村

学 公文富士夫 紺谷吉弘 佐々木和彦 沢田順弘 柴 正博 芝川明義 高橋正樹 滝田良基 中川光弘 新妻信明 保柳康

一 堀 利栄 松岡 篤 松原典孝 三宅康幸 村山雅史 山路 敦 山根 誠 吉川敏之 脇田浩二 渡辺真人

山本正司(監事)

宮下純夫(代表理事)

(法令の準拠)

第75条

本定款に定めのない事項は、すべて法人法、その他の法令に従う。

・2008年12月1日 制定

・2012年5月19日 一部改正

・2014年5月24日 一部改正

・2022年6月11日 一部変更

一般社団法人日本地質学会運営規則

第1章 総則

(目的)

第1条 一般社団法人日本地質学会定款（以下定款という）第7条に基づいて本規則を定める。

2 一般社団法人日本地質学会（以下学会という）の機構、運営、業務の分担、職制等の定款施行に必要な事項は、この規則の定めによる。

(規則の変更)

第2条 この規則の変更は、理事会の議決によって行い、総会に報告し承認を求める。

第2章 会員、会員名簿、入会、退会

(会員の種類、権利)

第3条 会員の種類に応じた権利は、各号のとおりとする。

(1) 正会員（学生会員、一般会員およびシニア会員）

①代議員選出のための選挙権および被選挙権を持つ。

②会誌などの配布を受けるとともに、この学会が刊行する図書などの入手について特典を有する。

③学会誌への投稿および支部を含める学会の催す講演会などの事業への参加に特典を有する。

④支部会員として支部の運営に参加することができる。

⑤理事会および総会に陪席することができる。

(2) 賛助会員および名誉会員

①会誌などの配布を受けるとともに、この学会が刊行する図書などの入手について特典を有する。

②学会誌への投稿および支部を含める学会の催す講演会などの事業への参加に特典を有する。

③理事会に陪席することができる。

(3) ジュニア会員

①この学会が刊行する図書などの入手について特典を有する。

②支部を含める学会の催す講演会などの事業への参加に特典を有する。

③学会誌への投稿あるいは学会が催す事業での発表については大会のジュニアセッションに限定するが、執行理事会の承認を受けた場合にはこの限りではない。

(会員名簿)

第4条 学会に以下の項目を記載した会員名簿を備え、学会事務局はその記載事項に異動があった場合にはすみやかに整理し、適切に管理するものとする。

(1) 氏名

(2) 生年月日

(3) 性別ならびに国籍

(4) 学歴

(5) 住所ならびに所属支部

(6) 所属機関

(7) 専門内容

(8) 上記項目についての不開示指定

2 会員名簿の閲覧と配布は、会員へのみ行うものとする。別途目的を記して閲覧等を非会員が希望する場合には、その可否を理事会が決定する。

(入会・退会)

第5条 学会に入会を希望する個人、法人または団体は、会員の種別および以下の事項を記載した入会申込書を提出しなければならない。

(1) 個人の場合は、氏名および生年月日、職業および所属機関

(2) 法人および団体の場合は、その名称と代表者名、業種

(3) 賛助会員としての入会を希望する場合は会費の口数

(4) 住所または所在地

(5) その他必要とする事項

2 執行理事会は、入会申込書記述内容に誤謬がある場合、会費滞納により除籍となった者で滞納会費の納入を拒否する場合、学会の倫理綱領に著しく反する者である事が社会的に明白である場合を除き、入会を決定し、すみやかに申し込み者にその結果を通知する。

3 入会を承認された者は、別に定める当該年度の会費を納入することにより会員の資格を得る。

4 学会は会費納入を確認次第、申込者を会員名簿に登録し、所属支部および所属専門部に通知する。

5 再入会を希望する者は、改めて所定の入会申込書を提出しなければならない。なお、過去に未納会費がある場合はこれを納めたうえで申し込むものとする。

6 退会は、書面にて退会届（書式任意、電磁的方法、郵送いづれも可）を提出する。未納会費がある場合には、これを支払わなければならない。

(会員の異動および資格の変更)

第6条 会員は、会員名簿記載事項について異動があったときは、すみやかにその旨を学会に届出なければならない。

2 学会は、会員が学部学生、院生およびそれに準じる資格を失った場合には、その翌年度会費から新たな資格に相当する会費を請求する。

3 賛助会員は、その代表者に変更があった場合、すみやかにその旨を学会に届出なければならない。

4 学会は、これら会員の身分等の変更の届出があったときならびに退会届を受理した場合は、会員名簿を整理し、所属支部にもその旨を通知する。

(会費)

第7条 学会は会費の年額（4月1日～翌年3月末日）を次のように定め、会員は当該年度の初日までにこれを支払うこととする。入会の際には当該年度の年額を支払うこととする。

(1) 正会員のうち学生会員：5,000円

ただし、会費を2年分あるいは3年分を一括納入する場合は、それぞれ8,000円（年額換算4,000円）および9,000円（年額換算3,000円）とする。2年分あるいは3年分の会費の一括納入は学生会員の間は継続して行うことができる。当該一括納入期間中に一般会員への変更がある場合は速やかに学会事務局に届けるものとし、一般会員会費との差額は徴収しない。

(2) 正会員のうち一般会員およびシニア会員：12,000円

ただし、会費未納がなく在会40年あるいは50年に達した場合は、翌年度からの会費をそれぞれ11,000円および10,000円とする

(3) 賛助会員：1口25,000円、2口以上

ただし、諸般の事情により理事会が認める場合は、1口とすることができる。

(4) 名誉会員：会費を納入しない。

(5) ジュニア会員：会費を納入しない。

2 会費の変更は、理事会の議決により、総会の承認を得なければならない。

3 会員は、上記に定める会費を一括納入しなければならない。ただし、災害緊急事態が布告された地域に居住もしくは勤務する場合や新型コロナウイルス等対策特別措置法が適用され生活の困窮が明らかな場合などの、やむを得ぬ理由により理事会が認める場合は、会費を分納もしくは減免することができる。

4 会費を滞納した会員については次の処置をとる。

(1) 滞納期間が6ヶ月以上となった場合には、ニュース誌等の会誌の送付を停止する。

(2) 滞納会費が納入された場合には、送付を停止したニュース誌等の会誌の送付を再開する。ただし、会誌の在庫の関係で送

付ができないことがある。

(3) 当該年度までの会費納入がない場合には、地質学雑誌等の会誌への投稿、講演会での講演、学会が行う顕彰受賞、学会行事への会員料金での参加は認められない。

(4) 会費支払いの督促を受けつつ、正当な理由なく、かつ、退会届を提出せぬままに会費を滞納した会員は、滞納3年度目をもって、理事会の議決により会員の資格を喪失させ除籍とする。

第3章 会計

(財政会計の総括責任者)

第8条 会長は、この学会の財政会計に関する総括責任者となる。

(事業計画・報告および予算案・決算)

第9条 理事会規則により担当を定められた執行理事は、翌事業年度の事業計画ならびに予算案を作成する。会長はこれを理事会に諮り、総会に提出しなければならない。

2 理事会規則により担当を定められた執行理事は、毎事業年度終了後、事業報告書ならびに決算報告書等を作成する。会長はこれらについて監事の監査を受けた後、理事会に諮り、総会に提出しなければならない。

第4章 支部

(支部の区分)

第10条 この学会は、定款第2条に基づき以下の支部を置く。

- (1) 北海道支部：北海道
- (2) 東北支部：青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島
- (3) 関東支部：茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
- (4) 中部支部：新潟、長野、山梨、静岡、富山、石川、岐阜、愛知、福井
- (5) 近畿支部：滋賀、奈良、京都、三重、大阪、和歌山、兵庫
- (6) 四国支部：徳島、香川、高知、愛媛
- (7) 西日本支部：岡山、広島、鳥取、島根、山口、福岡、熊本、長崎、佐賀、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

2 会員は、原則として登録した住所を管轄区域とする支部の会員となる。

3 理事会が必要と認めた場合には支部の下に地方部会をおくことができる。

4 会長は、理事会および総会の議決を経て、第1項の区分の変更を行うことができる。

(支部の運営)

第11条 支部には支部長をおき、別途定める支部規則により運営される。

2 支部長は支部長連絡会議に出席し、理事会ならびに各支部との調整等を行う。

3 支部は支部規則、所在地、役員名、ならびに支部活動および会計の状況を適宜理事会に報告し、承認を得なければならない。

4 支部は、支部の表彰規則を定め、当該支部区の会員・非会員の個人および団体を表彰することができる。表彰に際しては、学会本部の表彰と重複しないよう考慮する。

第5章 学会誌その他の刊行物

(刊行物の種類)

第12条 学会は以下の刊行物を出版する。

- (1) 地質学雑誌
- (2) 地質学会News
- (3) 巡検案内書 (CD-ROM版および印刷版)
- (4) 年会、学会主催講演会等の講演予稿集
- (5) Island Arc
- (6) その他の出版・刊行物

2 地質学雑誌、地質学会Newsは希望する会員に配布すると

共に、内外の関連諸機関や一般等に対し寄贈および有償配布する。

3 学会の刊行物等の一部は、電磁的方法によって随時無償公開を行うこととする。

4 1項3号の印刷版、6号の出版・刊行においては、理事会の議決を得なければならない。

5 学会の刊行物の寄贈先は、理事会で定める。

(学会誌その他の刊行物の編集)

第13条 本学会の刊行物の発行にあたっては、理事会規則で定められる以下の体制で行う。

(1) 地質学雑誌：地質学雑誌投稿編集出版規則に従って、地質学雑誌編集委員会が編集する。

(2) 地質学会News：ニュース誌編集規則に従って、広報委員会が編集する。

(3) 巡検案内書：地質学雑誌投稿編集出版規則に従って、地質学雑誌編集委員会が編集する。

(4) 年会講演等の予稿集：行事委員会が企画立案し、理事会の承認を得て、編集・発行する。

(5) その他の出版物：企画出版委員会が企画立案し、理事会の承認を得て、編集・発行する。

2 Island Arcは、関連学会の協力のもとでIsland Arc編集委員会が編集を行う。

3 支部が刊行する出版物については、各支部規則によりこれを行う。

第6章 学術大会ならびにその他社会貢献事業

(学術大会)

第14条 会員の地質学ならびに関連する科学の研究成果の公表、普及、推進のために学術大会（以下年会という。）を年1回開催する。

2 行事委員会と支部長連絡会議の協議のもとで、年会の開催地は原則として各支部が順次担当する。

3 年会の日程、開催場所ならびに年会実行委員会等については、行事委員会と担当支部が協議し、理事会の承認を得て決定する。

4 年会の行事内容については、行事委員会、年会実行委員会、専門部会、各委員会等の協議により決定し、理事会の承認を得る。

(社会貢献事業)

第15条 地質学ならびに関連する科学の普及と教育および啓発のために、本学会は講演会、シンポジウム、セミナー、展示会、巡検等のアウトリーチ・教育事業を随時開催することができる。

2 第1項に関する事業については、行事委員会あるいは所轄する各種専門部会・委員会が企画し、理事会の議決により実施する。

3 支部が主催する第1項に関する事業については、各支部規則による。

第7章 表彰

(表彰)

第16条 本学会は地質学に関する優秀な研究業績を修めた者、ならびに地質学の発展・普及による社会貢献の著しい者を顕彰するとともに、地質学会において長年にわたって活躍してきた会員に永年会員顕彰を授与する。

2 表彰の名称および内容は次のとおりである。なお、地質学雑誌及びIsland Arc等に掲載された学術的・独創性のあるすべての著作を論文と呼ぶ。

(1) 日本地質学会賞：日本および世界の地質学の発展に大きく寄与する重要な学術的貢献（国内外の学術誌での論文執筆や学会講演・セッション企画などにおいて、本学会の会員の手本となるような功績）を長期にわたって行い、かつ本学会に顕著な

貢献のあった会員

(2) 日本地質学会功績賞：影響力の大きい教科書の執筆，研究動向を決める新しい研究手法の開発，教育・普及，あるいは本学会運営などを長期にわたって行ない，本学会ならびに日本の地質学の発展に顕著な功績のあった会員

(3) 日本地質学会都城秋穂賞：地質学に関する画期的な貢献があり，加えて日本列島周辺域の研究や日本の地質研究者との共同研究などを通じた日本の地質学の発展に関する顕著な功績があった会員および非会員

(4) Island Arc Award：Island Arc誌に発表され，世界の地質学の発展に貢献した優れた論文の著者，会員・非会員は問わない。

(5) 日本地質学会H. E. ナウマン賞：地質学に関して優れた業績を上げた満50歳未満の会員

(6) 日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞：地質学に関して優れた業績を上げた，博士号取得から5年以内の会員

(7) 日本地質学会論文賞：「地質学雑誌」あるいは「Island Arc」に優れた論文を発表した会員

(8) 日本地質学会小藤文次郎賞：重要な発見または独創的な発想を含む論文を発表した会員

(9) 日本地質学会地質学雑誌特別賞：「地質学雑誌」で重要な地質記載または有用性の高い新規の研究手法等を発表した会員

(10) 日本地質学会研究奨励賞：「地質学雑誌」あるいは「Island Arc」に優れた論文を発表した満32才未満の会員

(11) 日本地質学会フィールドワーク賞：フィールドワークに重点を置いた優れた論文を発表した満32才未満の会員

(12) 日本地質学会優秀ポスター賞：学会が主催する講演会等において優秀なポスター発表を行った会員

(13) 日本地質学会ジュニアセッション優秀賞・奨励賞：日本地質学会ジュニアセッションにおいて優秀な発表を行った高校生以下の生徒またはグループ

(14) 日本地質学会表彰：地質学の教育活動，普及・出版活動，新発見および露头保全，あるいは新しい機器やシステム等の開発等を通して地質学界に貢献のあった会員および非会員の個人，団体および法人

(15) 永年会員顕彰：学会の記録に基づき，顕彰の前年度終日に在会40年（通算可）に達し、当該年度までの会費を納入し，かつ当該年度の初日に在籍する正会員，以降，在会が10年継続（通算可）する毎に同様の条件の正会員を顕彰する。

3 前項の（1）～（11）および（14）の表彰は，別途定める規則に従い，各賞選考委員会が受賞候補者の選考を行い，理事会が候補者を決定し，総会の承認を経て行う。前項の（12），（13）の表彰は別途定める規則に従い，各賞選考委員会が候補者を選考・決定し，会長の承認を経て行う。

第8章 関連学協会等

（関連学協会等との協力）

第17条 学会は，日本学術会議，公益社団法人日本地球惑星科学連合，その他国内外の関連学協会等と協力し，相互に便宜を供与することができる。

（会員等の推薦）

第18条 学会は，日本学術会議，公益社団法人日本地球惑星科学連合，その他国内外の関連学協会等から依頼があった場合には，会員ならびに委員を推薦することができる。学会の推薦する会員，委員に対して，学会はその活動を支援する。

附則 任意団体日本地質学会の解散までの期間においては，任意団体日本地質学会の会員の身分をもつ者に対して，一般社団法人日本地質学会の会費は請求しないこととする。

附則・本規則は2009年4月11日より施行する。

・2011年4月2日一部改正

・2011年12月3日一部改正

・2012年4月7日一部改正

・2013年4月6日一部改正

・2013年5月18日一部改正

・2013年9月13日一部改正

・2014年9月12日一部改正

・2015年4月4日一部改正

・2020年12月5日一部改正

・この改正は，2021年7月1日から施行する。ただし，第16条2（6）に定める日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞，および同（10）に定める日本地質学会研究奨励賞に関する規定は，2022年7月1日から施行する。施行前の運営は，なお従前の例による。

・2021年4月3日一部改正

・2022年6月11日一部変更

地質学露頭紹介

日本地質学会2021年オンライン学術大会で好評を博した「地質学露頭紹介」の第2弾！ とっておきの露頭、解釈がむずかしい露頭、専門家から意見をもらいたい露頭など、さまざまな露頭の写真を持ち寄り、その学術的意味についてZoomで解説したり意見交換したりするスペシャルイベントを開催しました（2022年5月29日開催）。

国内最長到達の阿蘇4火砕流堆積物 辻 智大（山口大学大学院創成科学研究科）

阿蘇4火砕流は阿蘇カルデラの約9万年前のカルデラ噴火によって放出された火砕流で、160 km以上離れて山口県に到達したことが知られている。今回、山口県山口市徳地での県の道路改良工事現場にて、阿蘇4火砕流堆積物（以下、Aso-4と呼ぶ）の最遠端の露頭を発見した。本露頭には、Aso-4の他、始良Tnテフラ（約3万年前）および鬼界アカホヤテフラ（7,300年前）も挟まっており、本州では極めて希な例である。Aso-4は段丘礫層中に挟まるように見えるが、Aso-4の上下はシルト層である。Aso-4は橙色層と優黒色層の互層からなる層厚20~50 cmの地層で、非常に明瞭な堆積構造が認められる。Aso-4の下部には斜交葉理（アンチデューン？）、中部には平行葉理が発達する、サージ様の堆積物である。複数の侵食基底を有すること

から、強い流れによって侵食と堆積を繰り返したものと考えられる。本露頭は、従来山口県内での東端とされていた山口市仁保から20 kmも離れている。さらに、本地点は阿蘇カルデラ中心から170 km離れており、国内の活火山において最も遠くまで到達した火砕流堆積物と言える。これは、Aso-4が極めて高い流動性を持っていたことを示すものであり、火砕流がどのようにして遠方まで到達するのかを考える上で非常に重要である。また、阿蘇カルデラ起源の火砕流が山口県に到達したことは、山口県内でもあまり知られていないとは言えず、広く知ってもらえるきっかけとなればと思い、ここに紹介させて頂いた次第である。



写真1 山口市徳地の阿蘇4火砕流堆積物露頭全景。

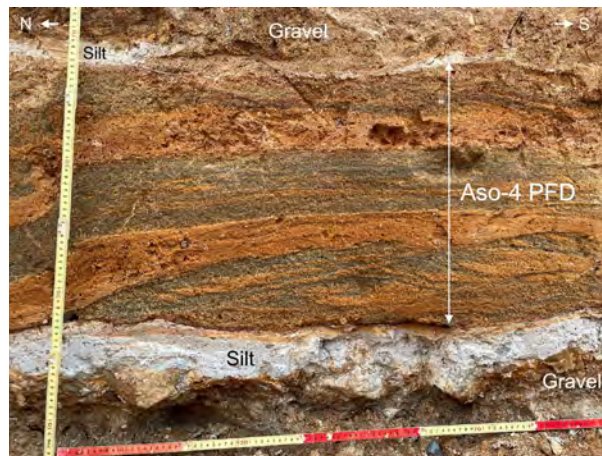


写真2 阿蘇4火砕流堆積物の近景。

広島市安佐北区の80 cm厚始良Tnテフラ 早坂康隆（広島大学）

表題の露頭は、2018年7月豪雨の際に三篠川左岸（N34.535021°，E132.660224°）が崩落して出現した。中位層準の淡黄桃灰色の層が綺麗な層として幾人かの目を惹いていたようである。筆者は、現安佐北区の区長である萬ヶ原氏の案内で2021年5月にここを訪れ、この綺麗な層は西日本最大規模の広域テフラであると確信した。とりあえず試料を採取して火山ガラスや鉱物をEPMAで分析し、これが始良Tnテフラ（AT）であることを突き止めた。その後、研究協力者を得て4回の合同調査を行い、以下に示す成果を2022年3月5日に開催された西日本支部例会で発表した。このATの層厚は最大80 cmであるが、再堆積の結果であり、元の厚さは45 cm程度であろう。ATの基底部には大隅降下軽石に対比される2~3 cm厚の白色層が続いている。それが途切れている所では下位の砂礫が流動化してATを貫き、その上に噴出した構造が見える。AT堆積後まもなく大地震が起こったのかもしれない。AT中には2層準に直径5 mm前後の火山豆石の濃集部が存在する。ATの直下とその下位2層準の合計3層準に泥炭層があり、その花粉分析から寒冷な湿地帯を示す古環境が復元された。調査の度に新しい発見と驚きがあったが、昨年また豪雨によって露頭の一部が崩落し、やがて消失してしまう懸念が強まった。そこで、多くの人にこの貴重な露頭を目撃し、記憶と記録にとどめてほしいと、安佐北区役所地域起こし推進課と地元の三田郷土史研究会の共催、日本地質学会西日本支部と広島大学総合博物館の後

援ということで、現地観察会を企画した。まず2022年4月10日に地元の市民を対象に50名の参加を得て開催し、これには広島市の松井市長ご夫妻も参加された。次に同年5月1日に、地質の日関連行事として、対象を一般に拡大した80名の参加で開催した（写真）。この場をお借りして関係者の皆様に御礼申し上げる。（文献）早坂ほか、2022、地質学会西日本支部第172回例会公演要旨、O-2

<http://www.geosociety.jp/uploads/fckeditor/outline/shibu/nishinohon/program20220305.pdf>



左側の露頭の中位層準に見える水平な淡黄桃灰色層が始良Tnテフラ

市原市南部古敷谷川Byk～Ku2B連続露頭と西川右岸露頭 木村英人（興亜開発株式会社関東支店地盤技術部）

千葉県市原市南部の養老川右岸田淵露頭が2020年1月に国際地質科学連合国際層序委員会（IUGS-ICS）で検討され、チバニアン（Chibanian）の国際標準模式層断面及び地点（Global Boundary Stratotype Section and Point：GSSP）に決定した。ここに認められるByk-zone（5枚の火山灰束）中にプリュヌヌ正磁極期と松山逆磁極期の境界（以下、B/M境界）を下部-中



A Byk-zone location on the right side of the Koshikiya River, Chiba Prefecture.

部更新統境界として設定されたものであるが（Byk-Eを指標テフラとする）、このB/M境界は上総層群国本層中に存在することは多くの研究から報告されている。

しかし、市原市教育委員会が2018（平成30）年1月末に、千葉県経由で文部科学大臣あてに「養老川流域田淵の地磁気逆転地層」の天然記念物指定に関する意見具申書を提出し、これを受けて文化審議会文化財分科会の審議・議決を経たのち、「養老川流域田淵の地磁気逆転地層」が国天然記念物に指定された。

これによって、当該露頭はビジターセンターが設置されるなど広く一般に知られるようになった反面、申請許可が下りないと露頭のサンプリング等ができない弊害が発生している。

ところが、筆者ら（故人：楡井 久を含む）は1992年の筆者の卒業研究において、Byk-zoneの面的広がりおよび側方への層相変化を追跡し、養老川の支流の1つである古敷谷川に状態の良い未踏査の露頭（35° 18' 22.98" N, 140° 07' 51.57" E）を発見した。現在に至るまでの調査で、B/M境界の指標テフラとされてきたKu2火山灰までの上位方向への連続露頭であることが判明した。ビジターセンターでは把握しておらず、田淵露頭程の詳細研究およびサンプリング等の制約がなされていない場所であるため、更なる研究を期待して紹介するものの、アプローチ難易度が高い場所であるため、案内人無しではたどり着くのが難しい難点がある。

愛知県知多半島の礫ヶ浦礫岩（中新統） 星 博幸（愛知教育大学）

愛知県知多半島に分布する下部中新統師崎層群（約18–17 Ma）は砂岩・泥岩を主体とする海成層だが、その中に礫ヶ浦礫岩（または礫浦礫岩）と呼ばれる角礫岩層が挟在する。この角礫岩層の層準は深海生物化石群（東海化石師崎層群刊行会編、1993）を産する山海層にあり、水深数百メートル以深で堆積したと考えられる砂岩・泥岩主体層の中に挟在するという特異性から、多くの地質研究者の注目を集めてきた。

礫ヶ浦礫岩の産状と岩相は近藤・木村（1987）、Shiki and Yamazaki（1996）などによって記載されている。淘汰不良な角礫・亜角礫を主体とし、最大礫は直径3 mに達する。多くの部分において礫支持だが、砂岩と泥岩の基質中に礫が散在する部分もある。礫種は主に片麻岩で、わずかに花崗岩類の礫や堆積岩偽礫も含まれる。これらの片麻岩や花崗岩類は知多半島地下の領家帯基盤岩に類似していることがボーリング試料の岩石学的検討からわかっている（足立・久保田、2007）。

礫ヶ浦礫岩の成因について、Shiki and Yamazaki（1996）は近傍に存在した断層崖が地震で崩壊し海底土石流が発生（角礫形成）、その後地震によって発生した津波の引き波によって角礫を含む海底堆積物が再運搬・再堆積したというシナリオを考えている。Miyakawa et al.（2020）による最近のモデリングによると、師崎層群は知多半島南西岸沿いの内海断層の正断層運動によって生じた半地溝を埋積した地質体である可能性が高い。したがって、礫ヶ浦礫岩は師崎層群堆積時に成長断層（growth fault）だった内海断層の運動に関連してできた地層と

推定される。

（文献）足立・久保田、2007、地質学会第114年大会演旨、P-37；近藤・木村、1987、師崎地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）、地質調査所、93p；Miyakawa, A. et al. 2020, Prog. Earth Planet. Sci., 7, 63, doi: 10.1186/s40645-020-00376-6；Shiki, T. and Yamazaki, T., 1996, Sediment. Geol., 104, 175–188；東海化石師崎層群刊行会編、1993、師崎層群の化石：愛知県の化石第2集、東海化石研究会、297p.



愛知県南知多町内海小栢の海岸に露出する礫ヶ浦礫岩。

閉じた褶曲と褶曲の重複 竹下 徹 (北海道大学)

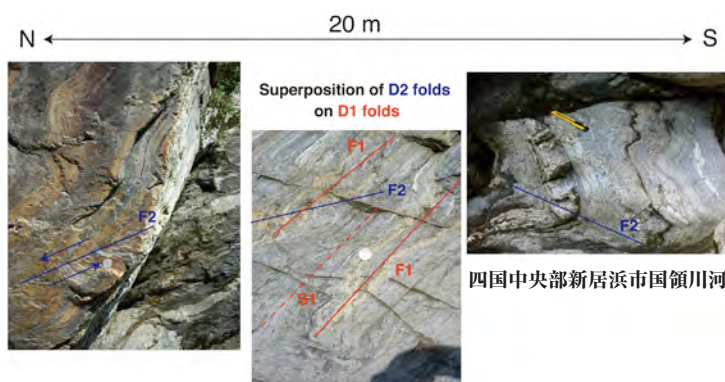
今回の地質学露頭紹介では「閉じた褶曲と褶曲の重複」と題して、変形の履歴を地質構造から読み解くことの出来る露頭の例を紹介した。一つは、北海道旭川市石狩川神居古潭峡谷に露出する神居古潭変成岩の露頭である。本露頭では玄武岩質凝灰岩-石灰岩-チャート・ミナイトからなる海洋プレート層序が翼間角30°程度の閉じた褶曲を形成し、数10 m幅の河床に広く露出する。重要なことは、この褶曲は典型的な非対称褶曲で、東フェルゲンツ（軸面は高角で西傾斜）の形態を示し、西から東への逆断層剪断により形成されと推察されることである。また、片理面のパイダイアグラム（例えば、<https://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/oyo/stereograph.pdf>）の解析により神居古潭峡谷ではこの閉じた褶曲形成の後、高角な褶曲軸を持つ褶曲形成が重複していることを述べた。本露頭についての詳しい説明は竹下ほか（2018, 地質雑）を参照されたい。

明は竹下ほか（2018, 地質雑）を参照されたい。

次に、四国中央部新居浜市国領川河床に露出する、三波川変成岩のD1, D2フェーズに形成された褶曲を紹介した（写真）。本露頭では北落ちの正断層センスの剪断で形成されたと考えられる、北フェルゲンツのD2非対称褶曲（F2）が良く発達している。D2褶曲はしばしばD2正断層（El-Fakharani and Takeshita, 2008）に伴う。一方、本露頭には折りたたまれたD1褶曲（F1）も存在し、周囲の主要な片理（S1）はF1の軸面片理として発達している。重要な事実、F1の翼に発達する引きずり褶曲がD2褶曲に曲げられており（写真）、褶曲が重複したことが明瞭なことである。

最後に、座屈褶曲の場合は、褶曲の発達に伴い軸面片理（劈開）が発達することを述べた。特に、地層が細互層系の場合はクレニユレーション劈開が良く発達する。劈開に挟まれた板状部はマイクロリゾンと呼ばれるが、実際の例を筆者の論文（Takeshita and Hara, 1998）やウィーン大学のGrasemann教授の岩石コレクションの写真を用いて紹介した。

（文献）El-Fakharani, A. -H. and Takeshita, T., 2008, J. Asian Earth Sci., 33, 303-322; Takeshita, T. and Hara, I., 1998, J. Struct. Geol., 20, 417-431; 竹下 徹ほか, 2018, 地質雑, 124, 491-515.



四国中央部新居浜市国領川河床に露出するD1褶曲（F1）とD2褶曲（F2）。

飛水峡のチャート・甌穴群と珪質頁岩 木戸 聡 (福井県立敦賀高等学校)

岐阜県加茂郡七宗町付近の飛騨川沿いに約12 kmの峡谷が続く、「飛水峡」と呼ばれている。この付近にはチャート、珪質頁岩、砂岩頁岩互層の露頭が連続している。比較的大きなチャートに甌穴ができてることが多く、直径1 mを超えるような甌穴が付近に500以上ある。1961年に「飛水峡の甌穴群」として国の天然記念物に指定された。

JR上麻生駅東方の上麻生橋付近には、珪質頁岩チャート互層（三疊紀前期、層厚約30 m）、層状チャート（三疊紀中期～ジュラ紀前期、層厚80～90 m）、珪質凝灰質頁岩（ジュラ紀中期、層厚約30 m）、頁岩がち砂岩頁岩互層（ジュラ紀中期以降、層厚約30 m）、砂岩がち砂岩頁岩互層（ジュラ紀中期以降、層厚100 m以上）という層序が見られる。かつては500 m以上の層

厚のチャートと考えられていたが、上記のような層序のシートが層理に平行な断層で5回くり返しているものであることが明らかになった。

層状チャートには層内褶曲がしばしば見られる。このような小褶曲は堆積後未固結時にスランプでできたか、全体が褶曲するときに引きずられてできたか意見が分かれていた。小褶曲の褶曲軸の方向を復元して、層理面に調和的でスランプによるものという見解と、復元によっては全体の褶曲軸に調和的で引きずりによるものという見解に分かれている。

（文献）木戸 聡, 1982, 岐阜県七宗町上麻生における三疊紀チャートとジュラ紀珪質頁岩の産状について, 大阪微化石研究会特別号, no. 5, 135-151.



写真1 (左) 上麻生橋より下流側の層状チャート・珪質凝灰質頁岩・砂岩頁岩互層
写真2 (右) 飛水峡右岸層状チャートの層内褶曲

地質学雑誌

地質学雑誌は、2022年（128巻）からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

フォト

Very thickly bedded event deposit in the lower to middle Miocene Shirahama Formation, southwest Japan

Satoru Imai, Masakazu Nara

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0011>

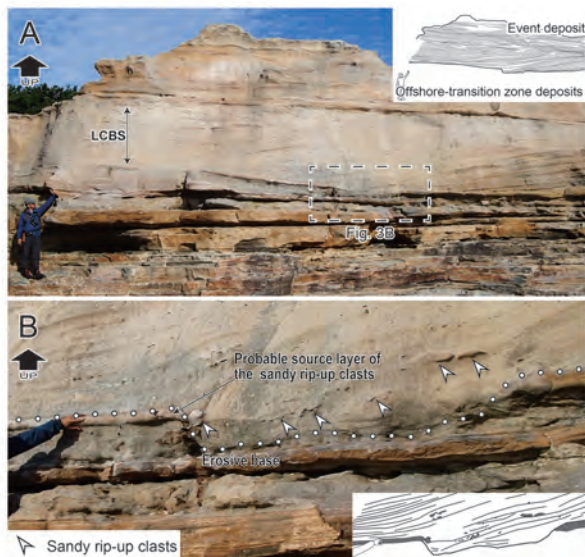


Fig. 3. Field photographs of the event deposit. Insets show sketches of the sedimentary structures. A: The event bed, of which the lower part shows large-scale, low-angle cross-stratification (LCBS), overlies probable offshore-transition deposits across an erosional contact. B: Close-up view of the basal part of the event deposit. Note the erosive base and sandy rip-up clasts derived from the underlying slightly muddy sand layer. Judging from southeastward the direction of transport of the rip-up clasts, the LCBS is interpreted to have been formed by migrating large-scale antidunes, probably driven by a tsunami backwash.

論説

長野県中部に分布する守屋層火山岩類（中新統）のジルコンU-Pb年代とその層序学的意義

星 博幸, 岩野英樹, 檀原 徹

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0012>

守屋層は北部フォッサマグナ南縁部の中新世古環境や伊豆弧衝突に関連した地殻運動を記録していると推定されるが、その上部を構成する変質火山岩類の年代がよくわかっていなかった。今回、守屋層最上部の唐沢川酸性火山岩部層から 15.5 ± 0.2 (2 σ) MaのジルコンU-Pb年代を得た。この結果より、本部層の火山岩類の形成は15.5 Ma頃



だったと考えられる。守屋山地域の火山活動はN8帯の下限年代である17.0 Ma以降に始まり15.5 Ma頃まで継続したと考えられ、15.5 Ma以降も火山活動が継続していた可能性はある。守屋層は下部の碎屑岩部分が北部フォッサマグナの内村層に対比されているが、上部の火山岩類も含む守屋層全体が内村層に対比可能と考えられる。この火山岩類の活動は設楽火山岩類の主要活動（約15-13 Ma）に先立って起こったが、設楽火山岩類の一部である津具火山岩類の活動とは同時期だった可能性がある。

総説

現行堆積作用・堆積物研究の地質学への展開：気象・地質イベントに関係した堆積作用と堆積物

池原 研

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0013>

現行堆積作用・堆積物の研究は過去数十年で大きく進歩した。最近の一つの進展は気象・地質イベントに関連して形成された堆積物とその堆積過程の研究である。気象イベントに関連したイベント堆積物の理解は国際的な物質循環と地層形成の研究プロジェクトにより大きく進展した。一方、地質イベントに関しては2004年スマトラ沖地震・津波や2011年東北沖地震・津波後の調査研究がイベント堆積物とその堆積過程の研究に大きな進展をもたらした。今後の現行堆積作用・堆積物の研究の進展のためには、堆積物の地質学的な研究と現場観測、実験、シミュレーションの統合が重要である。



論説

大島造山末期（前期白亜紀中頃）の北上地域は伸張応力場だったのか？

山路 敦, 本間健一郎, 越谷 信

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0014>

北部北上地域でAptian期の火成活動に伴ってできたとされる、鉍脈群について応力解析を行った。データ取得範囲はジュラ紀付加体中にあるものの、上部白亜系久慈層群の基底の近傍にあり、また同層群が緩傾斜なので、この鉍脈群の形成後の傾動は無視できる。解析結果と既存の地質情報から、NNW-SSE次いでNW-SE方向の引っ張り応力が、Aptian期のうちに働いていたことが判明した。



☆関東支部

お知らせ

学生・初級者向け「地質断面図」の書き方講座
—布良海岸巡検— 実施報告

3年前まで行われていた清澄フィールドキャンプが新型コロナウイルスの影響で本年も実施できないため、その代替行事として実施された。期日は6月4日と6月5日。場所は、4日が南房総市から館山市にかけての根本海岸～布良海岸、5日は船橋の貸し会議室。実習内容は昨年と同じ「走向・傾斜の測定から地質断面図を作成する」で、参加者は9名（学生4+社会人2+幹事3）だった。

以下概要を報告する。

【4日】場所：南房総市根本海岸～館山市布良海岸、

10時30分 J R 館山駅に集合し現地へ移動、主催者側で用意した現地の詳細な地図を参加者に渡して実習開始。地図上には見学ポイントとして①～⑨の番号が振ってあり、番号の地点を探して歩きながら走向傾斜の測定・地層の観察をし、記録していく。今年は昨年とは逆コースで、北側の⑨地点から始め南側の①地点まで順に調査した。

現在地を地図上で確認したのち露頭全体を俯瞰、その後露頭に近づき、層理・断層・火山灰層・スランプ層等を確認し、海岸に出て初めてクリノメーターを使い走向・傾斜を測る。測定の仕方は事前学習で一応触れているが、測定に苦労している学生が多かった。測定結果を皆で比べ合いながら次第に測定にも慣れ、地点を進めていく。この地域は短い周期で背斜・向斜が繰り返す褶曲構造になっており、調査地域全体約1kmの間に褶曲軸が5本もあることがわかる。計測とともに地層や堆積構造の観察も行い、級化成層・生物擾乱・ペインストラクチャーなどの現象と成因を、参加者に発問・確認しながら研鑽した。昼食を挟み予定のコースの測定を終了し、その後南房総市白浜町の“大規模海底地すべり”露頭を見学し、1日目の巡検を終了した。

【5日】場所：船橋の貸し会議室、

9時40分 J R 船橋駅に集合し現地へ移動。まず幹事3人それぞれから、昨日の野外実習に関する復習や補足がパワーポイントを使って行われた。その後、昨日と同じ地図を配付して作業開始。地図には海岸線にはほぼ平行に1本の直線が引いてあり、ここに断面を描くのである。海岸線が地層の走向にほぼ垂直なの

で、走向の延長を直線まで伸ばして1本の直線上に走向・傾斜のデータを載せていく。幹事も、作業者の机の間をまわりながら質問に答える。6人とも最初は苦労していたが、何とか断面図ができあがり、作業終了。日本地質学会の入会案内を配布し、12時半頃解散した。

一度実施しているのだから昨年よりは準備に時間を要しなかったが、緊急時の対応など準備は大変であった。参加者は皆一応、断面図の作成方法のポイントを理解できたようである。特に社会人の方は教員であり、今後の授業に還元できると喜んでいて、全日程無事に事故なく終了した。

（日本地質学会関東支部幹事 米澤正弘）

【参加者からの感想①】

今回の調査を通じて感じたことは、当たり前ではありますが地球、自然の変化の大きさ、そして地質学的重要性や面白さです。受講前の私を含め世の中の多くの方は、海や海岸に遊びに行く機会があったとしても海のほうに気を取られ、浜辺に存在する堆積物を“ただの岩”としか考えていないと思います。しかし、この講義で堆積物の形成過程や堆積物の測定、観察を通じて過去にどのようなイベントが起きたのかななどを教えて頂いた後は、“ただの岩”から価値ある堆積物へと見方が変化しました。これらの堆積物は、元々海の中に存在していたものであり、何百万年、何千万年という間の中で様々なイベントを経て、地上に現れています。つまり、人間が存在する遥か昔の地球の一部に触れられる貴重なものであるということです。表面的ではありましたが、その過去の変動やイベントを私自身が触れ、明らかにする体験ができたことに非常に感銘致しました。また地質学は私たちの生活に非常に密接していることも学びました。地質学は、今後起きうるとされている巨大地震、例えば南海トラフ地震や首都直下地震といった地震の予測に地質学は非常に重要な学問であり、地震が多い日本では、さらにその重要性は高いと思いました。以上より、今回の講座を通じて地質学は非常に重要であることを学び、また日常の景色でも、ただ見るだけではなく、どのような変動を経てきたのかななどを気にして過ごすようにしてゆきたいと感じました。

そして、今回この講義を受講したきっかけは卒業研究を指導して下さる先生の勧めからでした。私自身、地図を見ることが苦手であり、かつ高校では地学を履修していなく、また大学でも地質に特化した授業を履修していなかった為、調査前に出された課題にも理解することに非常に苦労しました。その為、野外調査する前は私がついていけるか、また楽しめるか非常に不安でした。しかしながら、ご指導して下さった先生方や一緒に受講した方々に優しく、丁寧に教えていただいたおかげで非常に楽しく、価値の高い時間を過ごすことが出来、地質学が面白



館山市 布良海岸の露頭前での説明



南房総市 旧フラワーパークでの集合写真

いと感じるきっかけになりました。また機会があれば参加させていただきたいと思いました。

(東邦大学理学部化学科4年 山崎友莉)

【参加者からの感想②】

私はもともと地質学に興味がありましたが、実際に野外で地質を観察するという経験はあまりありませんでした。そこで、本巡検で野外調査の方法や露頭の見方、さらには露頭での測定結果を地質断面図として表現する方法を学びたいと思い参加しました。

1日目の布良海岸での野外研修では、走向傾斜の測定方法やその記載方法などの基礎的な事項から、地層に見られる堆積構造や生痕化石の見方まで幅広く学ぶことができました。また、海岸に沿って歩く中で、背斜と向斜の繰り返しをはっきりと確認することができました。この野外研修を通じて、地層に刻まれた情報からその堆積環境や堆積後のイベントを解き明かす作

業の一端に触れることができ、楽しく刺激的でした。

2日目の屋内研修では、改めて地層の状態の記載方法や基本的な堆積構造について確認したのち、布良海岸の地層に見られるいくつかの褶曲はプレートの沈み込みに伴って陸源堆積物が圧縮され変形した結果だということを学びました。それを踏まえて、前日に自ら測定した走向傾斜のデータから地質断面図を作成しました。地下の構造がどうなっているのかをデータに基づいて想像するのに慣れず苦労しましたが、それを通じて褶曲を中心とした地質構造についての理解が深まったと感じています。

この巡検を通して、一見単調に思われる地層にも過去の変動を解き明かすヒントが多く隠されていることがわかり、ますます興味が湧きました。また、野外調査を行うには多くの知識と経験が必要であることもわかりました。これをきっかけとして、今後も野外での観察を重視して学んでいきたいと思います。

(大学2年 星 輝)

委員会だより

★法地質学研究委員会

日本地球惑星科学連合2022年大会における 法地質学セッションについて

2022年4月9日の理事会において法地質学研究委員会の設立が認められ、活動を開始しました(委員長 川村紀子)。本委員会では我が国における法地質学の普及と発展、また、既存の地質学に関する情報のさらなる利用による社会貢献を目指して尽力していきたいと考えています。

その一環として、日本地球惑星科学連合(JpGU)2022年大会で法地質学の国際セッションを5月25日に開催いたしましたので、ご報告します。

我が国における地質系学会の法地質学に関する国際学術集会としては、2015年の地質学会長野大会に続き、2回目でした。今回はIntroduction to Forensic Geology(法地質学への招待)として口頭4件、ポスター5件の発表がありました。口頭発表のうち2件は招待講演者によるもので、アメリカの連邦捜査局(FBI)のLibby Stern博士とIUGS法地質学イニシアチブ代表のLaurance Donnelly博士からお話を頂きました。Stern博士からは土の検査について鑑定事例を示しつつ解説していただき、Donnelly博士には法地質学の世界的な発展と国際的な鉱物資源取引にまつわる法地質学的な観点からのお話を頂きました。

オンラインのポスターでは地中レーダー、磁性分析、元素分析といった既存の技術の法科学的利用や土試料中に見られる夾雑物についての報告がありました。このセッションでは参加者は少なかったものの、その状況を逆手に取り、ブレイクアウトルームを使わずに参加者が自由に発言をするという形式にしたことで、物理的な距離を越えて活発に議論することができました。

今回の大会は現地とオンラインのハイブリッドで開催されたことから、法地質学という研究者が少ない分野にどのくらい参加者があるか心配されました。口頭発表ではオンラインからの質疑もあり、法地質学について関心を持ってもらったり、さらに知識を得て頂くことができたのではないかと思います。

なお、Donnelly博士はコロナによる入国規制やウクライナにおける戦争など、困難な状況である中、本セッションのために来日して参加して下さいました。Stern博士は残念ながら来日できませんでしたが、オンラインポスターセッションもコアタイムを通して参加され、議論に加わっていただきました。本セッションは日本地質学会の共催行事として開催され、コロナ禍での外国人招聘については当学会からのサポートなくしては実現しえなかったことを合わせて報告いたします。

杉田律子(科学警察研究所)

(参考)法地質学研究委員会設立趣意書は学会HPからご覧いただけます。

http://www.geosociety.jp/uploads/fckeditor/geoFlash_img/no551_hochishitsu_shui.pdf



Introduction to Forensic Geologyセッション参加者。左から2番目がDonnelly博士。2022年5月25日ポスター会場にて。

新青丸による南海トラフ沈み込み
帯前弧域調査航海(KS-22-3)乗船報告

東京大学理学系研究科
地球惑星科学専攻博士課程2年
副島祥吾

私が参加した学術研究船新青丸による航海は、2022年3月23日から3月30日にかけて行われました。この航海は、横須賀の海洋研究開発機構の本部から出港し、熊野沖、室戸沖の南海トラフ海域での調査の後、横須賀へ帰航する全8日間のスケジュールでした。私は、普段は沈み込み帯由来の“硬い”高圧変成岩を対象とした陸上のフィールドでの研究を行っており、今回は体験乗船という形で調査に参加させていただきました。調査航海はこれが初めてであり、深海底の“柔らかい”堆積物の採取や海底地形の物理探査を実際に体験でき、非常に貴重な経験となりました。

今回、私が乗船した新青丸は全長66.0m、幅13.0m、総トン数1635トンの調査研究船で、「東日本大震災復興関連事業」として、また、2013年に退役した「淡青丸」の後継船として、2013年からJAMSTECにて運用されています。船長から伺った話によると、本船はアジマス推進器という水平方向にプロペラの向きを360°回転させられる推進器を2基備えており、これによって非常に細かな操船が可能になっているそうです。また、この推進器を用いた「自動定点保持装置(DPS)」を搭載しており、潮流や風の中でも船を同じ位置に保つことができます。今回の航海でも、深海底の採泥の際、正確なサンプリングポイントを狙う上でDPSが威力を発揮していました。また、気象海象観測機器、音響測深機、重力計、磁力計、魚群探知機など様々な観測機器が常設され、さらに船上での様々な作業を想定した3つの研究室を備えており、まさに海上の研究所といえます。本航海の主な目的は、南海トラフ付加体の先端部における断層活動や歴史津波を引き起こした可能性がある海底地すべりについて調べるための、サブボトムプロファイラーによる海底地形・地質構造の物理探査とピストンコア等による海底堆積物の採泥でした。それらの作業を行うための機材や器具は主に千葉県柏市にある大気海洋研究所から持ち込まれました。

長い前置きとなりましたが、ここから私の乗船体験記を書か



写真1 出港前の新青丸

せていただきます。まず、本航海はコロナ禍中に行われたため、感染対策には細心の注意が払われました。航海自体は2022年3月23日から3月30日の8日間でしたが、その前の5日間、横須賀市内のホテルでの自己隔離期間が設けられました。自己隔離期間中は原則外食や公共交通機関の使用は禁止となっており、あまり日の当たらないホテルの自室に缶詰め状態で論文の原稿を書いたり文献を読んだり、そして毎食コンビニ弁当、という孤独ながらも有意義な時間を過ごしておりました。人との接触をかなり制限された隔離期間でしたが、外出は制限されておらず、よく晴れた午後にホテルから歩いて10分位のところにある三笠公園を訪れ、ファミリーマートで買った鶏五目のおむすびを食べながら、静かな海を眺めてこれからの航海に期待を膨らませていました。静かな海は長くは続きませんでした、...

5日間の隔離期間を経て、3月23日の昼頃、横須賀港を出港。最初の目標海域である熊野沖に到着するのは翌日の午前になる予定であったため、それからしばらくは自由時間。洋上の8日間を過ごすメンバーとは乗船前のPCR検査の際に顔合わせをしており、簡単に挨拶をして、各々持ち込んだ装置を組み立てたり、機材や荷物の整理をしたりしていました。8日間の予定は、1日目：出港、2～3日目：採泥・物理探査@熊野沖、4～7日目：採泥・物理探査@室戸沖、8日目：帰港でした。しかし、折り悪く、航海の中盤頃に予定していた海域に嵐が直撃するという予報が出てしまい、予定変更を余儀なくされました。その



写真2 ピストンコアラー



写真3 水揚げ直後のマルチプルコアラー

結果、2日目に熊野沖の調査、3日目に室戸沖の調査を急ピッチで行い、4日目は和歌山港に退避、5日目からゆっくりと横須賀港に向けて帰港するという、前半過密、後半のんびりとしたスケジュールの航海となりました。

船上での1日目の多くの時間は割り当てられた居室で過ごしました。居室は4畳半程度の広さに定員2名で、横並びの2つのデスク、二段ベッド、洗面台とクローゼットが備わっていました。正直、最初に見たときは「結構狭いな。」と思ってしまいましたが、必要なものはしっかりと揃っており、狭さも問題に感じず過ごしやすいかったです。また、船上には厨房があり、毎食温かく美味しい食事がたくさん食べられ、さらにシャワーの温度や勢いも丁度よく、とても快適な8日間を過ごすことができました。

先述の通り、船上での作業は、スケジュール変更で実質2日目と3日目に詰め込まれる形になりました。その中の主な作業はピストンコアラーとマルチプルコアラーによる海底堆積物の採取です。ピストンコアラーもマルチプルコアラーも海底の堆積物に筒を突き刺して、堆積物をサンプリングする方法です。ピストンコアラーでは、6メートルの筒に数百kgの重りを付けて、海底から10メートル位の高さから自由落下させるもので、海底下数メートルの層序を保存しながらサンプリングできます。マルチプルコアラーでは、50cm程の8本の筒を海底に刺すことで、海底表層付近の堆積物をサンプリングできます。これらのコアラーを海底に向けて降ろし、着底させ、船上へ引き上げるという作業は、音響測深機やワイヤーの張力計などの情報を頼りに行われ、私はその記録係としてオペレーションを間近で見させていただきました。特に、コアラーの着底と離底は、ワイヤーの張力の変化から分かるため、ワイヤーの張力計はオペレーション室の注目の的となっていました。コアラーが水揚げされて、上手くサンプルが得られていた時は、船上は歓喜に包まれ、とても活気に溢れる瞬間でした。また、透明なアクリ

ルの筒を使用するマルチプルコアラーでは、水揚げしてすぐにサンプルの様子を見ることができ、普段は決して見ることでできない深海底の泥の様子や、場合によってはそこに住むクモヒトデやゴカイ類などの生物も見られ、非常に興味深く、好奇心を掻き立てられました。

嵐が来た4日目以降はしばらく波の高い状態が続き、私は基本的には自室で論文執筆やデータ整理などの作業を行っていました。そして、夜は乗船したメンバーの親睦を深めるパーティー。初めて乗船した私を含む3人の博士課程学生によるセミナー発表の後、よく冷えたビールを飲みながら、たこ焼きやホットケーキや出来立てパンといった美味しい料理を食べ、学生と教員の分け隔てなく皆で語り合いました。分野の異なる方々と研究についてだけでなく色々な話ができて、貴重でとても良い機会でした。

乗船から8日目の2022年3月30日の午前、無事に横須賀港にて下船。嵐によって大幅に予定が変わってしまったものの楽しく充実した航海の余韻と、それから1週間弱苦しめられる陸酔いに包まれながら帰路につきました。

今回の航海は初めて尽くして、何もかもが新鮮で刺激的な体験でした。自分が普段研究している沈み込み帯について、自分とは異なるアプローチの研究に触れて体験できたことは、私の視野を広げてくれて、大きな財産になったと思います。

常時投稿をお待ちしています。編集は、現在以下の4名で行っています。原稿は1500～5000文字程度、図・写真3点以内を目安に、e-mailでお送りください。

dkuwano@chiba-u.jp
90rymenjpgr@gmail.com
koki9824k@gmail.com
t-morohoshi@eps.s.u-tokyo.ac.jp

桑野太輔（千葉大）
時永万音（新潟大）
吉永亘希（九州大）
諸星暁之（東京大）

一般社団法人日本地質学会2022年度総会

一般社団法人日本地質学会 2022年度総会議事録

1. 日時 2022年6月11日（土）14:00～15:45
2. 場所 Zoomオンライン会議システムによるWEB会議形式

3. 出席役員

理事：磯崎行雄（代表理事 会長）・佐々木和彦（副会長）・平田大二（副会長）

天野一男・芦 寿一郎・安藤寿男・ウォリスサイモン・内野隆之・大藤 茂・岡田 誠・尾上哲治・笠間友博・亀田 純・川端清司・小松原純子・小宮 剛・斎藤 真・坂口有人・杉田律子・高嶋礼詩・内藤一樹・中澤努・奈良正和・西 弘嗣・根本直樹・野田篤・星 博幸・細矢卓志・松田達生・松田博貴・三田村宗樹・矢島道子・緒方信一・亀高正男・矢部 淳・山口飛鳥 以上、理事36名

4. 監事：岩部良子・山本正司 以上、監事2名 議長および議事録作成者

総会開催にあたり定款24条に従い本日出席の代議員から、議長として向山 栄代議員を選出した。

議長は審議開始に際し、オンライン会議システムにより、出席者が一堂に会するのと同様な議論を行うことができる環境であることを確認した。次に総会規則第15条に従い書記として佐藤大介代議員ならびに佐藤友彦代議員を指名し、同時に議事録署名人として、両名を指名した。

5. 議事の経過の要領及びその結果

出席社員の確認

代議員（＝社員）総数 105名

議決権総数 105個

定足数 53個

出席者数 84名

（議場出席者36、議決権行使書26、委任状22）

（議決権行使書は、1号及び3号議案に対してそれぞれ反対1あり）

議長は、出席者数を確認し、総会定足数である代議員の過半数53名をこえる出席者があるので成立している旨宣言し、議事に入った。

第1号議案 2021年度事業報告・決算報告・監査報告

1) 中澤常務理事より、資料にもとづき2021年度の事業報告があった。昨年度行われた事業内容、執行理事会および理事会議決・承認事項について報告が行われた。学術大会を、2021年9月4～6日に名古屋大学をホスト校として開催した。新型コロナウイルス感染を考慮して完全オンラインでの開催とした。巡検や地質情報展は開催を控えたが、シンポジウム・セッションや表彰・記念講演等はオンラインで開催した。本年度

の受賞者の中には初めて5名もの女性会員が含まれた。秋に開催を控えた地質情報展は、当初計画よりも規模を縮小したものの2022年2月19～20日に名古屋市科学館にて開催し、多くの一般客を集めた。また、斎藤 真会員らが地質情報展の企画・運営に対して文部科学大臣表彰（科学技術賞）を受賞した。地質学雑誌については、2022年1月から完全電子化をした影響もあり投稿数は若干増加した。Island ArcのIFは1.558だが次回はさらに上がる可能性がある。普及活動では、フォトコンテストで例年同様多数の応募があった。地質の日では今年度は現地開催を再開したイベントが多かったことなどが報告された。国際連携では、磯崎会長より2024年開催予定のIGC（韓国）で計画されている竹島巡検や巡検案内での日本海表記に関する問題について説明があった。その後、中澤常務理事より、引き続き学会運営として地質学雑誌の完全電子化、表彰制度の見直し、会員種別の見直しのタスクフォースや会員管理システムのクラウド化、支部ではコロナ禍でのオンラインを活用した様々な活動が展開された旨の報告がなされた。執行理事会および理事会議決・承認事項として、44名の会員を50年会員顕彰することや各賞選考委員会による各賞受賞者（功績賞1件、H.E.ナウマン賞1件、小澤賞1件、棚山賞2件、Island Arc賞1件、論文賞1件、研究奨励賞2件、学会表彰1件）の提案が承認されたことなどが報告された。また、法地質学研究委員会が新たに設立され、委員長の川村紀子会員から挨拶、紹介があった。最後に磯崎行雄会員、糸魚川淳二会員(故人)、伊藤谷生会員、竹内圭史会員、橋目敏行会員、山路敦会員から寄付があり、謹んで篤志をお受けした旨報告があった。

なお、2021年5月から2022年5月までに逝去された会員および今年度において逝去が判明した会員17名（うち名誉会員3名）に対し、黙祷を捧げた。

2) 会計担当の緒方理事から、2021年度決算について報告があった。2021年度は単年度約500万円の黒字で引当金の取り崩しも無かったことが報告された。ただし、継続的な会員減少が原因で、2年前に比べると会費収入は50万円減少している。支出では、年会開催事業はオンライン開催により支出額は例年よりも減少しているが、支出超過額は例年同様90万円超であった。続くコロナの影響で支部活動の支出は少なかった。管理費もオンライン会議が継続されていることや事務局の勤務状況により支出が減少した。繰越収支差額実質的には全体収入の30%を超過しているが、全額繰越金とした。

その後、山本正司監事より監査報告があり、事業報告および計算書類等について適正であることが報告された。

1号議案について、書面で6社会貢献【地質標準関係】においてJIS規格を論文等で使用を半ば強制している点について反対意見があった。これに対して中澤常務理事より、地質学会（地質学雑誌）としてはJIS規格の使用を推奨はしているが受理要件とはしていないとの説明があった。また、多額の寄付について寄付者からの具体的な使途要望があったのか質問があり、中澤常務理事より、寄付についての情報はニュース誌（2021年12月号）で紹介した通り、若手野外地質研究者育成を目的とした寄付であり、理事会では若手に対しフィールドワーク賞、研究奨励金の設置を検討しているとの説明があった。

本議案について採決の結果、賛成多数（議場：36、議決権行使書：25、議場委任：22）、反対1（議決権行使書：1）で承認された。

2号議案 代議員および理事選挙結果報告

飛田選挙管理委員長より、現理事が本総会終了と同時に任期を満了し退任となるため、代議員および理事選挙を実施した旨報告があった。代議員立候補者の当選結果、代議員からの理事立候補者の当選結果が報告された。「小中高」の所属階層からの立候補が少なかったが、若い世代の立候補が例年に比べて多かった。選挙管理委員会は、開票も含め全てオンラインで実施された。

2号議案について、理事選挙で、代議員地方支部区からの選出枠が各1しかないのは少ない。理事選出を希望する場合は、代議員選挙の際に全国区で立候補をするため、地方支部区での立候補者数が定員割れる状況になっている。選挙の構造的に問題があるのではないかとの意見があった。

本議案については、全会一致（議場：36、議決権行使書：26、委任状：22）で承認された。

3号議案 2022年度事業計画

磯崎会長より、2021年度の本学会の事業成果を踏まえた2022年度の事業計画の基本方針が示された。早稲田大会では現地開催を目指す。コロナの状況によってはオンライン開催への変更も想定しているがハイブリッドでの開催はしない。出版活動については、和文誌は若手啓蒙のために新規の特集号を企画していく。広報・普及活動では、web、SNS発信を強化していき、HPも動きのあるものに変えていく。

年代表記については、今後もよりよくして

いくために検討していくことなどが説明された。

3号議案について、1号議案同様に書面で6.社会貢献「国際年代層序表の国際層序委員会の国際年代層序表の日本語版の更新や層序単元登録の体制整備を進めるとともに、JISを含めたこれら地質標準の普及を図る」ことに対し、「日本地質学会は、問題点の指摘を考慮せず一方的に標準化を進めており、地質学雑誌等の査読においてJIS規格の地質年代用語の使用を強制している」ことを理由とする反対意見があった。これに対して磯崎会長より、1号議案同様、地質学会としてはJIS規格の使用を推奨はしているが論文等で必須としない旨の説明があった。

本議案について採決の結果、賛成多数（議場：36、議決権行使書：25、委任状：22）、反対1（議決権行使書：1）で承認された。

4号議案 2022年度予算案

緒方理事から、2022年度収支予算案について説明があった。会費収入は、会員が減少傾向のため、80名減少を想定。支出について、出版事業は電子化の効果で100～300万円ほど昨年より減少見込み。年会は参加者を750名と想定し、対面のため例年通りの850万円を計上。支部等活動事業は、コロナ前同様の150万円を計上していることなどが説明された。

本議案について採決の結果、全会一致（議場：36、議決権行使書：26、議場委任：22）で承認された。

5号議案 名誉会員の選出

佐々木副会長より、推薦候補者3名について紹介があった。

5号議案については、一部推薦文の誤字の指摘があったため、執行部に一任して字句を修正することとした。

本議案について採決の結果、全会一致（議場：36、議決権行使書：26、委任状：22）で承認された。

6号議案 定款の変更

7号議案 運営規則および総会規則変更

決議内容、決議・承認に必要な議決数が異なるため議案が分かれているが、第6号議案（定款の変更）、第7議案（運営規則および総会規則変更の変更）は「学会活性化に関わる会費などの変更」と「表彰に関する規則の変更」に関するもののため、合わせて説明があった。

「学会活性化に関わる会費などの変更」については佐々木副会長より説明があった。学生層の入会拡大を狙い、ジュニア会員・学生会員の新設、学生会員を対象にしたバック制会費の導入する。またシニア層の在会延長のため、シニア会員を新設し、会費と大会参加費等を低減するなど変更点が示された。施行は来年度2023年4月から。

「表彰に関する規則の変更」について、磯

崎会長より説明があった。国際賞を都城秋穂賞に変更、ナウマン賞をH.E.ナウマン賞に変更、日本地質学会フィールドワーク賞の新設など変更点が示された。

6号議案の定款変更の決議は、定款第60条の定めにより総代議員数の3分の2以上の賛成が必要だが、採決の結果、全会一致（議場：36、議決権行使書：26、委任状：22）で承認された。

7号議案についても採決の結果、全会一致（議場：36、議決権行使書：26、委任状：22）で承認された。

以上をもって審議を終了した。最後に磯崎会長より、本総会をもって退任するにあたり、副会長・常務理事はじめ執行理事会、理事会への謝意が述べられ、ここで学びたいと若い人が思える学会にしてほしいと学会への想いと次期体制への期待を込めた挨拶があり、その後議長は閉会を宣言した。

2022年6月11日

以上、決議を明確にするためこの議事録を作成し、議長、副議長および出席理事がこれに記名、押印する。

一般社団法人日本地質学会2022年度総会

総会議長 向山 栄

議事録署名人 佐藤大介

議事録署名人 佐藤友彦

代表理事 磯崎行雄

理 事 中澤 努

以下、理事氏名省略

2021年度事業実績概要

1. 学術大会

【名古屋大会】学問の発展に寄与し、また本学会の社会におけるプレゼンスの向上を図る場としての学術大会を、名古屋大学をホスト校として2021年9月4～6日に開催した。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、開催を1年延期したが、今年度も参加者の安全を十分に確保できないという判断から、オンラインでの開催とした。巡検や地質情報展は開催を控えたが、シンポジウム・セッションや表彰・記念講演等はオンラインで滞りなく開催した。講演数は、通常の現地開催に対して6割程度と、コロナ下の中でのオンライン開催としては当初の期待値以上であった。本年度の受賞者の中には（初めて）5名もの女性会員が含まれた。またランチョン・夜間小集会や市民講演会、企業展示、業界研究サポート等の関連イベントのほか、地質学露頭紹介等の新企画も加わり、盛況裏に大会を終えた。秋に開催を控えた地質情報展は、当初計画よりも規模を縮小したものの2022年2月19～20日に名古屋科学館にて開催し、多くの一般客を集めた。

【大会運営】初めてのオンライン大会開催で

はあったが、運営方法について検討を重ねた結果、無事に大会を開催できた。この機会に大会準備に関わる行事委員会と事務局の業務軽減に向けて、参加登録ならびに講演要旨のあり方について検討し、講演要旨の電子化を図った。

2. 学術研究活動

【マスタープラン】地球惑星科学系最大の学会として学問発展に寄与するために、一昨年度、学会主導で内閣府に提案し、採択された大型研究計画（マスタープラン2020）に関連して、名古屋大会での関連セッションで発表を行なった。次期大型研究計画に向け、関連する他の学会にも計画の参画を募るとともに、日本学術会議の地球惑星科学委員会地球・惑星圏分科会で計画内容の発表を行った。なお地球惑星科学委員会地球・惑星圏分科会に新たに学術試料共有小委員会が設置され、大型研究計画の担当理事を含む多くの地質学会会員が委員に就任した。

【ショートコース】前年度に名古屋大会代替企画としてスタートし、極めて好評であったショートコースを、今年度も引き続き開催した。最新の地質学研究の各論などに加えて、論文執筆意義の再考や研究史についてのレビューなど毎回異なる多彩なトピックを企画し、会員・非会員を問わず多くの方々（最大で120名程度）にご参加いただいた。

3. 出版活動

【地質学雑誌】地質学雑誌は、投稿数が減少傾向にあるものの、今年度も継続して出版した。掲載論文数は前年をやや上回った。また令和4年1月からは地質学雑誌の冊子印刷・配布の廃止と完全電子化を図った（予定）。これに伴い編集出版体制の見直しを図るとともに、電子版投稿編集出版規則および関連する細則を作成した。今後の地質学雑誌の出版はデータファイル（旧オープンファイル）も含めJ-STAGEに一本化することとした。カラーチャージの廃止とJ-STAGE Dataへの参加により、今までよりも一論文の情報量が格段に増加した。

【Island Arc誌】Island Arc誌を継続して出版した。掲載論文数は前年をやや上回った。投稿から査読を経て受理・オンライン公開までの時間短縮の努力が功を奏した。本年のIFは1.558と、ほぼ昨年並みであった。今後のさらなるIFのアップのために、理事を始めとし会員に広く投稿を促すと共に、特集号等企画など種々の観点からの検討を実施した。

【ニュース誌】ニュース誌を毎月刊行し、最近の研究動向や学会運営状況などの情報提供に努めた。また1998年以降のニュース誌バックナンバーを学会HPに掲載した。

【ジオルジュ】公式広報誌であるジオルジュについては、より多くの市民の目に触れるようフリーペーパー化の推進を図ると共に配布地点を拡充した。同時に協賛記事の強化によ

り経費の圧縮策が講じられた。

4. 地質災害対応

【災害対応】地質災害に関して、学会HPや防災学術連携体HPを通じて会員ならびに関連機関の調査等の情報を積極的に発信した。熱海伊豆山地区土石流災害に際して、学会の取り組みと所信について会長談話を発表した。

5. 普及活動

【フォトコンテスト】第13回惑星地球フォトコンテストを開催し、力作ぞろいの387点の応募作品の中から、最優秀賞をはじめ12点の入選作品を選出した。また第12回フォトコンテストの入選作品展示会を都内のギャラリーで開催した。

【地学オリンピック】地学オリンピックについては、地学オリンピック支援委員会を中心に継続的に支援を行っているところであり、第15回国際地学オリンピック2022大会の予選となる第14回日本大会への開催協力を行った。なお第14回国際地学オリンピックはオンライン大会で2021年8月25～30日にかけて実施され、34か国から184名の参加があった。日本代表の4名は全員が入賞した（それぞれ、Excellent：1名、Very Good：2名、Good：1名）。

【こどもサマースクール】地震火山地質こどもサマースクールは当学会が継続的に支援を行っている事業であり、サマースクール連合企画委員会及び運営委員会に協力している。今年度も第21回地震火山地質こどもサマースクール（浅間山）の開催に向けて協力を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、開催が次年度へさらに延期となった。

【地質の日】地質の日については、本部および各支部において普及事業の開催を予定し準備をしていたものの、新型コロナウイルス感染拡大によりそのほとんどは中止・延期となったが、オンラインでの普及講演会を2021年5月9日に開催し、多数の参加者を集めた。また地質の日事業推進委員会で作成されたデジタルコンテンツについて学会HP等で周知を図った。

6. 社会貢献

【地質標準関係】国際層序委員会の国際年代層序表に基づき、GSSP新規策定を反映した日本語版層序表の改訂を随時行い、学会HPにて公開した。また学会が主導的に支援し2019年度に改正を行った地質図に関する日本標準規格(JIS A 0204)およびベクトル数値地質図に関する日本標準規格(JIS A 0205)について、ニュース誌および学会HPに解説記事を掲載し普及を図った。

【地質技術者関係】JABEE 地球・資源分野の運営や認定プログラムの継続審査に参画し、JABEEを普及させるために昨年度に続いてJABEEシンポジウムを企画するとともに、高等学校生向けの啓発ポスターを作成し送付した。CPDでは主に企業会員向けに「土

質・地質技術者の生涯学習ネット(GEO-Schooling Net)」を利用し企画する講習会・見学会の情報を提供し、参加者にCPD証明書を発行した。例年学術大会で企画している業界研究サポートでは初めての試みであるオンラインによる企業訪問により多くの学生が参加した。また、就職支援プログラムとして新たに昨年度から企画した地質系若者のためのキャリアビジョン誌を、今年度も参加企業数を大幅に増やして発行した。

【ジオパーク】ジオパークについては、ジオパーク支援委員会を中心に、JGN（日本ジオパークネットワーク）およびJGC（日本ジオパーク委員会）への協力を進めたほか、新たに学術団体が中心となって組織されたジオパーク学術支援連合会(JGASU)の立ち上げに、主要学術団体として協力した。

【情報発信】地質災害についての会長談話を発表するなど、地質学の社会的プレゼンスの向上に努めた。

7. 地学教育

【大学入試】令和4年度大学入学共通テスト（本試験）の地学関連科目「地学基礎」「地学」の問題を確認し、「令和4年度大学入学共通テストの地学関連科目に関する意見書」を取り纏め、大学入試センターに提出した。

【Web教材】「ゆめ基金」助成金により小～中学生を対象として作成された教育用Web教材「ボクたちの「足もと」から地球のことを知ろう」については、新型コロナウイルス感染拡大により、普及イベントは実施できなかったが、学会HP等による周知により、ウェブの閲覧数は順調に伸び、広く浸透しつつある。

【ジュニアセッション】今年度は小中高校生の地質学に関連した研究成果ポスターをオンラインで募集した結果、15件の研究成果が提出された。すべてのポスターに対して評価・コメントを行い、これらの中から3件の優秀賞と5件の奨励賞を選出し、表彰した。

8. 国際連携

【学術交流協定】学術交流協定を締結しているタイ地質学会、モンゴル地質学会、ロンドン地質学会、台湾地質学会、大韓地質学会との交流を継続した。2024年に韓国釜山で開催予定のIGCについて、大韓地質学会・IGC-LOCのリエゾンとZoom会議を開始した。第37回IGC開催ホームページに、日本側の了解を得ないまま日本国内の巡検案内を掲載したことは遺憾であることを伝えるとともに、巡検説明内の「日本海」呼称問題および韓国側の「竹島巡検」について当学会としては賛同できないことから再考を要望した。

9. 学会運営

【事業運営】昨年度に行った学会財政の見直しを踏まえた各事業の実行にあたり、事業目的の達成度と効果の確認を踏まえて各事業の健全化に努めた。また新型コロナウイルスの

感染拡大防止のために、支部例会や総会等の行事開催にあたっては適切な対応を求め、会員・一般参加者の健康、ならびに公衆衛生に配慮した。更に会員減少抑制策、会計収支改善策については中長期的視点に立ち、昨年度の総務委員会の検討結果をもとに、タスクフォースを組織して実現に向けた具体策の検討を始めた。

【ダイバーシティ推進の取り組み】学会のダイバーシティ推進を目的として、特に若手・女性研究者から学会運営に関する問題点・意見を伺う機会として座談交流会を開催した。また名古屋大会のセッションでは試験的に「ダイバーシティ認定ロゴ」を導入した。

【表彰制度の見直し】優れた研究、地質学の発展・普及等に貢献された方々を適切に評価し、学会のさらなる活性化を図ることを目的として、賞制度および選考委員の構成を改定した。特に、新たに「地質学会功績賞」「ナウマン賞」および「地質学雑誌特別賞」を新設した。設定の変更に伴い各賞選考委員会規則の一部改正を行った。

【地質学雑誌出版事業】地質学雑誌の出版事業については、昨年度の出版・財務戦略に関する検討結果を受けて、冊子印刷・配布を廃止し、完全電子化を実現した。また地質学雑誌の完全電子化に合わせて、ジオフラッシュやHP、ニュース誌等の広報メディアを活用して雑誌掲載論文を紹介するなど、サービス向上策を検討した。

【会員サービス】会員に対しては、ジオフラッシュやHP、ニュース誌を通じて、さまざまな参加行事の広報を継続的に行ってきたが、新たに学会公式SNSを立ち上げ、試験運用の中で学会関連の情報発信に努めた。またショートコースの開催、企業会員へのCPD証明書の発行、学生・院生会員への就職支援プログラム等を通じて学術発表以外のメリットの増大を目指した。

【学会組織】学会を構成する多くの委員会について、その活動状況を把握し、形骸化あるいは重複している委員会等については業務内容と責任の明確化と委員会の整理・統合を行った。

【会員管理システム】会員管理システムについて、現行のスタンドアロン版からクラウド版への移行作業を行った。2022年4月に本格運用を始める（予定）。

【事務局体制】学会事務局について、業務内容分担を再確認すると共に、新たな組織・人員体制による業務の整理統合と効率化、ならびに諸規則の整備による継続的な事務局業務の推進を実施した。

以上

2021年度事業経過報告

1. 報告事項

1) 会員の動静

2022年4月末現在の会員は、賛助会員27社、

名誉会員38名、正会員3158名（うち院生割引57名、学部割引3名）、会員総数3223名、2021年4月末と比べて72名の減少であり、その内訳は次のとおりである。

入会者112（賛助 0社、正会員 112名〔うち院生割引 78名、学部割引 7名〕）

退会者107（賛助 0社、正会員 107名〔うち院生割引 5名、学部割引 0名〕）

除籍者62（正会員 62名）

逝去者*15（名誉会員 3名、正会員 12名）

名誉会員：星野通平(2021/4/29)、糸魚川淳二(11/11)、木崎甲子郎(2022/2/26)、

正会員：茂野忠良(2020/9/22)、仲 二郎(2021/1/20)、三好 誠(5/4)、留岡 昇(6/1)、小島秀康(8/12)、中島照雄(9/6)、

鳥居昭三(10/25)、田中久雄(11/21)、榊原雄太郎(12/1)、大江 巖(12/28)、清水 弘(2022/1/17)、清水康守(2/26)

*2021年5月から2022年4月末日までに届出のあった方々。

2) 学会運営に関する諸集会及び委員会等の活動

<2021年度定時総会>

日 時：2021年6月12日 14:00～15:30、WEB会議形式

議決権のある社員総数 105名（定足数：53名）、議決権の数 105個

出席社員数（委任状および議決権行使書提出者を含む）82名、

議決権の総数 82個、出席理事 43名、出席監事 2名

審議事項：1) 2020年度事業報告・決算報告・監査報告、2) 2021年度事業計画、

3) 2021年度予算案、4) 名誉会員の選出、5) 運営規則の改正

いずれの議案も賛成多数で承認。

<委員会等の開催>

・執行理事会（12回）議事内容、報告等については、随時HP、ニュース誌に掲載

・理事会（5回）議事内容、報告等については、随時HP、ニュース誌に掲載

・その他委員会（メールによる会議を含め、随時開催）

3) 学会の行事・事業

1. 第128年学術大会（2021名古屋オンライン大会）

会期：2021年9月4日(土)～6日(月)

会場：一般発表は全てオンライン開催(zoom,e-poster)。

シンポジウム・市民講演会のみ名古屋大学東山キャンパスからYouTubeライブ配信

参加者：601名（会員551名、非会員50名）

・一般発表申込：353件（口頭173件、ポスター171件）

・シンポジウム：S1.特別：1件(口頭9件)

・アウトリーチセッション(e-posterのためなし)

・緊急展示ポスター(なし)

・優秀ポスター賞の授与：7件(9/4・6実施)

・巡検(中止)

・ランチョン：実施3件(9/4)

・夜間小集会：実施2件(9/4)

<日本地質学会各賞の授与式・記念講演会>
日時：9月5日(土)15:00～17:30、YouTubeライブ配信

・会長挨拶

・新名誉会員紹介、新名誉会員挨拶（動画ファイルにて挨拶）：田崎和江会員/伊藤谷生会員/田結庄良昭会員

・永年（50年）会員顕彰者紹介

・各賞表彰／受賞者挨拶・スピーチ

日本地質学会賞国際賞：Brian Frederick Windley氏

日本地質学会欄山雅則賞：田阪美樹会員/額綱佑衣会員

日本地質学会論文賞：中澤 努会員/中嶋 健会員/納谷友規会員

日本地質学会Island Arc賞：Schindlbeck, J. C氏(動画ファイルにてスピーチ)

日本地質学会奨励賞：菊地瑛彦会員/板宮裕実会員

日本地質学会表彰：千葉セクションGSSP提案チーム

・受賞記念講演会

日本地質学会欄山雅則賞

田阪美樹会員「マントルかんらん岩の物質移動と素過程」

額綱佑衣会員「分光光学と地質学のリンク」

日本地質学会賞国際賞（動画ファイルによる講演）

Brian Frederick Windley氏「My Japanese Geo-conversion」

<関連行事>

・学生と駆け出し地質屋 集合！アカデミックな情報交換を楽しむ会：9/4実施。参加者15名。

・地質学露頭紹介：9/5実施。露頭紹介者：8名、参加者70名超。

・ベテラン・シニア懇親会：9/6実施

・WEBを活用する業界研究サポートサービス～地質系企業・団体へのオンライン訪問～

・日本地質学会ジュニアセッション：e-posterによる審査（旧 小さなESのつどい）、発表参加校：14校15件、うち優秀賞3件、奨励賞5件。

2. 地質の日ほか、本部イベント

・地質の日 オンライン一般講演会(5/9(日) 9:30-12:10、YouTubeによるライブ配信。

講師：岡田 誠（茨城大学理工学研究科教授）「地質年代チバニアンと房総の地質」、氏家恒太郎（筑波大学生命環境系准教授）「断層の地質学的研究から読み解くプレート沈み込み帯地震発生の科学」、当日視聴者数約370名。

・街中ジオ散歩 [開催中止]

・第12回惑星地球フォトコンテスト表彰式 [開催中止]

・惑星地球フォトコンテスト入賞作品巡回展示（2021年4月～2022年3月）

東京パークスギャラリー（上野グリーンサロン

内、台東区上野公園）、5月4日(火)～17(月) [第11,12回入選作品]

地質情報展2022あいち一発見！あいちの大地、2022年2月19日(土)～20日(日) [第12回入選作品、入選作品の画像ファイルを再生]

蒲郡生命の海科学館 2022年1月21日(金)～4月10日(日) [第11,12回入選作品]

3. ショートコース(オンライン形式)

・第3回ショートコース、5月23日（日）、受講申込者数：90名

講師：<午前>藤野滋弘（筑波大学）、<午後>後藤和久（東京大学）

・第4回ショートコース、7月18日（日）、受講申込者数：120名

講師：<午前>磯崎行雄（東京大学）、<午後>泊 次郎（科学史研究家）

・第5回ショートコース、10月3日（日）、受講申込者数：92名

講師：<午前>永田秀尚（有限会社風水土）、<午後>宝田晋治（産総研・地質調査総合センター）

4. その他：オンライン形式のシンポジウム・ワークショップ

・座談交流会（ジェンダー・ダイバーシティ委員会Workshop）「地質分野の多様性を増やすには：持続可能で闊達な学会を目指して」、8月1日(日)、10:00～11:30、参加者約50名。話題提供者：益田晴恵(大阪市立大学)、奥津なつみ(海洋研究開発機構)、福地里菜(鳴門教育大学)

・第2回JABEEオンラインシンポジウム「昔と違う イマドキのフィールド教育」、

2022年3月6日(日)、13:30～18:30、参加者約150名。公開～2022年3月末までの視聴回数：197回。

講演者：小荒井 衛（茨城大学大学院理工学研究科）、小柴理人、橋本果歩（同大学修士1年）林 広樹（島根大学総合理工学部地球科学科）、金川久一（千葉大学理学研究院）、小野誠仁（同大学 博士1年）、豊島剛志（新潟大学理学部理学科）、大橋聖和（山口大学理学部地球圏システム科学科）、栃本泰浩（川崎地質株）

5. Web教材「ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう」の利用実績

・教材URLへのアクセス数(2021年度)：52,049件

6. 地質学者に答えてもらおう（2012年3月～運用開始）

2021年度内の質問数19件。これまでの質問の主なものとその答えは学会HPにて公開中。

4) 出版物の刊行

<地質学雑誌>

・(冊子体)127巻4号(2021年4月)～127巻12号(同年12月)を刊行。128巻より完全オンライン化。総ページ数は583ページ。

<日本地質学会ニュース>

・24巻4号(2021年4月)～25巻3号(2022年3月)を発行した。総ページ数は292ページ。

<Island Arc>

・Island Arc 編集委員会の編集により、Wiley社よりVol.30, Issue 1~Vol.31, Issue 1を刊行した。2021年4月~2022年3月末までの総ページ数は590ページ。

<ジオルジュ>

・前期号(2021年5月), 後期号(同年11月)各16ページを発行。

<その他>

・「やばすぎ! 古生物図鑑(宝島社発行, 日本地質学会監修) 2021年7月重版(7000部)。
・「地球全史スーパー年表(岩波書店発行, 日本地質学会監修) 2021年8月増刷(第4刷500部)。
・「第128年学術大会(2021名古屋)プログラム&紙面ブース」2021年8月, フルカラー48p(18団体掲載), 800部発行。配布先: オンライン大会参加登録者, 出展者等600件。
・「地質系若者のためのキャリアビジョン誌2021」2021年12月, フルカラー 92p(73社掲載), 3000部発行。配布先: 大学および附属研究機関等47件。

5) 関連外部委員会への協力

下記の関連外部委員会等に対して本学会から選出された委員。継続してそれぞれの活動, 関連学会の発展と連携に協力した。

日本地球惑星科学連合: 評議員(磯崎行雄), 連絡委員(緒方信一), プログラム委員(松崎賢史, 上澤真平), ダイバーシティ推進委員会(堀利栄), 環境・災害対応委員会-災害の委員(川畑大作), 環境・災害対応委員会-環境の委員(小荒井 衛), 自然史学会連合(兼子尚知), 土質・地質技術者生涯学習協議会(CPD)(佐々木和彦), JABEE運営委員(竹内真司), 地質の事業推進委員会(委員長: 平田大二), 日本ジオパーク学術支援連合(JGASU): 委員・代表(天野一男), (NPO)地学オリンピック日本委員会広報小委員会(坂口有人), 地震火山サマースクール運営委員(柴田伊廣), 防災学術連携体連携委員(中澤努(常務理事), 松田達生(地質災害委員長))など。

6) その他報告事項(主に他学協会との共催・後援, 協賛行事など, 開催時期に関わらず2021年度内において承認したもの)※そのほかはNews誌, HPに掲載の執理事務会議事録, 理事会議事録参照。

<他学協会などからの依頼>※新型コロナウイルス感染拡大の影響により会期変更・開催中止などあり。

・新潟大学旭町学術資料展示館企画展「殻」(7/21-8/29, あさひまち展示館)の後援。
・資源地質学会第70回年会(6/30-7/2, オンライン開催)の協賛。
・日本地球化学会第68回年会(9/1-15, 弘前大学でのハイブリッド大会)の共催。2021年度年会特別セッション「北日本におけるグローバル地球科学総合研究」(9/10(金), 弘前大学)の共催。

・社会地質学会「第31回環境地質学シンポジウム」(11/26-27)の後援。
・石油技術協会令和3年度秋季講演会(10/22, オンライン開催)の協賛。
・資源地質学会国際シンポジウム”Gold Exploration in the Circum-Pacific”(10/14, オンライン開催)への協賛。
・NPO日本地質汚染審査機構「第4回水循環シンポジウム」(10/7, 誌上開催・抄録集発行)の後援。
・第59回アイソトープ・放射線研究発表会(2022/7/6-8, オンライン開催)の後援。
・こどものためのジオ・カーニバル企画委員会「第21回こどものためのジオ・カーニバル」の後援。[開催中止]
・国際地学教育機構「第9回国際地学教育会議」(2022/8/21-24, くびきメッセ(島根県松江市)とのハイブリッド開催)の後援。
・第37回ゼオライト研究発表会(2021/12/2-3)の協賛。
・蒲郡生命の海科学館「第11回, 12回惑星地球フォトコンテスト入選作品展」(2022/1/21-4/10)の共催。
・第36回地質調査総合センターシンポジウム「3次元で解き明かす東京都部部の地下地質」(2022/2/25, オンライン開催)への後援。
・原子力総合シンポジウム2021(2022/1/17, オンライン開催)の後援。
・科学教育研究協議会「第68回全国研究大会・岡山大会」(2022/8/10-12)の後援。
・筑波大学朝永振一郎記念第17回「科学の芽」賞の後援(作品募集期間: 2022/8/16-9/18)。
・産経新聞社, 一般社団法人土壌環境センター主催「地盤技術フォーラム2022」(2022/9/14-16, 東京ビックサイト)の協賛。
・日本学術会議公開シンポジウム「チバニアン, 学術的意義とその社会的的重要性」(2022/5/24, ハイブリッド開催)の共催。
・日本科学技術振興財団「青少年のための科学の祭典2022」(2022/6/11-23/3/26; 全国49会場)の後援。
・第65回粘土科学討論会(2022/9/7-8, 島根大学)の後援。
・三浦半島活断層調査会(代表: 茅野教幸氏)「地質の日記念行事『深海から生まれた城ヶ島』観察会(2022/6/12)の後援。
・朝日新聞社主催「第20回高校生・高専生科学技術チャレンジ(JSEC2022)」の後援(作品募集期間: 2022/9/2-10/4)。
<他学協会などへ依頼>
・第13回惑星地球フォトコンテストについて, 後援および協賛を依頼し承諾された。()は後援および協賛金。
後援: 日本ジオパークネットワーク(3万円), 深田研ジオ鉄普及委員会(1万円)
協賛: 株式会社ウインディーネットワーク(5万円)
・第129年学術大会: 早稲田大会のセッション共催: 堆積地質部会に関わる2つのトピックセッションについて, 日本堆積学会, 石油技術協会探鉱技術委員会と日本有機地球化学会へ共催を依頼し承諾された。

ン共催: 堆積地質部会に関わる2つのトピックセッションについて, 日本堆積学会, 石油技術協会探鉱技術委員会と日本有機地球化学会へ共催を依頼し承諾された。

T9: カーボンゼロエミッションに貢献する石油天然ガス石

T11. 堆積地質学の最新研究

7) 支部の活動

<北海道支部>

1. 支部例会・総会: 7/10(土), オンラインにて開催。
2. 幹事会: オンラインで1回程度の間隔で開催(2022/3/10)
3. 行事
①「地質の日」記念展示[開催なし]
②北海道地質百選検討グループ/③フィールドキャンプ
・活動状況: 現在の検討グループ構成員は次のとおり。

石井正之, 垣原康之, 重野聖之, 田近 淳, 中川 充, 宮坂省吾

・ウェブサイト運用: 北海道地質百選をウェブサイトで公開している。現在, PCが故障につき, 更新停滞中。

・「北海道自然探検 ジオサイト107の旅」出版 および印税収入

出版: 2020年度の売り上げ冊数は64冊, 出版以来の総売上冊数は1,770冊(*)。

* 内訳 2016年度(1,464冊)/2017年度(108冊)/2018年度(92冊)/2019年度(42冊) 2020年度(64冊)

③巡検関係: 新型コロナウイルスの影響ですべて中止。

4. 支部長交代: 支部長は退職した竹下徹会員から山本正伸会員へ変更。

<東北支部>

1. オンラインによる支部総会(2022/3/27(日)), Zoom形式にて開催。出席者11名委任状20名。
①2021年度の会計報告。②2021年度実施のYouTube動画「プレコナ時代のフィールドワークなどを振り返る」の視聴数の報告(5366回)。

2. 普及講演会(2022/3/27(日)), 講演者: 松井浩紀会員(秋田大学), タイトル『有孔虫化石に基づく過去150万年間の南極前線復元: これまでの成果と自動分類の試み』

<関東支部>

1. 幹事会(すべてオンラインで月1回程度の間隔で開催)
4/16, 5/7, 6/7, 7/16, 8/25, 9/24, 10/29, 11/24, 12/24, 2022/1/18, 2/24, 3/11

2. 行事

①巡検関係

・アウトリーチ巡検, 2022/2/20(日), 参加費3,000円, 参加17名

講師: 杉内由佳氏(元・埼玉県立川の博物館), 川の防災と川が作った地形を巡る~首都圏外郭放水路見学と春日部周辺, 中川低地の地形観察~

②フィールドキャンプ[開催中止]※代替行事

として、布良海岸でのフィールド教育巡検を実施。

- ・学生・初級者向け「地質断面図」の書き方講座—布良海岸巡検—

5/22(土)館山市布良海岸野外地質調査、23(日)地質断面図の作成作業(TSUBAKI船橋、多目的スペース)、参加費学生6,000円、一般10,000円、参加者10人(2日目は8人)、「事故災害発生時の連絡体制・対応」のマニュアル化を進めるため定型のフォーマットを作成して実施。

③シンポジウムなど

- ・シンポジウム「県石講演会」、2022/3/5(土)13:00~16:00、参加費無料、参加79名、講師：平田大二会員(神奈川県立生命の星・地球博物館長)、門田真人会員(神奈川県立生命の星・地球博物館外来研究員)、谷健一郎会員(国立科学博物館地学研究部)
- ・地質技術伝承会、2021年5月23日オンライン開催、参加費無料、参加29名、講師：北川博也氏(株式会社ダイヤコンサルタント)「地質調査、最近の動向」

※地質技術伝承会は、2008年から延べ18名が講師を務めてきたが、シリーズ開催は終了。最新のトピック的な話題をテーマとした講演会を引き続き総会で行うこととした。

④サイエンスカフェ「おうちで楽しむ陸と海の火山紀行」、3/21(日)15:00~16:30、参加費無料、参加30名、Zoomによる双方向オンライン、ゲストスピーカー：池上郁彦会員(タスマニア大学)、ファシリテータ：岡山悠子氏(国立科学博物館SCA)

⑤総会、5/23(日)、書面会議の報告会をオンラインで行った

3.支部顕彰：支部功労賞1件 神奈川県立生命の星・地球博物館。

<中部支部>

1. コロナ感染予防のため、例年実施している各県持ち回りでの現地での支部総会、シンポジウム、個人講演、巡検は中止。代替措置として、岐阜県会員が世話人として6/26(土)にオンラインによって以下のイベントを開催した。

- ・中部支部総会(出席15名、議決権行使書提出者14名、委任状提出者19名)。

- ・支部幹事会(出席者9名)2022年年会(石川県)開催方法などを議論した。

- ・シンポジウム「美濃帯の最近の研究事例」『日本海溝の陸上アナログとしての美濃帯研究』山口飛鳥会員(東京大学)『岐阜県西部、舟伏山で発見したP/T境界層』佐野弘好会員(九州大学名誉教授)『美濃帯の上部三畳系チャートに記録された環境変動：カーニアン多雨事象とノーリアン天体衝突』尾上哲治会員(九州大学)

<近畿支部>

1. 普及講演会：『「ちきゅう」で探る地球のなぞ—海底下に暮らす生命の話—』、4/25(日)、WEB開催(配信のみ)、リアルタイム視聴者：~108名、見逃し配信を含めた視聴回数：944

回(見逃し配信を5/8まで実施)。

講師 稲垣史生氏(海洋研究開発機構)、共催 大阪市立自然史博物館・地学団体研究会大阪支部。

2. 地球科学講演会：「海洋マントル掘削計画：なぜ？どこで？何をする？」、5/9(日)、WEB開催(配信のみ)、リアルタイム視聴者：~200名、見逃し配信を含めた視聴回数：1363回(見逃し配信を5/22まで実施)。

講師 森下知晃会員(金沢大学)、共催 大阪市立自然史博物館・地学団体研究会大阪支部。

<四国支部>

1. 第21回日本地質学会四国支部講演会・総会、12/4(土)、場所：WEB開催(Zoomおよび愛媛大学理学部地学コースHP)、本部：愛媛大学理学部、講演会参加者：約40名

【特別講演】1件。講師：村田明広会員(徳島大学名誉教授)

【一般講演】口頭：8件、ポスター：11件。学生発表賞：計6件(最優秀講演賞(口頭発表)1件、最優秀ポスター賞1件、優秀講演賞(口頭発表)2件、優秀ポスター賞2件)、CPD単位発行：3人(3.25単位)

【支部総会】総会参加者(四国の地質学会会員)：約13名。①2021年度決算(見込み)②2022年度予算が承認された。

<西日本支部>

1. 地質の日 くまもと大会(共催)、オンライン開催。博物館などのホームページを通じて、熊本の地形、水資源、自然災害などの映像と地質・古生物分野のクイズや塗り絵などを公開。

2. 山口大学理学部サイエンスワールド2021(後援)、11/7(日)、山口大学：参加者250名以上。主に小中学生や家族、地域の方を対象とした科学分野の啓蒙活動。

3. 西日本支部2021年度総会・第172回例会、2022/3/5(土)、ZOOMオンライン開催(広島大学HiPeR)。口頭発表：17件。

2. 執行理事会および理事会議決・承認事項

1) 理事会議長・副議長の選出

議長：山口飛鳥、副議長：納谷友規

2) 2021年度の各賞選考委員会委員長は委員間の互選により西 弘嗣理事を選出した。

3) 次の委員会委員の選出について承認(委員会委員一覧)。

- ・地質技術者教育委員会1名追加：坂口有人(山口大学)

- ・現行地質過程部会廃止に伴い、行事委員会から現行地質過程部会選出の委員を削除。

- ・地学教育委員会3名追加：松永 豪(大阪府立泉北高等学校)、渡来めぐみ(茗溪学園中学校・高等学校)、大信田彦磨(愛知県海翔高等学校)

4) 新型コロナウイルス感染拡大防止に関する学会の対応を6/1付でHPに掲載。以後、社会状況を注視しながら随時情報を発信(6/20、7/21、8/3、9/13、10/1、2022/1/20(2/10、3/4更新))。

5) 日本学術会議大型研究計画マスタープランに関する提案『地球惑星研究資料のアーカイブ化とキュレーションシステムの構築』について：①関連学協会(日本鉱物科学会、地球環境史学会、日本堆積学会、日本古生物学会、日本地球化学学会)に対し共同提案者または賛同者としての協力を依頼した。②日本学術会議地球惑星委員会地球惑星企画分科会のもとに、「学術試料共有小委員会(委員長：堀 利栄、副委員長：木村 学)が設立された。

6) 地学オリンピック日本委員会より、第14回オリンピック予選・本選の出題委員に会員1名を推薦。

7) ショートコースの動画視聴については、①講師の許諾が得られた場合のみ動画視聴を可とする。②ダウンロードやURLの再配布など行わないよう参加者に強く呼びかける。③CPD受講証明書は当日出席者のみを対象として発行する。

8) 静岡県熱海伊豆山地区土石流についての会長コメントを発表した(7/6付学会HP掲載)。

9) オンライン行事が増え、イベントの申込などを行う機会が増えたこともあり、学会活動の中で個人情報を収集、取り扱う場合には必ず「日本地質学会プライバシーポリシーに従う」と明示することを再確認した。

10) 文部科学大臣表彰科学技術賞へ、1件の推薦を承認。→2022年4月受賞決定。「防災減災から地域振興につながる地質情報の普及啓発」(斎藤 真会員ほか3名)。

11) 野外地質学に関する若手育成事業について寄付金を原資とした若手育成事業の検討チームを立ち上げることとした(メンバー：磯崎行雄、亀高正男、星 博幸、矢部 敦、中澤努)。

12) 選挙管理委員会の選出：2022年度代議員および役員選挙管理委員の承認。委員長は互選。

委員氏名：飛田健二(委員長)、尾崎正紀、堤 之恭、永治方敬、藤崎 渉

13) 2021年古屋大会関連、追加・変更事項を承認。

- ・①学生と駆け出し地質屋集合！アカデミックな情報交換を楽しむ会／②地質学露頭紹介／③ベテラン・シニア懇親会など、追加イベントの実施。

- ・懇親会懇親会や打ち合わせ等への利用のため、仮想空間ツール「oVice」を導入。

- ・ダイバーシティ認定ロゴ導入を試験的に導入(ロゴ付与希望の申し出のあった該当セッション、講演に対してロゴを付与)。

- ・名古屋大会会場にて公開予定のシンポジウムは完全オンラインの対応に変更。

14) 男女共同参画学協会連絡会へのオブザーバー参加が認められた(運営委員会(12/13)にて、新規加盟学協会として磯崎会長が挨拶)。

15) 地質学雑誌掲載論文(学術データ)の適切な利用を促進するためにJ-STAGE公開PDFの保護を解除し、過去のJ-Stageにアーカイブされている論文についても解除することとした。

16) 2022年度代議員および役員選挙について、選挙に向けての告示文書、スケジュール等を承認。

17) 次の委員会委員の追加選出について承認。

- ・地学オリンピック委員会1名追加：富永紘平（筑波山地域ジオパーク推進協議会）
- ・地質学雑誌編集委員会1名追加：佐藤智之（産総研）

18) 各賞の賞金廃止を承認。これまで日本地質学会賞、国際賞、小澤儀明賞、棚山雅則賞、研究奨励賞に副賞として設けていた賞金の授与を廃止する。

19) 今後の学術大会開催地の選定について、これまでの支部単位でのローテーションを超えて、支部や地域の希望を積極的に募ることとする。

20) 地球惑星連合の2022年プログラム委員の推薦：(正) 松崎賢史 / (副) 上澤真平

21) 「日本地質学会News」について。

- ・地質学雑誌の付録として刊行していたが、地質学雑誌完全電子化に伴い、独立した冊子体とし、新たなISSN（国際標準逐次刊行物番号）を登録申請した。
- ・News誌のバックナンバーPDFを学会HP上で公開した(最新版～過去分まで全て閲覧可能)。

22) 学会各賞の応募書類書式の一部変更(今回の2022年度候補者の選考から適用)を承認。主な変更点は次の通り。

- ・候補者のORCID番号、researchmap記入欄を経歴欄ページに設ける。
- ・その他の形式は任意とする。

23) 2021年度内の部会長の交代を了承。(岩石部会)河上哲生、(堆積地質部会)田村 亨

24) 「地質学露頭紹介」(2021名古屋大会追加企画)について、JpGU2022でも地質学会主催イベントとして開催することを承認。

25) 新規入会者へ配布する会員カードの増刷を承認(500枚作成。デザインを一部変更：創立125周年記念ロゴを外し、学会ロゴマークに差し替える)。

26) 地質学雑誌完全電子化に伴うオンデマンド冊子の作成は、会員向けの有償サービスとして実施する。

27) 会長及び副会長立候補に対する意向調査のウェブ投票システムの利用について、2022年度代議員選挙が無投票の場合、会長・副会長意向調査は、WEB投票システムを利用することを了承。→代議員選挙は投票となり、WEB投票システムの利用にはいたらなかった。

28) クラウド版会員管理システムの導入について：複数のシステム会社とzoomミーティング等でクラウドシステムの仕様に関する問い合わせを行い、相見積を取り、他社比較の検討を経て業者を選定。依頼する業者（ウェッジソフトウェア(株)社：WS社）の担当者とデータ移行作業についての具体的な打ち合わせを行い、WS社と契約書を交わした。2022年1月下旬からデータ移行作業開始。2月

中旬に納品。事務局にて動作確認中（現在、会員への公開に向け最終調整中）。

29) 会員名簿の発行について、紙媒体での名簿発行はなしとすること、クラウド版会員管理システムは会員だけがアクセスする形式とすることを承認。

30) 名誉会員推薦委員会委員の選出。委員長：佐々木副会長

- ・階層別委員(4名)：官公庁：斎藤 真、小中高教員：米澤正弘、会社：青野道夫、大学：松田博貴
- ・職責委員(各支部長7名)：山本正伸、辻森樹、向山 栄、道林克禎、三田村宗樹、堀利栄、早坂康隆
- ・理事会推薦委員(1名)：保柳康一

31) ジオパーク支援委員会規則改正と委員追加を承認。第2条と第3条の改正。山下浩之（神奈川県立生命の星・地球博物館）を1名追加。

(業務) 第2条 本委員会は、次にあげる業務を行う。

- 1) 日本地質学会年会ならびに日本地球惑星科学連合大会における、ジオパークセッションやジオパーク関連行事の企画・運営。
- 2) 日本ジオパークネットワークの加盟地域、新規に加盟する地域ならびに加盟の可能性のある地域への地質学的な情報提供ならびに支援。
- 3) 日本ジオパーク学術支援連合と連携した活動の実施

3) 4) その他、ジオパークに関連する普及・啓発および日本ジオパークネットワークへの協力にかかわる事業の推進。

(構成) 第3条 本委員会は、委員長および会員による下記の委員をもって構成する。また、必要に応じて副委員長、外部専門委員を置くことができる。

- 1) 理事会が委嘱する委員
- 2) 各支部が推薦する委員
- 3) 委員会が推薦する委員

32) JABEE地球・資源分野運営委員会からのJABEE運営体制変更について、見直し提案に対する地質学会の学会回答案を承認。正式な学会回答は、12月15日付で資源・素材学会へメールと郵送にて送付。

33) 学会公式SNSアカウント、若手アカウントの運用規則・体制についての運用規則案を承認。

34) 日本語版国際年代層序表を最新版に合わせて更新(現在、2022年2月改定版)。→最新版は学会HPを参照。

35) 選挙開票立会人として、上原康裕会員（応用地質株式会社）、坂田健太郎会員（産総研）を選出。

36) 各賞選考委員会の下に各賞選考検討委員会を設置し、学会賞、功績賞、ナウマン賞、小澤儀明賞・棚山雅則賞の諮問をした。委員間の互選により委員長は磯崎会長が選ばれた。

(前・現地質学会長) 松田博貴（前会長）、磯崎行雄（現会長、委員長）

(過去の学会賞受賞者7名の委員：執行理事会推薦) Simon Wallis, 荒井章司, 岩森 光, 榎並正樹, 山路 敦, 乙藤洋一郎, 川幡穂高・Island Arc賞については、Island Arc編集委員会に選考を諮問した。

37) 白木玲子事務局員との契約更新(1年間継続)を交わした。

38) 日本地質学会News2022年1月号より「博物館で地学を学ぼう！」と題した連載を開始する(2022年は関東支部内の博物館等が担当)。

39) 2022年度山田科学財団研究助成について、1件の推薦を承認。

40) 第13回惑星地球フォトコンテストの審査結果(応募総数387点)：最優秀賞1点、優秀賞2点、ジオパーク賞1点、日本地質学会賞1点、ジオ鉄賞1点、スマホ賞1点、入選5点、佳作19点を選出。

41) 2022年度からのJABEE地球・資源分野：新体制の発足に対して、地質学会から5名(委員4名、監事1名)を推薦した。

42) 土質・地質技術者生涯学習協議会:GEOネットの定例会議(2022/3/15(火)、オンライン)において、CPD登録改正等の説明があり、地質技術者教育委員会が会員向けに解説する。

43) 2022年の「地質の日」に、オンライン一般講演会の実施(2022/5/8(日))を決定。

講師：斎藤真理事、鹿野和彦会員

44) 文部科学省より令和4年度科学技術週間(2022/4/18-24)への協力機関登録及び行事情報提供依頼があり、機関登録を行った。2022年「地質の日」関連行事(フォトコン入選作品展、オンライン講演会)を登録。

45) 大学入試センターにたいし「令和4年度大学入試共通テストの地学関連科目に関する意見書(2020/3/29付)」を提出。

46) 防災学術連携体主催「第13回防災学術連携シンポジウム：自然災害を取り巻く環境はどう変化してきたか」(2022年5月9日(月))において、応用地質学会と地質学会の共同発表を行う。タイトル「地形・地質から読み解く自然災害の変化と応用地質学的対応」日本応用地質学会・日本地質学会 稲垣秀輝・高見智之

47) 街中ジオ散歩を2022/5/15(日)に開催することとした(国分寺駅周辺、募集人数縮小(15名)、実施時間を半日に短縮)。

48) 日本学術会議より関連学協会に対して、国際基礎科学年(IYBSSD)*への協力依頼があり、地質学会としても趣旨に賛同し、積極的に取り組むこととする。支部活動でも取り組んでもらうよう働きかける。

*国連総会で2022/6/30-2023/6/30を「持続可能な発展のための国際基礎科学年(IYBSSD)」とすることが決議された。日本学術会議からは、IYBSSDの趣旨を踏まえたシンポジウムやイベント開催等の協力依頼があった。

49) 新設賞の英語名称については、次の通り定めた。

- ・功績賞：Outstanding Contribution

・Award/H.E.ナウマン賞：H. E. Naumann Award
 ・地質学雑誌特別賞：JGSJ Short Publication Award
 ・都城秋穂賞：Akiho Miyashiro Award
 ・フィールドワーク賞：Fieldwork Award
 50) 地質学雑誌電子化に関わる規則改正(9月11日理事会，12月11日理事会，2022年4月9日理事会)を承認。→最新版の規則は学会HPを参照。
 51) 次の44名の会員を50年会員として顕彰することとした。
 池田保夫，石井久夫，伊藤谷生，井上正澄，今岡照喜，宇野泰光，大竹敏則，大橋俊夫，香川重善，狩野謙一，栗田光雄，小出和男，河野忠臣，小林武彦，小宮 学(2022/4/29逝去)，紺谷吉弘，近藤直門，柴田秀道，白石和行，鈴木達郎，須藤 茂，傍島武師，北田廣，津村善博，徳橋秀一，中屋志津男，成尾英仁，西田高久，西村 昭，西脇二一，長谷川四郎，林 隆夫，原田憲一，東野外志男，平社定夫，牧本 博，松本 良，丸山茂徳，宮城晴耕，山崎晴雄，山崎安正，湯浅真人，吉田亮史，吉田光廣
 52) 2021年度事業実績報告・決算案を承認した。
 53) 2022年度事業計画および2022年度予算案を承認した。
 54) 名誉会員推薦委員会から候補者として提案された，板谷徹九会員，平 朝彦会員，八尾 昭会員を総会に推挙することとした。
 55) 学会活性化に関わる会費等の変更と関連規則(定款，運営規則，総会規則)の変更を承認。会員に向けては，2022年2月15日付と2022年5月10日付，ニュース誌，学会HP上にて説明(会員のページに詳細版あり)①「学生会員」「シニア会員」の再定義と「ジュニア会員」の新設②学生層やシニア層に対する会費低減の変更③学術大会に参加しやすくなるための参加費低減の変更④長年在会し学会に貢献している会員への永年会員顕彰の拡充変更
 56) 表彰制度の見直しと関連規則(運営規則，各賞選考規則，各賞選考委員会規則)の変更を承認。
 57) 各賞選考委員会より提案された下記の各賞授賞者を承認した。
 ・日本地質学会功績賞(1件)
 高橋正樹(日本大学)
 対象研究テーマ：沈み込み帯のマグマ活動研究を通じた地質学の普及と社会的貢献
 ・日本地質学会H.E. ナウマン賞(1件)
 片山郁夫(広島大学大学院先進理工系科学研究科)
 対象研究テーマ：地球内部での水循環に関する研究
 ・日本地質学会小澤儀明賞(1件)
 石輪健樹(国立極地研究所)
 対象研究テーマ：海水準変動復元と固体地球

モデリングに基づく南極氷床変動メカニズム解明の研究
 ・日本地質学会棚山雅則賞(2件)
 岡崎啓史 会員(海洋研究開発機構)
 対象研究テーマ：高温高压変形実験に基づく岩石レオロジー研究
 宇野正起 会員(東北大学大学院環境科学研究科)
 対象研究テーマ：プレート収束帯における動的な流体活動
 ・Island Arc Award(1件)
 授賞論文：Isozaki, Yukio, 2019, A visage of early Paleozoic Japan: Geotectonic and paleobiogeographical significance of Greater South China. Island Arc, 28: e12296.
 ・日本地質学会論文賞(1件)
 授賞論文：Takashima, R., Hoshi, H., Wada, Y., Shinjoe, H., 2021. Identification of the source caldera for the Middle Miocene ash-flow tuffs in the Kii Peninsula based on apatite trace-element composition. Island Arc, 30, e13039. doi:10.1111/iar.12404
 ・日本地質学会研究奨励賞(2件)
 中西 諒(東京大学大気海洋研究所)
 対象論文：中西 諒，岡村 聡，2019，1640年北海道駒ヶ岳噴火による津波堆積物の分布と津波規模の推定。地質学雑誌，125(12)，835-851。
 加藤悠爾(筑波大学生命環境系)
 対象論文：加藤悠爾・柳沢幸夫，2021，秋田県出羽山地の笹森丘陵に分布する新第三系の地質と珪藻化石層序。地質学雑誌，127(2)，105-120。
 ・日本地質学会表彰(1件)
 伊与原 新氏(小説家・推理作家)
 表彰業績：地球惑星科学研究をいかした小説発表とそれによる科学知識の普及
 ※学会賞，国際賞，小藤文次郎賞，地質学雑誌特別賞は，いずれも該当なし。
 58) 研究委員会の解散と設立をそれぞれ承認。
 ・地質環境の長期安定性研究委員会(委員長 吉田英一)の解散。
 ・法地質学研究委員会(委員長 川村紀子)の設立。
 59) 6月11日開催予定の総会議案の承認。
 60) 2022年東京・早稲田大会のセッション変更と開催形式，巡検実施に向けてのルール・依頼事項を承認。
 ・早稲田大会のセッションから「トピックセッション」，「ジェネラルセッション」，「アウトリーチセッション」の3カテゴリに変更。従来のレギュラーセッションは発展的に解消。
 ・早稲田大会の開催方法は次の通り。①口頭発表は対面，ポスター発表はe-poster(オンライン)。②懇親会は実施しない。③表彰・顕彰式は現地実施)
 ・「巡検実施にあたってのCOVID-19に関わる対応指針」→大会サイトを参照。
 61) 学会内でのダイバーシティ推進のため，

学術大会セッションへのEDI(Equality, Diversity and Inclusion)ロゴマーク付与(世話人申告制)と，地質分野新規参入“若手”研究者支援のためのECS(Early Career Scientists)ロゴマーク付与(自己申告制)を承認。
 2022年度以降の学術大会から実施。
 62) 2023年以降の学術大会開催地は次の通り。
 2023年 近畿支部：京都大学(2023/9/17(日)-19(火)，実行委員長：山路 敦，事務局長：佐藤活志)
 2024年 東北支部：山形大学(実行委員長：伴 雅雄，事務局長：本山 功)
 63) 2021年1月から2022年3月までにご寄付いただいた方々は次の通り(50音順，敬称略)。謹んで篤志を受けた。
 磯崎行雄，糸魚川淳二(故人)，伊藤谷生，竹内圭史，橋目敏行，山路 敦

2022年度事業計画骨子

地球惑星科学系の中では国内最大規模を誇る学会として，地質学および関連学問分野の進化・発展に寄与するという本会の責務を全うするため，以下に示す事業を実施する。

(1. 学術大会)

学会活動の中核をなす学術大会は学問の発展に寄与する場であり，常に本学会の社会におけるプレゼンス向上の場となることを目指している。次年度は早稲田大会(第129年学術大会)を，2022年9月4日(日)～6日(火)に開催する。基本的に大学での現地開催を目指す。感染拡大防止の観点からオンライン開催も想定しておく。

(2. 学術研究活動)

日本発の研究を世界に発信すると共に，地域に根ざした支部との連携強化を図る。さらに，学術大会における研究発表のみならず，2020年度から開始したショートコースの定着・整備を進め，専門性の高い会員育成に励む。これらの活動を通じて会員の満足度を上げ，会員定着率の向上を図る。また，本会が主体となって国内外の関連学術団体との連携を取りつつ，大型研究等の立案・推進に努め，地質学の継続的発展を目指す。

(3. 出版活動)

地質学雑誌およびIsland Arc誌における優れた論文の確保と安定した出版を目指し，専門部会等と協力して投稿数の増加に努める。特に各分野からの総説論文を増やし，学術誌としての存在感と注目度を高めるように努力する。その結果としてウェブからのダウンロード数および被引用数が増加することを期待し，両誌では新規特集号の企画について積極的に推進する。また投稿から掲載までの時間短縮に向け，不断の努力を行う。

地質学雑誌の出版については、各種会員サービスとのバランスをとりつつ、2022年1月からの完全電子化を軌道に載せるとともに、中期的な出版・財務戦略を踏まえた安定した出版体制を構築する。

公式広報誌「ジオルジュ」については、ジオパークや地学オリンピック、博物館、スポンサー等との連携と財務構造のさらなる改善を進め、安定的な発行を維持しつつ、さらに市民への広範な広報に努める。

(4. 地質災害対応)

頻発する地質災害の発生に迅速に対応する体制を再構築し、地質学的観点からの緊急調査・研究を推進すると共に、地質学会HPや地質災害ポータルからの情報発信に努める。

専門部会・支部、ならびに防災学術連携体等における学会活動を通じて、災害に関する地質学的知識や情報を社会へ提供・発信する。また、地域の地形・地質特性や自然条件に根ざした地質災害の理解と防災・減災についての普及・啓発に努める。

(5. 広報・普及活動)

学会公式サイト(HP)、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)「ちーとも」、ウェブ教材、広報誌「ジオルジュ」、リーフレット、フォトコンテスト、講演会などのサービスや機会について、より効果的・効率的に情報を発信できるよう再検討と充実を図ると共に、新たに学会公式Twitter等を活用して社会への情報発信を強化する。特にHPの再点検と充実を図る。また地質情報展や「地質の日」事業の共催・支援を通じて、市民・地

域レベルの啓蒙活動を推進し、「県の石」の普及を継続的にすすめる。

(6. 社会貢献)

国際層序委員会の国際年代層序表の日本語版の更新や層序単元登録の体制整備を進めるとともに、JISを含めたこれら地質標準の普及を図る。また産・官・学の連携を進め、プレスリリースや学会声明等をタイムリーに発信することにより、地質学が社会の持続的発展に資することを発信し、社会的プレゼンスの向上に努める。地質技術者教育については、JABEEやCPDを通じて学生・大学・企業をつなぐサービス強化を引きつづき図る。ジオパークについては、日本ジオパーク学術支援連合の活動を通じて学術面からの支援を行う。また日本ジオパークネットワークおよび日本ジオパーク委員会への協力を引きつづき行う。

(7. 地学教育)

令和5年度大学入試共通テスト(本試験)の地学関連科目の「地学基礎」「地学」問題を確認し、改善等が必要であれば意見書として取り纏め、入試センターに送付するとともに公表する。小中高校生を対象とした研究成果の発表の場として、学術大会においてジュニアセッションを実施する。地学オリンピック、地震火山地質こどもサマースクール等への支援を継続して行う。

(8. 国際連携)

学術交流協定を締結している台湾地質学会、モンゴル地質学会、タイ地質学会、大韓

地質学会、ロンドン地質学会、との交流について、より実質的な学術活動の連携を図る。

(9. 会員サービス・学会運営)

学生・院生会費の減額など、会費や参加費の見直しを行うと同時に、就職支援、地質技術者の継続的な専門教育(CPD)に連携した地域型講演会・ワークショップ等の従来型事業を継続して実施する。また、若手研究者・技術者およびその予備軍である学生・院生会員の育成のための新企画やシニア会員の活躍の場等を提供することで、学生・院生の入会者数の増加および一般会員としての定着率向上につなげる。さらに、優れた研究、地質学の発展・普及等に貢献された方々を適切に評価し、学会のさらなる活性化を図ることを目的として、引き続き表彰制度の見直しの検討を行う。

学会組織については、2018年度より進めている各種委員会・専門部会組織の実態調査を踏まえ、業務内容・責任の明確化を進めると共に、学会規模に応じた委員会・専門部会の整理・統合、効率化を進める。また次回選挙に向けて投票の電子化と関連する規則改正の検討をすすめる。学会事務局体制については、業務の整理・統合と効率化を一層進めることによって、事務局業務の安定化をはかる。さらにダイバーシティー確保の観点から、これまで極めて少数であった理事会および執行理事会の中での女性会員の増加に努める。

以上

一般社団法人日本地質学会2021年度収支決算
(2021年4月1日～2022年3月31日)

科 目	2021年度予算	2021年度決算	差 異
I 事業活動収入の部			
1 事業活動収入 1)			
1) 基本財産運用収入	2,500	510	1,990
基本財産利息収入	2,500	510	1,990
2) 特定資産運用収入	2,000	461	1,539
特定資産運用収入	2,000	461	1,539
3) 会費収入 2)	36,360,000	38,630,500	-2,270,500
正会員会費収入	34,000,000	36,043,500	-2,043,500
正会員院生割引会費収入	800,000	972,000	-172,000
正会員学生割引会費収入	60,000	40,000	20,000
賛助会員会費収入	1,500,000	1,575,000	-75,000
4) 事業収入 3)	16,831,000	65,025,414	-48,194,414
①出版事業収入	7,540,000	7,422,130	117,870
雑誌販売収入	1,800,000	2,074,100	-274,100
雑誌印刷負担金収入	1,750,000	1,524,100	225,900
別刷収入	210,000	329,930	-119,930
広報紙販売収入	20,000	15,400	4,600
論集収入	20,000	9,100	10,900
リーフレット販売収入	250,000	229,430	20,570
バックナンバー等売上収入	10,000	0	10,000
その他出版物収入	50,000	14,394	35,606
広告料収入	420,000	357,000	63,000
広報誌企画料	660,000	660,000	0
アイランドアーク編集費・関連収入	2,100,000	2,000,796	99,204
雑収入	250,000	207,880	42,120
②年会開催事業収入 4)	3,110,000	3,344,000	-234,000
参加登録費収入	2,760,000	2,664,000	96,000
懇親会参加費収入	0	0	0
展示収入	350,000	680,000	-330,000
雑収入	0	0	0
③普及事業収入 5)	1,290,000	3,417,600	-2,127,600
普及イベント参加費収入	960,000	700,000	260,000
普及資料等販売収入	300,000	267,600	32,400
雑収入	30,000	2,450,000	-2,420,000
④支部・部会等活動事業収入 6)	720,000	133,500	586,500
イベント参加費収入	500,000	97,500	402,500
資料等販売収入	100,000	0	100,000
負担金収入	100,000	36,000	64,000
雑収入	20,000	0	20,000
⑤補助金・寄付金等収入 7)	190,000	50,640,481	-50,450,481
出版事業に係る補助金・寄付金収入	100,000	102,481	-2,481
年会開催事業に係る補助金・寄付金収入	0	0	0
広報・普及事業に係る補助金・寄付金収入	90,000	90,000	0
その他助成金収入	0	50,448,000	-50,448,000
⑥雑収入	211,000	67,703	143,297
受け取りの利息	200	325	-125
引当金受取利息	800	129	671
その他の収入	210,000	67,249	142,751

科 目	2021年度予算	2021年度決算	差 異
⑦引当預金取崩し収入 8)	3,770,000	0	3,770,000
事業準備引当預金取崩し収入	1,770,000	0	1,770,000
年会開催引当預金取崩し収入	1,400,000	0	1,400,000
普及・寄出版引当預金取崩し収入	300,000	0	300,000
研究奨励引当預金取崩し収入	300,000	0	300,000
【事業活動収入計】	53,195,500	103,656,885	-50,461,385
【前年度繰越金】	15,867,503	15,867,503	0
【収入合計】	69,063,003	119,524,388	-50,461,385

科 目	2021年度予算	2021年度決算	差 異
II. 事業活動支出の部			
1) 事業費支出 9)	39,094,100	34,756,490	4,337,610
①出版事業 10)	28,194,200	26,088,540	2,105,660
a 給料手当支出	4,880,000	4,359,052	520,948
b 賞与支給支出	1,200,000	1,143,458	56,542
c 退職給付金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	820,000	935,945	-115,945
e 会議費支出	16,000	1,083	14,917
f 旅費交通費支出	150,000	155,201	-5,201
通信運搬費支出	3,800,000	3,636,354	163,646
h 消耗什器備品費支出	423,000	197,486	225,514
i OIA機器・システム等保守管理費	387,000	278,281	108,719
j 消耗品費支出	260,000	289,157	-29,157
l 光熱水料費支出	2,626,100	2,626,079	21
m 事務所賃借料支出	7,000,000	5,930,173	1,069,827
地質学雑誌印刷製本費支出	2,700,000	2,999,348	-299,348
News誌印刷製本費支出	1,250,000	717,025	532,975
k 広報誌ほか印刷製本費支出	1,200,000	2,057,568	-857,568
出版編集費	350,000	188,918	161,082
諸謝金支出	50,000	13,018	36,982
n 雑支出	5,247,400	4,250,094	997,306
②年会開催事業 11)			
a 給料手当支出	1,220,000	1,089,758	130,242
b 賞与支給支出	300,000	285,864	14,136
c 退職給付金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	205,000	233,984	-28,984
臨時雇賃金支出	20,000	83,900	-63,900
旅費交通費支出	0	9,800	-9,800
通信運搬費支出	54,000	207,998	-153,998
機器賃借料支出	0	165,000	-165,000
消耗品費支出	24,000	8,104	15,896
演習経費公開費	1,397,000	1,175,625	221,375
印刷製本費支出	30,000	93,962	-63,962
懇親会実施支出	0	27,500	-27,500
保険料支出	10,000	0	10,000
委託費支出	1,800,000	686,290	1,113,710
雑支出	110,000	119,909	-9,909
巡修実施支出	15,000	0	15,000

科 目	2021年度予算	2021年度決算	差 異
③普及事業 12)	3,941,400	3,625,946	315,454
a 給料手当支出	1,220,000	1,089,758	130,242
b 賞与支給支出	300,000	285,864	14,136
c 退職給付金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	205,000	233,984	-28,984
e 会議費支出	8,000	541	7,459
f 旅費交通費支出	25,000	9,682	15,318
g 通信運搬費支出	170,000	544,925	-374,925
h 消耗什器備品費支出	100,000	43,878	56,122
i OA機器・システム等保守管理費	185,000	73,502	111,498
j 消耗品費支出	86,000	122,245	-36,245
k 印刷製本費支出	160,000	460,759	-300,759
臨時雇賃金支出	450,000	70,000	380,000
会場賃借料支出	10,000	0	10,000
普及イベント実施支出	30,000	17,890	12,110
広告宣伝費	160,000	160,000	0
印刷製本費支出	10,000	0	10,000
諸謝金支出	280,000	190,274	89,726
負担金支出	400,000	200,000	200,000
n 雑支出	80,000	60,244	19,756
④支部・部会等活動事業 13)	891,100	355,950	535,150
旅費交通費支出	200,000	20,650	179,350
通信運搬費支出	35,000	9,460	25,540
機器賃借料支出	13,000	6,750	6,250
消耗品費支出	20,000	8,643	11,357
印刷製本費支出	50,000	0	50,000
臨時雇・賃金	60,000	16,000	44,000
会場賃借料支出	42,000	22,400	19,600
イベント実施支出	230,000	120,929	109,071
印刷料支出	20,000	7,100	12,900
諸謝金支出	170,000	121,253	48,747
負担金支出	15,000	0	15,000
雑支出	36,100	22,765	13,335
⑤研究奨励事業 14)	520,000	435,960	84,040
賞授与支出	300,000	300,000	0
雑支出	220,000	135,960	84,040
⑥特別事業 15)	300,000	0	300,000
国際交流等事業費	200,000	0	200,000
緊急災害調査事業費	100,000	0	100,000
2)管理費 16)	14,031,400	12,892,211	1,139,189
a 給料手当支出	4,880,000	4,359,070	520,930
b 賞与支給支出	1,200,000	1,143,460	56,540
c 退職給付金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	820,000	935,958	-115,958
e 会議費支出	56,000	48,018	7,982
f 旅費交通費支出	200,000	53,458	146,542
g 通信運搬費支出	850,000	1,102,388	-252,388
h 消耗什器備品費支出	423,000	197,502	225,498
i OA機器・システム等保守管理費	387,000	330,817	501,683
j 消耗品費支出	250,000	302,496	-84,504
k 印刷製本費支出	260,000	217,503	32,497
l 光熱水料費支出	2,626,100	269,161	-9,161
m 事務所賃借料支出		2,626,091	9

科 目	2021年度予算	2021年度決算	差 異
諸謝金支出	396,000	396,000	0
租税公課支出	1,200	200	1,000
負担金支出	300,000	261,883	38,117
n 雑支出	300,000	398,606	-98,606
3)法人税等支出	70,000	70,000	0
4)引当預金繰入支出 17)	0	50,000,461	-50,000,461
繰入支出	0	50,000,461	-50,000,461
【事業活動支出計】	53,195,500	97,719,162	-44,523,662
【事業活動収支差額】	0	5,937,723	5,937,723
次期繰越収支差額	15,867,503	21,805,226	-5,937,723

<注>2021年度決算

- 収入全体は前年度よりやや増、オンライン大会開催による会費収入増と普及事業関係(キャリアビジュアル)起の増収による。
- 会員は依然減少傾向。収入には通年度分を含む。
- 出版事業収入は18巻からの定価を電子化によりやや減、12巻の増収は並み。
- リーフレットの売上増、アフターワークのオンライン化はわずかに減収。
- 新型コロナウィルス感染症に配慮し、オンライン大会を開催。誌面ブースの出展料の増収。
- ショールームを講料、キャリアビジュアル2021種載監修費、書籍研究サポート出版料、JABEE校紹介チラシ、ポスター製作監修費により収入増、フィールドノート、出版物年報色紙の売り上げも回復傾向。
- 支部・部会活動なく、収入減。
- 委員会費の出振例による印刷、フォトコンテスト賞金など、会員からの寄付あり。
- 取組しを予定した各種目の収支がプラス、あるいは支出が少なかったり引当金による増減は不要とした。
- オンライン大会は実施したが、支部・部会活動等は低調になり、支出全体も予算より減。
- ①～③の各事業費の管理費(a～c)は2)管理費支出との率分比例(各事業固有の費用)。
- 出版事業費は、雑誌・パンフレットの印刷、フォトコンテスト賞金、委託費支出、誌面ブース印刷、巻込にかかるとる支出が主。
- 11) 寄付比例の管理費(a～c)を除き、書籍監修の謝金、委託費支出、誌面ブース印刷、巻込にかかるとる支出が主。
- 12) JABEE校紹介チラシ(160枚)・ポスター(100枚)制作、キャリアビジュアル2巻の作成(300部)、ショールームの諸謝金の支出。
- 13) 支部例会や連絡等のイベントは、オンライン開催により支出減。
- 14) 賞金の支出は活動なし。また、災害による出版物費用もなかった。
- 15) 海外交流事業は活動なし。また、災害による出版物費用もなかった。
- 16) 個々の科目には増減はあるが、全体としては支出も低調。
- 17) 会員からの寄付金のうち5千円以下の寄付(正書手書)普及事業引当金へ繰入、増収は定期引当金の増加分。

収 支 計 算 書

〔 自 2021年 4 月 1 日 至 2022年 3 月 31 日 〕

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	2,500	510	1,990	
特定資産運用収入	2,000	461	1,539	
会費収入	36,360,000	38,630,500	△ 2,270,500	
事業収入				
出版事業収入	7,540,000	7,422,130	117,870	
年会開催事業収入	3,110,000	3,344,000	△ 234,000	
普及事業収入	1,290,000	3,417,600	△ 2,127,600	
支部・部会等活動事業収入	720,000	133,500	586,500	
事業収入計	12,660,000	14,317,230	△ 1,657,230	
補助金・寄付金等収入	190,000	50,640,481	△ 50,450,481	
雑収入	211,000	67,703	143,297	
事業活動収入計	49,425,500	103,656,885	54,231,385	
2. 事業活動支出				
事業費支出				
出版事業費	1,630,000	16,077,817	△ 14,447,817	
年会開催事業費	3,460,000	2,578,088	881,912	
普及事業費	1,500,000	1,098,923	401,077	
支部・部会等活動事業費	891,100	355,950	535,150	
研究奨励事業費	520,000	435,960	84,040	
特別事業費	300,000	0	300,000	
事業管理費 ^(注)	16,123,000	14,209,752	1,913,248	
事業費支出計	24,424,100	34,756,490	△ 10,332,390	
管理費支出				
人件費	7,149,600	6,688,088	461,512	
旅費交通費	200,000	53,458	146,542	
事務所賃借料	2,626,100	2,626,091	9	
事務諸費	3,755,700	3,125,968	629,732	
雑費	300,000	398,606	△ 98,606	
法人税等支出	70,000	70,000	0	
管理費支出計	14,101,400	12,962,211	1,139,189	
事業活動支出計	38,525,500	47,718,701	△ 9,193,201	
事業活動収支差額額	10,900,000	55,938,184	△ 45,038,184	

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
II. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
事業準備引当預金取崩収入	1,770,000	0	1,770,000	
年会開催補助費引当預金取崩収入	1,400,000	0	1,400,000	
普及書出版引当預金取崩収入	300,000	0	300,000	
研究奨励引当預金取崩収入	300,000	0	300,000	
投資活動収入計	3,770,000	0	3,770,000	
2. 投資活動支出				
退職手当引当預金繰入支出	0	138	△ 138	
年会開催補助費引当預金繰入支出	0	132	△ 132	
普及書出版引当預金繰入支出	0	124	△ 124	
周年記念事業準備引当預金繰入支出	0	41	△ 41	
研究奨励引当預金繰入支出	0	26	△ 26	
若手育成事業引当預金繰入支出	0	50,000,000	△ 50,000,000	
投資活動支出計	0	50,000,461	△ 50,000,461	
投資活動収支差額	3,770,000	△ 50,000,461	53,770,461	
III. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	5,937,723	△ 5,937,723	
前期繰越収支差額	15,867,503	15,867,503	0	
次期繰越収支差額	15,867,503	21,805,226	△ 5,937,723	

(注) 1. 各事業ごとの「事業管理費」を、抜き出して一括して表示している。

科 目		金 額	(単位：円)
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金 (現金：168,136円、切手52,110円)	220,246		
三井住友銀行神田駅前支店(普通)1711124	(52,692,211)		
みずほ銀行神田駅前(普通)2229416	21,115,351		
三菱UFJ銀行神田駅前(普通)0108667	5,857,376		
ゆうちょ銀行徳井口店 00140-8-28067	1,171,405		
ゆうちょ銀行(普通)6297552	23,818,751		
仮払金 (労働保険科2021年度概算払いほか)	729,328		
前払金 (クラウド型会員管理システムライセンス料など)	381,480		
流動資産合計	1,435,500	54,729,437	
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
預金 (みずほ銀行神田駅前支店 (定期) 6558120-1, 2, 5, 6)	30,000,000		
基本財産合計	30,000,000		
(2) その他の固定資産			
敷金・保証金 (井桁ビル預け)	2,000,000		
特定資産	(84,636,026)		
事業準備引当預金 (みずほ銀行神田駅前支店 (定期) 6558120-9)	7,600,000		
退職手当引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-1, 6, 7)	8,132,652		
年会費補助引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-2, 一節普通)	7,719,384		
普及書出版引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-3, 一節普通)	7,236,603		
周年記念事業準備引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-10)	2,400,041		
研究奨励引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-6)	1,547,346		
若手育成事業引当預金 (三菱UFJ銀行神田駅前支店 (定期) 0022615-20, 21, 22, 23, 24, 25, 一節普通)	50,000,000		
その他の固定資産合計	86,636,026	116,636,026	
固定資産合計		171,365,463	
資産合計			
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	2,352,652		
預り金 (社保料3月分他)	898,559		
前受金 (2022年4月以降の会費)	29,743,000		
流動負債合計		32,924,211	
2. 固定負債			
引当金	(84,636,026)		
事業準備引当金	7,600,000		
退職手当引当金	8,132,652		
年会費補助引当金	7,719,384		
普及書出版引当金	7,236,603		
周年記念事業準備引当金	2,400,041		
研究奨励引当金	1,547,346		
若手育成事業引当金	50,000,000		
固定負債合計	84,636,026		
負債合計		117,560,237	
正味財産		53,805,226	

計算書類に対する注記 (2021年度)

1. 重要な会計方針

公益法人会計基準 (平成16年10月) を採用している。

1) 引当金の計上について

- ・事業準備引当金：将来的な事業、前年度未了事業、大規模災害調査・研究などのために引当。
- ・年会費補助引当金：年会事業収支の余剰金を不足が生じた場合に備え引当。
- ・退職手当引当金：期末要支給額のうち、中退共掛金を考慮した見込み額を引当。
- *中退共の掛け金積立額：今期末で6,114,050円(利子含む：2名分)。
- ・普及書出版引当金：地質学会名で出版社から刊行した出版物の著者からの印税寄付金を以後の普及書出版に備え引当。
- ・周年記念事業準備引当金：周年事業のための引当。
- *125周年記念事業準備引当金(2018年度にて事業終了)の残額を名称変更。
- ・研究奨励引当金：会員の研究奨励のために会員からの寄付金および必要に応じて引当。
- ・若手育成事業引当金：若手野外地質学者の育成事業のための引当。

2) 消費税等の会計処理

税込方式によっている。

2. 基本財産の残高状況は次のとおりである。

(単位円)				
科 目	期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
預 金	30,000,000	0	0	30,000,000
合計(基本財産)	30,000,000	0	0	30,000,000

収支計算書に対する注記 (2021年度)

1. 資金の範囲について

資金の範囲には現金、預金、仮払金、前払金、預り金、前受金を含める。

期末残高は下記に示すとおりである。

2. 次期繰り越し収支差額の内容は、次のとおりである。

(単位円)			
科 目	前期末残高	当期末残高	
現金(切手残高含)	217,107	220,246	
預 金	47,814,931	52,692,211	
仮払金	360,992	381,480	
前払金	276,430	1,435,500	
合 計	48,669,460	54,729,437	
未払金	1,497,053	2,282,652	
預り金	790,904	898,559	
前受金	30,514,000	29,743,000	
合 計	32,801,957	32,924,211	
次期繰越収支差額	15,867,503	21,805,226	

貸借対照表

2022年3月31日現在

科 目		当年度	前年度	増 減
(単位:円)				
Ⅰ 資産の部				
1. 流動資産				
現金	220,246	217,107	3,139	
預金	52,692,211	47,814,931	4,877,280	
仮払金	381,480	360,992	20,488	
前払金	1,435,500	276,430	1,159,070	
流動資産合計	54,729,437	48,669,460	6,059,977	
2. 固定資産				
(1) 基本財産				
預金	30,000,000	30,000,000	0	
基本財産合計	30,000,000	30,000,000	0	
(2) その他の固定資産				
敷金・保証金	2,000,000	2,000,000	0	
特定資産	84,636,026	34,635,565	50,000,461	
事業準備引当預金	7,600,000	7,600,000	0	
退職手当引当預金	8,132,652	8,132,514	138	
年会開催補助費引当預金	7,719,384	7,719,252	132	
普及書出版引当預金	7,236,603	7,236,479	124	
周年記念事業準備引当預金	2,400,041	2,400,000	41	
研究奨励引当預金	1,547,346	1,547,320	26	
若手育成事業引当預金	50,000,000	0	50,000,000	
その他の固定資産合計	86,636,026	36,635,565	50,000,461	
固定資産合計	116,636,026	66,635,565	50,000,461	
資産合計	171,365,463	115,305,025	56,060,438	
Ⅱ 負債の部				
1. 流動負債				
未払金	2,282,652	1,497,053	785,599	
預り金	898,559	790,904	107,655	
前受金	29,743,000	30,514,000	△ 771,000	
流動負債合計	32,924,211	32,801,957	122,254	
2. 固定負債				
引当金			0	
事業準備引当金	7,600,000	7,600,000	0	
退職手当引当金	8,132,652	8,132,514	138	
年会開催補助費引当金	7,719,384	7,719,252	132	
普及書出版引当金	7,236,603	7,236,479	124	
周年記念事業準備引当金	2,400,041	2,400,000	41	
研究奨励引当金	1,547,346	1,547,320	26	
若手育成事業引当金	50,000,000	0	50,000,000	
固定負債合計	84,636,026	34,635,565	50,000,461	
負債合計	117,560,237	67,437,522	50,122,715	
Ⅲ 正味財産の部				
1. 指定正味財産				
	0	0	0	
2. 一般正味財産				
	53,805,226	47,867,503	5,937,723	
正味財産合計	53,805,226	47,867,503	5,937,723	
負債及び正味財産合計				
	171,365,463	115,305,025	56,060,438	

正味財産増減計算書

〔 自 2021年4月1日
至 2022年3月31日 〕

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減	(単位:円)	備 考
I. 一般正味財産増減の部					
1. 経常増減の部					
(1) 経常収益					
基本財産運用収入	510	2,544	△ 2,034		
特定資産運用収入	461	1,999	△ 1,538		
会費収入	38,630,500	39,094,000	△ 463,500		
事業収入					
出版事業収入	7,422,130	9,802,050	△ 2,379,920		
年会開催事業収入	3,344,000	0	3,344,000		
普及事業収入	3,417,600	1,141,000	2,276,600		
支部・部会等活動事業収入	133,500	15,000	118,500		
事業収入計	14,317,230	10,958,050	3,359,180		
補助金・寄付金等収入	50,640,481	284,910	50,355,571		
雑収入	67,703	189,039	△ 121,336		
経常収益計	103,656,885	50,530,542	53,126,343		
(2) 経常費用					
事業費					
出版事業費	16,077,817	18,197,144	△ 2,119,327		
年会開催事業費	2,578,088	919,261	1,658,827		
普及事業費	1,098,923	1,658,320	△ 559,397		
支部・部会等活動事業費	355,950	110,857	245,093		
研究奨励事業費	435,960	410,100	25,860		
事業管理費	14,209,752	14,730,442	△ 520,690		
事業費計	34,756,490	36,026,124	△ 1,269,634		
管理費					
人件費	6,688,088	6,803,343	△ 115,255		
旅費交通費	53,458	63,211	△ 9,753		
事務所賃借料	2,626,091	2,487,876	138,215		
事務諸費	3,125,968	2,541,607	584,361		
雑費	398,606	307,146	91,460		
法人税等支出	70,000	70,000	0		
管理費計	12,962,211	12,273,183	689,028		
経常費用計	47,718,701	48,299,307	△ 580,606		
当期経常増減額	55,938,184	2,231,235	53,706,949		

監査報告書

一般社団法人日本地質学会
会長 磯崎 行雄 殿

2022 年 6 月 2 日

監事 岩部 良子 印
監事 山本 正司 印

私たち監事は、2021 年 4 月 1 日から 2022 年 3 月 31 日までの事業年度の理事の職務の執行を監査いたしました。その方法及び結果について次のとおり報告いたします。

1. 監査の方法及びその内容

各監事は、役職員等と意思疎通を図り、情報の収集及び監査の環境の整備に努めるとともに、理事会に出席し、役職員等からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類を閲覧し、業務及び財産の状況を調査いたしました。

以上の方法に基づき、当該事業年度に係る事業報告及びその付属書類について検討いたしました。さらに、会計帳簿及びこれに関する資料の調査を行い、当該事業年度に係る計算書類(貸借対照表及び正味財産増減計算書)及びその付属明細書について精査いたしました。

2. 監査意見

(1)事業報告等の監査結果

- ① 事業報告及びその付属明細書は、法令及び定款に従い、法人の状況を正しく示しているものと認めます。
 - ② 理事の職務の執行に関する不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実はありません。
 - ③ 2021 年度もコロナ禍により活動に制限を受けたが、表彰制度の改定、年会の Web 開催、ショートコースの拡充により、新しい活動形態をスタートしたことは評価する。
 - ④ 2022 年度からは、会員資格と会費の見直しに効果も含めて、新しい活動を魅力あるものとし、会員の増加を含む学会の発展に一層尽力されたい。
- (2)計算書類及びその付属明細書監査結果
- 計算書類及びその付属明細書は、法人の財産及び損益の状況をすべての重要な点において適正に示しているものと認めます。

以上

科	目	当 年 度	前 年 度	増 減	備 考
2. 経常外増減の部					
(1) 経常外収益					
経常外収益計		0	0	0	
(2) 経常外費用					
退職手当引当金繰入額		138	690	△ 552	
年会開催補助費引当金繰入額		132	607	△ 475	
普及書出版引当金繰入額		124	571	△ 447	
周年事業準備引当金繰入額		41	0	△ 41	
研究奨励引当金繰入額		26	131	△ 105	
若手育成事業引当預金繰入額		50,000,000	0	50,000,000	
経常外費用計		50,000,461	1,999	49,998,462	
当期経常外増減額		△ 50,000,461	△ 1,999	△ 49,998,462	
II. 指定正味財産増減の部					
当期一般正味財産増減額		5,937,723	2,229,236	3,708,487	
一般正味財産期首残高		47,867,503	45,638,267	2,229,236	
一般正味財産期末残高		53,805,226	47,867,503	5,937,723	
III. 正味財産期末残高					
当期指定正味財産増減額		0	0	0	
指定正味財産期首残高		0	0	0	
指定正味財産期末残高		0	0	0	
正味財産期末残高		53,805,226	47,867,503	5,937,723	

一般社団法人日本地質学会2022年度収支予算案
(2022年4月1日～2023年3月31日)

科 目	2021年度予算	2022年度予算案	前年度予算との増減
I 事業活動収入の部			
1. 事業活動収入			
1) 基本財産運用収入	2,500	500	-2,000
基本財産利息収入	2,500	500	-2,000
2) 特定資産運用収入	2,000	500	-1,500
特定資産運用収入	2,000	500	-1,500
3) 会費収入 1)	36,360,000	35,550,000	-810,000
正会員会費収入	34,000,000	33,200,000	-800,000
正会員会費収入	800,000	800,000	0
正会員学生割引会費収入	60,000	50,000	-10,000
賛助会員会費収入	1,500,000	1,500,000	0
4) 事業収入	16,831,000	13,960,400	-2,870,600
① 出版事業収入 2)	7,540,000	4,550,000	-2,990,000
雑誌販売収入	1,800,000	240,000	-1,560,000
雑誌印刷費補助金収入	1,750,000	650,000	-1,100,000
別冊収入	210,000	200,000	-10,000
広聴出版収入	20,000	20,000	0
編集収入	20,000	10,000	-10,000
リーフレット販売収入	250,000	250,000	0
パンフレット・特刊紙収入	10,000	0	-10,000
その他出版収入	50,000	20,000	-30,000
広告料収入	420,000	400,000	-20,000
広聴誌広告料	660,000	660,000	0
アイランド・アーク編集費・関連収入	2,100,000	2,000,000	-100,000
雑収入	250,000	200,000	-50,000
② 年会開催事業収入 3)	3,110,000	5,110,000	2,000,000
参加登録費収入	2,760,000	1,400,000	-1,360,000
展示収入	350,000	700,000	350,000
雑収入		10,000	10,000
③ 普及事業収入	1,290,000	2,800,000	1,510,000
普及イベント参加費収入	960,000	500,000	-460,000
普及資料寄附金収入	300,000	300,000	0
雑収入	30,000	2,000,000	1,970,000
④ 支部・部会等活動事業収入 4)	720,000	760,000	40,000
イベント参加費収入	500,000	640,000	140,000
資料寄附金収入	100,000	70,000	-30,000
食料金収入	100,000	40,000	-60,000
雑収入	20,000	10,000	-10,000
⑤ 補助金・寄付金等収入 5)	190,000	140,000	-50,000
出版事業に係る補助金・寄付金収入	100,000	50,000	-50,000
年会開催事業に係る補助金・寄付金収入	0	0	0
広聴・普及事業に係る補助金・寄付金収入	90,000	90,000	0
その他助成金収入	0	0	0
⑥ 雑収入	211,000	200,400	-10,600
受け取りの利息	200	200	0
引当金受取利息	800	200	-600
その他の収入	210,000	200,000	-10,000

科 目	2021年度予算	2022年度予算案	前年度予算との増減
⑦ 引当資産取崩し収入 6)			
事業準備引当資産取崩し収入	1,770,000	400,000	-1,370,000
年会開催引当資産取崩し収入	1,400,000	0	-1,400,000
普及書出版引当資産取崩し収入	300,000	0	-300,000
研究奨励引当資産取崩し収入	300,000	0	-300,000
【事業活動収入計】	53,195,500	49,511,400	-3,684,100
【前年度繰越金】	15,867,503	21,805,226	5,937,723
【収入合計】	69,063,003	71,316,626	2,253,623

科 目	2021年度予算	2022年度予算案	前年度予算との増減
II. 事業活動支出の部			
1) 事業費支出 7)	39,094,100	35,450,800	-3,643,300
① 出版事業 8)	28,194,200	20,560,000	-7,634,200
a 給料手当支出	4,880,000	4,880,000	0
b 賞与支給支出	1,200,000	1,200,000	0
c 退職給付金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	820,000	960,000	140,000
e 会議費支出	16,000	10,000	-6,000
f 旅費交通費支出	150,000	170,000	20,000
g 通信運搬費支出	3,800,000	3,000,000	-800,000
h 消耗什器備品費支出	423,000	180,000	-243,000
i OA機器・システム等保守管理費	832,500	892,400	59,900
j 消耗品費支出	387,000	392,000	5,000
k 光熱水料費支出	260,000	260,000	0
l 事務所賃借料支出	2,626,100	2,488,000	-138,100
m 借入金利息支出	7,000,000	500,000	-6,500,000
n 借入金元金返済支出	2,700,000	2,700,000	0
o News誌印刷製本費支出	1,250,000	1,200,000	-50,000
p 広報誌印刷製本費支出	1,200,000	1,300,000	100,000
q 印刷集費	350,000	250,000	-100,000
r 雑支出	50,000	28,000	-22,000
② 外会開催事業 9)	5,247,400	8,456,800	3,209,400
a 給料手当支出	1,220,000	1,220,000	0
b 賞与支給支出	300,000	300,000	0
c 退職給付金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	205,000	240,000	35,000
e 臨時雇賃金支出	20,000	800,000	780,000
f 旅費交通費支出	0	10,000	10,000
g 通信運搬費支出	54,000	300,000	246,000
h 消耗品費支出	0	500,000	500,000
i 消耗品費支出	24,000	100,000	76,000
j 印刷製本費支出	1,397,000	2,200,000	803,000
k 印刷製本費支出	30,000	80,000	50,000
l 会費賃借料支出	0	0	0
m 会費賃借料支出	0	1,000,000	1,000,000
n 懇親会交遊支出	0	29,400	29,400
o 保険料支出	10,000	15,000	5,000
p 委託費支出	1,800,000	1,000,000	-800,000
q 雑支出	110,000	300,000	190,000
r 遊覧実地支出	15,000	300,000	285,000

科 目	2021年度予算	2022年度予算案	前年度予算との増減
⑤普及事業 10)	3,941,400	4,271,000	329,600
a 給料手当支出	1,220,000	1,220,000	0
b 賞与支給支出	300,000	300,000	0
c 退職給付金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	205,000	240,000	35,000
e 会議費支出	8,000	2,800	-5,100
f 旅費交通費支出	25,000	20,000	-5,000
g 通信運搬費支出	170,000	538,000	368,000
h 消耗什器備品費支出	100,000	40,000	-60,000
i OVA機器・システム等保守管理費	185,000	198,000	13,000
j 消耗品費支出	86,000	120,000	34,000
k 印刷製本費支出	160,000	500,000	340,000
臨時雇賃金支出	450,000	100,000	-350,000
会議賃借料支出	10,000	10,000	0
普及イベント実施支出	30,000	70,000	40,000
広報宣伝費	160,000	160,000	0
保険料支出	10,000	10,000	0
諸謝金支出	280,000	200,000	-80,000
負担金支出	400,000	400,000	0
n 雑支出	80,000	80,000	0
⑥支部・部会等活動事業 11)	891,100	1,463,000	571,900
旅費交通費支出	200,000	230,000	30,000
通信運搬費支出	35,000	33,000	-2,000
機器賃借料支出	13,000	10,000	-3,000
消耗品費支出	20,000	50,000	30,000
印刷製本費支出	50,000	50,000	0
臨時雇い賃金	60,000	200,000	140,000
会議賃借料支出	42,000	130,000	88,000
イベント実施支出	230,000	400,000	170,000
保険料支出	20,000	40,000	20,000
諸謝金支出	170,000	240,000	70,000
負担金支出	15,000	50,000	35,000
雑支出	36,100	30,000	-6,100
⑦研究奨励事業 12)	520,000	400,000	-120,000
賞与支出	300,000	0	-300,000
雑支出	220,000	400,000	180,000
⑧特別事業 13)	300,000	300,000	0
国際交流等事業費	200,000	200,000	0
緊急災害調査事業費	100,000	100,000	0
2) 管理費 14)	14,031,400	13,990,600	-40,800
a 給料手当支出	4,880,000	4,880,000	0
b 賞与支給支出	1,200,000	1,200,000	0
c 退職給付金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	820,000	960,000	140,000
e 会議費支出	56,000	50,000	-6,000
f 旅費交通費支出	200,000	160,000	-40,000
g 通信運搬費支出	850,000	550,000	-300,000
h 消耗什器備品費支出	423,000	180,000	-243,000
i OVA機器・システム等保守管理費	832,500	1,333,000	500,500
j 消耗品費支出	387,000	392,000	5,000
k 印刷製本費支出	250,000	150,000	-100,000
l 光熱水料費支出	260,000	260,000	0
m 事務所賃借料支出	2,626,100	2,488,000	-138,100

科 目	2021年度予算	2022年度予算案	前年度予算との増減
諸謝金支出	396,000	396,000	0
租税公課支出	1,200	42,000	40,800
負担金支出	300,000	300,000	0
n 雑支出	300,000	400,000	100,000
3) 法人税等支出	70,000	70,000	0
4) 引当預金繰入支出	0	0	0
繰入支出	0	0	0
【事業活動支出計】	53,195,500	49,511,400	-3,684,100
【事業活動収支差額】	0	0	0
次期繰越収支差額	15,867,503	21,805,226	5,937,723

<注>2022年度予算案

- 1) 会費は昨年減少傾向、前年よりやや減額。
- 2) 親睦旅行は感染症予防対策により、オンライン化のため、旅行費負担金部分も減額。
- 3) 年会費は、イベント開催部会（国土・環境・防災・防災・防災）等、加賀支部、東京支部への参加費が、ほぼ、前年度と同額。
- 4) 各支部、部会からの予算案を計上。
- 5) 学術活動に必要となる印刷出版の発行収入、フロンティア出版費など。
- 6) 目的に記した引当預金繰入の取崩しを予定。
- 7) 1)～5)の各事業費の管理費は、(a)は、(b)は、(c)は、(d)は、(e)は、(f)は、(g)は、(h)は、(i)は、(j)は、(k)は、(l)は、(m)は、(n)は、(o)は、(p)は、(q)は、(r)は、(s)は、(t)は、(u)は、(v)は、(w)は、(x)は、(y)は、(z)は、(aa)は、(ab)は、(ac)は、(ad)は、(ae)は、(af)は、(ag)は、(ah)は、(ai)は、(aj)は、(ak)は、(al)は、(am)は、(an)は、(ao)は、(ap)は、(aq)は、(ar)は、(as)は、(at)は、(au)は、(av)は、(aw)は、(ax)は、(ay)は、(az)は、(ba)は、(bb)は、(bc)は、(bd)は、(be)は、(bf)は、(bg)は、(bh)は、(bi)は、(bj)は、(bk)は、(bl)は、(bm)は、(bn)は、(bo)は、(bp)は、(bq)は、(br)は、(bs)は、(bt)は、(bu)は、(bv)は、(bw)は、(bx)は、(by)は、(bz)は、(ca)は、(cb)は、(cc)は、(cd)は、(ce)は、(cf)は、(cg)は、(ch)は、(ci)は、(cj)は、(ck)は、(cl)は、(cm)は、(cn)は、(co)は、(cp)は、(cq)は、(cr)は、(cs)は、(ct)は、(cu)は、(cv)は、(cw)は、(cx)は、(cy)は、(cz)は、(da)は、(db)は、(dc)は、(dd)は、(de)は、(df)は、(dg)は、(dh)は、(di)は、(dj)は、(dk)は、(dl)は、(dm)は、(dn)は、(do)は、(dp)は、(dq)は、(dr)は、(ds)は、(dt)は、(du)は、(dv)は、(dw)は、(dx)は、(dy)は、(dz)は、(ea)は、(eb)は、(ec)は、(ed)は、(ee)は、(ef)は、(eg)は、(eh)は、(ei)は、(ej)は、(ek)は、(el)は、(em)は、(en)は、(eo)は、(ep)は、(eq)は、(er)は、(es)は、(et)は、(eu)は、(ev)は、(ew)は、(ex)は、(ey)は、(ez)は、(fa)は、(fb)は、(fc)は、(fd)は、(fe)は、(ff)は、(fg)は、(fh)は、(fi)は、(fj)は、(fk)は、(fl)は、(fm)は、(fn)は、(fo)は、(fp)は、(fq)は、(fr)は、(fs)は、(ft)は、(fu)は、(fv)は、(fw)は、(fx)は、(fy)は、(fz)は、(ga)は、(gb)は、(gc)は、(gd)は、(ge)は、(gf)は、(gg)は、(gh)は、(gi)は、(gj)は、(gk)は、(gl)は、(gm)は、(gn)は、(go)は、(gp)は、(gq)は、(gr)は、(gs)は、(gt)は、(gu)は、(gv)は、(gw)は、(gx)は、(gy)は、(gz)は、(ha)は、(hb)は、(hc)は、(hd)は、(he)は、(hf)は、(hg)は、(hh)は、(hi)は、(hj)は、(hk)は、(hl)は、(hm)は、(hn)は、(ho)は、(hp)は、(hq)は、(hr)は、(hs)は、(ht)は、(hu)は、(hv)は、(hw)は、(hx)は、(hy)は、(hz)は、(ia)は、(ib)は、(ic)は、(id)は、(ie)は、(if)は、(ig)は、(ih)は、(ii)は、(ij)は、(ik)は、(il)は、(im)は、(in)は、(io)は、(ip)は、(iq)は、(ir)は、(is)は、(it)は、(iu)は、(iv)は、(iw)は、(ix)は、(iy)は、(iz)は、(ja)は、(jb)は、(jc)は、(jd)は、(je)は、(jf)は、(jg)は、(jh)は、(ji)は、(jj)は、(jk)は、(jl)は、(jm)は、(jn)は、(jo)は、(jp)は、(jq)は、(jr)は、(js)は、(jt)は、(ju)は、(jv)は、(jw)は、(jx)は、(jy)は、(jz)は、(ka)は、(kb)は、(kc)は、(kd)は、(ke)は、(kf)は、(kg)は、(kh)は、(ki)は、(kj)は、(kk)は、(kl)は、(km)は、(kn)は、(ko)は、(kp)は、(kq)は、(kr)は、(ks)は、(kt)は、(ku)は、(kv)は、(kw)は、(kx)は、(ky)は、(kz)は、(la)は、(lb)は、(lc)は、(ld)は、(le)は、(lf)は、(lg)は、(lh)は、(li)は、(lj)は、(lk)は、(ll)は、(lm)は、(ln)は、(lo)は、(lp)は、(lq)は、(lr)は、(ls)は、(lt)は、(lu)は、(lv)は、(lw)は、(lx)は、(ly)は、(lz)は、(ma)は、(mb)は、(mc)は、(md)は、(me)は、(mf)は、(mg)は、(mh)は、(mi)は、(mj)は、(mk)は、(ml)は、(mm)は、(mn)は、(mo)は、(mp)は、(mq)は、(mr)は、(ms)は、(mt)は、(mu)は、(mv)は、(mw)は、(mx)は、(my)は、(mz)は、(na)は、(nb)は、(nc)は、(nd)は、(ne)は、(nf)は、(ng)は、(nh)は、(ni)は、(nj)は、(nk)は、(nl)は、(nm)は、(nn)は、(no)は、(np)は、(nq)は、(nr)は、(ns)は、(nt)は、(nu)は、(nv)は、(nw)は、(nx)は、(ny)は、(nz)は、(oa)は、(ob)は、(oc)は、(od)は、(oe)は、(of)は、(og)は、(oh)は、(oi)は、(oj)は、(ok)は、(ol)は、(om)は、(on)は、(oo)は、(op)は、(oq)は、(or)は、(os)は、(ot)は、(ou)は、(ov)は、(ow)は、(ox)は、(oy)は、(oz)は、(pa)は、(pb)は、(pc)は、(pd)は、(pe)は、(pf)は、(pg)は、(ph)は、(pi)は、(pj)は、(pk)は、(pl)は、(pm)は、(pn)は、(po)は、(pp)は、(pq)は、(pr)は、(ps)は、(pt)は、(pu)は、(pv)は、(pw)は、(px)は、(py)は、(pz)は、(qa)は、(qb)は、(qc)は、(qd)は、(qe)は、(qf)は、(qg)は、(qh)は、(qi)は、(qj)は、(qk)は、(ql)は、(qm)は、(qn)は、(qo)は、(qp)は、(qq)は、(qr)は、(qs)は、(qt)は、(qu)は、(qv)は、(qw)は、(qx)は、(qy)は、(qz)は、(ra)は、(rb)は、(rc)は、(rd)は、(re)は、(rf)は、(rg)は、(rh)は、(ri)は、(rj)は、(rk)は、(rl)は、(rm)は、(rn)は、(ro)は、(rp)は、(rq)は、(rr)は、(rs)は、(rt)は、(ru)は、(rv)は、(rw)は、(rx)は、(ry)は、(rz)は、(sa)は、(sb)は、(sc)は、(sd)は、(se)は、(sf)は、(sg)は、(sh)は、(si)は、(sj)は、(sk)は、(sl)は、(sm)は、(sn)は、(so)は、(sp)は、(sq)は、(sr)は、(ss)は、(st)は、(su)は、(sv)は、(sw)は、(sx)は、(sy)は、(sz)は、(ta)は、(tb)は、(tc)は、(td)は、(te)は、(tf)は、(tg)は、(th)は、(ti)は、(tj)は、(tk)は、(tl)は、(tm)は、(tn)は、(to)は、(tp)は、(tq)は、(tr)は、(ts)は、(tt)は、(tu)は、(tv)は、(tw)は、(tx)は、(ty)は、(tz)は、(ua)は、(ub)は、(uc)は、(ud)は、(ue)は、(uf)は、(ug)は、(uh)は、(ui)は、(uj)は、(uk)は、(ul)は、(um)は、(un)は、(uo)は、(up)は、(uq)は、(ur)は、(us)は、(ut)は、(uu)は、(uv)は、(uw)は、(ux)は、(uy)は、(uz)は、(va)は、(vb)は、(vc)は、(vd)は、(ve)は、(vf)は、(vg)は、(vh)は、(vi)は、(vj)は、(vk)は、(vl)は、(vm)は、(vn)は、(vo)は、(vp)は、(vq)は、(vr)は、(vs)は、(vt)は、(vu)は、(vv)は、(vw)は、(vx)は、(vy)は、(vz)は、(wa)は、(wb)は、(wc)は、(wd)は、(we)は、(wf)は、(wg)は、(wh)は、(wi)は、(wj)は、(wk)は、(wl)は、(wm)は、(wn)は、(wo)は、(wp)は、(wq)は、(wr)は、(ws)は、(wt)は、(wu)は、(wv)は、(ww)は、(wx)は、(wy)は、(wz)は、(xa)は、(xb)は、(xc)は、(xd)は、(xe)は、(xf)は、(xg)は、(xh)は、(xi)は、(xj)は、(xk)は、(xl)は、(xm)は、(xn)は、(xo)は、(xp)は、(xq)は、(xr)は、(xs)は、(xt)は、(xu)は、(xv)は、(xw)は、(xx)は、(xy)は、(xz)は、(ya)は、(yb)は、(yc)は、(yd)は、(ye)は、(yf)は、(yg)は、(yh)は、(yi)は、(yj)は、(yk)は、(yl)は、(ym)は、(yn)は、(yo)は、(yp)は、(yq)は、(yr)は、(ys)は、(yt)は、(yu)は、(yv)は、(yw)は、(yx)は、(yy)は、(yz)は、(za)は、(zb)は、(zc)は、(zd)は、(ze)は、(zf)は、(zg)は、(zh)は、(zi)は、(zj)は、(zk)は、(zl)は、(zm)は、(zn)は、(zo)は、(zp)は、(zq)は、(zr)は、(zs)は、(zt)は、(zu)は、(zv)は、(zw)は、(zx)は、(zy)は、(zz)は、

永年会員（50年会員）顕彰44名 1972年入会



伊藤谷生



今岡照喜



大竹敏則



香川重善



栗田光雄



河野忠臣



紺谷吉弘



近藤直門



鈴木達郎



須藤 茂



田北 廣



津村善博



徳橋秀一



西村 昭



西脇二一



長谷川四郎



東野外志男



松本 良



丸山茂徳



吉田克史

池田保夫、石井久夫、井上正澄、宇野泰光、大橋俊夫、狩野謙一、小出和男、小林武彦、小宮 学（2022/4/29逝去）、柴田秀道、白石和行、傍島武師、中屋志津男、成尾英仁、西田高久、林 隆夫、原田憲一、平社定夫、牧本 博、宮城晴耕、山崎晴雄、山崎安正、湯浅真人、吉田光廣

（順不同、敬称略）

日本地質学会 2022年度 名誉会員推薦文

日本地質学会名誉会員推薦委員会
委員長 佐々木和彦

2022年度名誉会員として3名を推薦いたしました。推薦理由は以下の通りです。



板谷 徹丸 会員

1946年9月4日生、75歳
特定非営利活動法人 地球年代学ネットワーク
理事長

板谷徹丸会員は、1974年に早稲田大学を卒業後、1976年に金沢大学大学院修士課程を修了、1979年に東北大学大学院博士課程を修了して理学博士を得た。その後、東北大学で研究生と日本学術振興会奨励研究員を経たのち、1981年に岡山理科大学藤山研究所（のちの自然科学研究所）講師に就任し、1987年助教授、1998年教授を経て、2016年の退職まで岡山を拠点に約40年間、研究と教育に従事した。

板谷会員のこれまでの研究は多岐にわたり、三波川変成岩等においてFe-Ti-O-S系鉱物の組成共生関係を明らかにし、不透明鉱物に着目した流体相の挙動を論じた。また、温度上昇に伴う高圧および接触変成岩中の炭質物の結晶構造・化学組成・反射率を検討し、炭質物の石墨化の傾向を明らかにした。

岡山理科大学では、共同研究者らとともにK-Ar年代測定用の希ガス同位体質量分析計を製作するとともに、同機器を用いて地質・岩石・鉱床の年代学的研究を開始した。その結果、年代測定の精度と頻度を向上させ、国内外の様々な地質事象の解明に貢献した。代表例としては、西南日本の古生代・中生代の高圧変成帯と弱変成付加体についての年代測定マッピングによって、地質構造単元の境界を明らかにしたことが挙げられ、K-Ar年代測定による日本の新しい地体構造論の確立に大きな役割を果たした。また、分析技術を向上させることにより、第四紀火山岩のK-Ar年代測定を可能にして、時間分解能を大きく向上させた。これらの業績が認められ、1999年には日本地質学会賞を、2011年には日本鉱物科学会賞をそれぞれ受賞した。

板谷会員は2014年に特定非営利活動法人地球年代学ネットワークを立ち上げ、岡山理科大学退職後に同法人の理事長として岡山県赤磐市と研究教育連携協定を締結して地球史研究所を設立した。同法人では、地球年代学に携わる国内外の研究者と技術者が協働して先端技術の研究開発を行いながら、防災と資源開発等の社会的な課題に貢献できる次世代の人材育成を目指している。また、地球史研究所では人類紀精密年代測定法の開発研究の他、地質試料の所蔵とアーカイブ化などが進められており、板谷会員はそれぞれの組織に

において中心的役割を果たしている。

日本地質学会においては、1996年から2002年および2004年の約7年間評議員を、1996年から1999年まで各賞選考委員会委員をそれぞれ務め、2000年には各賞検討委員会委員長の重責を担っている。

以上のように、板谷徹丸会員の地質学における学術研究、教育、普及、そして日本地質学会の運営への多大な貢献は、日本地質学会の名誉会員として相応しいものと判断し、ここに推薦する。

以上



平 朝彦 会員

1946年5月30日生、76歳
東京大学名誉教授、独立行政法人海洋研究開発機構 顧問、東海大学海洋研究所 所長

平朝彦会員は、1970年に東北大学理学部を卒業し、1971年にテキサス大学ダラス校地球科学科に進学後、1976年に同大学よりPh.D.を授与された。1977年に高知大学文理学部助手、1978年に同大学理学部の助教授、1985年に東京大学海洋研究所の教授にそれぞれ就任した。2002年に独立行政法人海洋研究開発機構地球深部探査センターの初代センター長に就任し、2007年に東京大学名誉教授の称号を授与された。2007年に海洋研究開発機構の理事に就任し、2012年から2019年までの約7年間同機構の理事長を務めた。同機構の理事長を退任後は、顧問に就任し、2020年から東海大学海洋研究所所長にも就任した。

平会員は、高知大学在任中に四万十帯が海洋プレート上の枕状溶岩・遠洋性堆積物および海溝充填堆積物の付加により形成された地質帯であることを明らかにし、日本列島における付加体研究を先導した。東京大学赴任後は、白鳳丸などを用い、四国沖トラフ底の乱泥流堆積物が主に富士川起源であることを明らかにして、南海トラフの海洋地質学的研究を推進させた。

1994年から国際深海掘削計画（ODP）理事会委員を務め、海洋研究開発機構に赴任後は地球深部探査船「ちきゅう」の建造・運用に尽力するとともに、統合国際深海掘削計画（IODP）の推進など世界の深海掘削研究に大きく貢献した。この功績が認められ、2014年に米国地球物理学連合では、平会員の名前を冠した「平朝彦国際深海科学掘削研究賞」が創設された。

平会員は国内外での学術活動に関する大きな貢献により、1974年にアメリカ地質学会ペンローズ研究奨励賞、2006年に日本地質学会賞、2007年に「プレート沈み込み帯における付加作用の研究」により日本学士院賞をそれぞれ受賞した。また、2018年に日仏の学術協力などの功績によりフランス政府レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章した。さらに、1994年にアメリカ地質学会フェロ

一、1996年にフランス科学アカデミー招待教授、1997年に文部省学術審議会委員、2002年に国際リソフェアプログラム会長を歴任した。

日本地質学会においては、1986年から1994年および1997年から1999年までの約10年間評議員を、2000年から2002年に副会長を、そして2002年から2004年に会長をそれぞれ務め、本学会活動に多大な貢献をしてきた。

以上のように、平朝彦会員の地質学における学術研究、教育、普及、そして日本地質学会の運営への多大な貢献は、日本地質学会の名誉会員として相応しいものと判断し、ここに推薦する。

以上



八尾 昭 会員

1944年12月14日生、77歳
大阪市立大学名誉教授

八尾 昭会員は、1967年に奈良教育大学教育学部を卒業後、1969年に大阪市立大学大学院理学研究科修士課程（地質学専攻）を修了し、1972年に同博士課程を単位取得退学後、1973年に同大学理学部助手に就任した。その後、講師、助教授を経て1993年に教授に昇任したのち、2008年に同大学を定年退職した。この間、1983年に大阪市立大学より理学博士の学位を取得し、2008年には大阪市立大学の名誉教授を授与された。

八尾会員は、主に西南日本の基盤地質体の野外調査と放散虫生層序学の研究を主軸にして中・古生界の層序・構造の解明に尽力した。特に1960年代末から1980年代前半にかけて、秩父帯や丹波・美濃・足尾帯において三疊系・ジュラ系放散虫生層序の大綱を打ち立て、かつていわゆる古生代後期の地向斜堆積物とされた地層の多くが、メランジュやスラストパイル構造などを呈するジュラ紀付加体であることをいち早く解明した。これらの研究成果は、日本列島における中・古生代の地史を大きく書き換えた「放散虫革命」に重要な役割を果たすこととなった。

1980年代後半から2008年までの間は、日本だけでなく中国の中・古生界を対象にした共同研究などにより、多くの生層序学的成果をあげた。2008年以降は複数の大学で非常勤講師を務め、地学教育関係者や市民を対象とする講演を行うとともに、国内や中国をはじめとする海外において地質巡検を実施するなど、地質学教育および普及に尽力してきた。

八尾会員は、1994年から1999年に日本学術会議地質学研究連絡委員会委員を、2000年から2002年に同古生物学研究連絡委員会委員をそれぞれ務め、地質関連学系の発展に携わった。さらに、2003年から2009年に日本地質学会編日本地方地質誌『近畿地方』の編集委員長を、1991年から1994年に国際放散虫研究者会議（INTERRAD）議長をそれぞれ務めるなど、国内外における地質学の発展および普

及に尽力した。また、2011年からは奈良県自然環境保全審議会委員・温泉部会長に就任して、地方行政に貢献している。

日本地質学会においては、1973年から1989年に関西支部幹事を、1996年から1998年に同支部長を、2006年から2008年に近畿支部長をそれぞれ務めた。また、1987年から1996年に地質学雑誌編集委員会委員を、1991年から1998年の約7年間に評議員をそれぞれ務め、学会運営に大きく貢献した。

以上のように、八尾 昭会員の地質学における学術研究、教育、普及、そして日本地質学会の運営への多大な貢献は、日本地質学会の名誉会員として相応しいものと判断し、ここに推薦する。

以上

2022年度 日本地質学会各賞授賞理由

各賞選考委員会委員長 西 弘嗣

2022年度各賞の授賞候補者、授賞候補論文および授賞理由について、下記の通り報告いたします。

日本地質学会功績賞（1件）

授賞者：高橋正樹会員（日本大学）

対象研究テーマ：沈み込み帯のマグマ活動研究を通じた地質学の普及と社会的貢献

高橋正樹会員は、一貫してプレート沈み込みにより生じるマグマ活動の研究を行い、多彩な功績を挙げると共に、多くの書籍により専門家と非専門家の橋渡しを行う重要な役割を果たされた地質学者である。

高橋会員の研究は、豊富かつ精緻なデータの収集を基本とし、火成岩体の形成過程や分類に関する新たな提案と考え方の再整理という独自の研究手法によるもので、高く評価されるべきものである。主要な研究は、次の5つのテーマに集約される。1）島弧地殻のテクトニクスと火山形成に関する研究、2）九州、大崩山火山深成複合岩体の形成機構、花崗岩系列の分類意義、東アジアの花崗岩帯のコンパイルなど、弧花崗岩に関する一連の研究、3）火口近傍の堆積物に関するプロキシマル火山地質学、4）「日本の第四紀火山カタログ」の作成や火山形成の確率論的将来予測などに基づく高レベル放射性廃棄物地層処分や地質環境長期安定性の研究、そして5）複数の火山ハザードマップ作成委員会への参画や超巨大噴火の火山災害問題についての火山災害研究である。

これらの成果をもとに、同会員は多数の教科書・参考書・一般向け入門書を執筆された。中でも「島弧・マグマ・テクトニクス」、「花崗岩が語る地球の進化」、「破局噴火」、「火山のしくみ パーフェクトガイド」などの単著は、学部・大学院教育における質の高い教科書・参考書として広く利用され、さらに非専門家に対する地質学の啓蒙に大きく貢献している。大きな社会問題である地層処分や火山災害について「地質学は、国民に科学的・合理的判断の材料を提供する義務がある」とする同会員の考えは、日本地質学会会員が共有すべきものである。同会員は、地質学会の各種委員を永く務められ、「地質学会News誌」の創刊と初期編集への尽力、普及教育事業部会長としてリーフレットの発刊、地質環境長期安定性検討委員会の立ち上げなど、大きな貢献をされた。

学術研究のみならず、公教育および普及活動においても本学会に多大な貢献をされた高橋会員は、地質学会功績賞の初代受賞者として最もふさわしい会員であると判断される。

日本地質学会H.E. ナウマン賞 (1件)



授賞者：片山郁夫会員
(広島大学大学院先進理工系科学研究科)
対象研究テーマ：地球内部での水循環に関する研究

片山郁夫会員は、沈み込み帯のダイナミクスと水の役割および海洋底への水の浸透と地殻構造の研究によって、地球内部のグローバルな水循環やマントルダイナミクスの解明に顕著な貢献をしており、国際的にも高い評価を得ている。

沈み込み帯での水循環に関する研究では、マントルの加水反応や、それにより形成される蛇紋岩の地震波特性や浸透率を調べることで、沈み込み帯での水の移動や分布が、温度構造に加えプレートの変形とも大きく関わっていることを提案した。また、加水作用によって形成される粘土鉱物や蛇紋石の摩擦特性やレオロジー特性を調べ、スロー地震を含めた多様な地震活動と沈み込み帯での水循環の関連性を指摘した。片山会員による、流体の動的な振る舞いや岩石の粘弾性特性への水の役割の解明は、沈み込み帯で見られる地震・火成活動の多様性を理解する上での新たな視点として大変注目されている。

海洋底での水循環に関する研究では、オマーン・オフィオライトの陸上掘削プロジェクトに参加し、オフィオライト構成岩石の地震波速度や電気伝導度などの物理特性を系統的に測定することで、海洋底での水循環が主に扁平なクラックに支配されることを明らかにした。海洋底では地球物理観測が実施されているが、地震波速度と電気伝導度は流体分布や連結度に対し異なる応答性を示すことから、片山会員らが進める物性の同時測定は海洋底での物質科学的な理解をさらに進めると期待される。また、計画中のマントル掘削へ向け、地殻とマントル物質の物理特性の違いや水循環の流路として働くクラックの形成プロセスに関する研究にも取り組んでいる。

片山会員は、上記の研究テーマなどについてこれまでに100編以上（うち筆頭論文33編）の査読付き論文を発表し、国内外の学界に大きなインパクトを与えてきた。同会員が、地質学のみならず地球惑星科学の幅広い分野に関心をもち、野外・実験・観測を融合させた独自の研究分野と手法を開拓してきた点は特筆される。このような同会員のこれまでの業績および今後の更なる発展への期待は、ナウマン賞に値するものである。

日本地質学会小澤儀明賞 (1件)



授賞者：石輪健樹会員
(国立極地研究所)
対象研究テーマ：海水準変動復元と固体地球モデリングに基づく南極氷床変動メカニズム解明の研究

石輪健樹会員は、「海水準変動の復元と固体地球モデリングに基づく南極氷床変動メカニズム」に関する研究を行い、特に、全球的な気候変動にリンクした南極を含む氷床の変動メカニズムの分野において特筆すべき成果をあげた。同会員は、研究の第一段階として低緯度域であるオーストラリア周辺と高緯度域である南極大陸の両方を対象とする野外調査を行い、第二段階として海成・湖成堆積物を採取して、これらの試料を高精度で分析し、そして第三段階として固体地球応答モデリングを駆使して高精度の海水準変動を復元した。

石輪会員は、博士過程では、大氷床から遠く離れた熱帯地域に位置するオーストラリア北部ボナパルト湾にて海底堆積物を採取し、その多くの試料について高精度の放射性炭素年代の測定を行った。これらのデータを地質学的知見とあわせて解析し、最終氷期最盛期（約2万年前）を含む2万9千年前から1万4千年前の期間を対象に海面変動および氷床変動を解析した。その結果、この期間に大陸氷床は、従来考えられていたような単調な1段階で拡大したのではなく、2段に分かれて発達したことを解明し、同分野で注目をあびた。

石輪会員は日本南極地域観測隊（第61次、2019年）に参加し、地形調査チームのリーダーとして、観測隊史上初のボートを用いた浅海域海底調査を含む、約2ヶ月間の極域野外調査・海洋観測を成功に導いた。南極氷床は全球的気候変動を理解する上で重要であるが、その変動メカニズムは十分に解明されてこなかった。さらに、南極氷床の融解は将来の気候変動予測においても大きな不確定要素で、氷床の発達と融解の評価は緊急の課題となっている。南極周辺の相対的氷床水準は巨大氷床の荷重を反映して変動するため、固体地球応答モデルを用いた海水準の補正が必須となる。同会員は固体地球応答モデル駆使した適切な補正を通して、南極の沿岸域における海水準変動に関わる地質記録を精度高く復元した。その結果、最終氷期最盛期の数万年前より南極氷床の一部が大きく成長した可能性を初めて明らかにした。非常に難しい課題である氷床の量的な推定について、本研究は最終氷期以降の南極氷床の変動史に定量的な制約を与えた。この成果はこの分野の研究に重要な進歩をもたらした。

このように石輪会員は、海水準変動を軸として、低緯度域と高緯度域における氷期・間氷期の環境変動を地球規模で考察するという独自の視点を有し、地質学的手法を用いて研究を推進してきた。今後、これらの研究を

南極周辺の海域での堆積物の研究に発展させ、全球的な気候変動の研究へと、自身の研究分野を幅広く展開するビジョンを有している。その独創的な研究手法と実地調査に基づく全球的気候変動に関する卓越した研究成果、そしてその将来性は、小澤儀明賞に値するものである。

日本地質学会棚山雅則賞 (1/2件)



授賞者：岡崎啓史会員
(海洋研究開発機構)
対象研究テーマ：高温高压変形実験に基づく岩石レオロジー研究

岡崎啓史会員は、高温高压変形実験を軸に、プレート沈み込み帯における岩石レオロジーの研究において目覚ましい成果を挙げてきた。研究成果の多くは、既存の実験技術によるものではなく、実験装置を自ら改良し、新しい手法を提案し従来の問題点を克服していることは特筆すべき点である。岡崎会員のこれまでの研究開発成果の中でも以下の3点は特筆される。

まず、蛇紋岩の熱水環境下における摩擦実験によって、蛇紋岩の脱水温度付近でスロースティックスリップが起こることを初めて示した業績がある。これはマントルウェッジの温度条件下において、剪断帯での蛇紋岩の局所的な脱水がスロー地震の発生に重要な役割を果たすことを示唆する発見であった。さらに中深発地震発生に密接に関わっていると考えられるローソナイトを用いた高温高压下での破壊実験により、ローソナイトの脱水反応に伴って微小なアコースティックエミッション(AE)およびスティックスリップが生じることを明らかにした。また、地震発生帯深部における含水断層帯のレオロジーを決めるために、試料中の水の量を系統的に変えて高温高压変形実験を行い、6%の水によって強度が半減することを解明した。この研究によって、粒間に存在する水の量が断層レオロジーに大きな影響を与えることが明らかとなった。

岡崎会員は、ガス圧式と固体圧変形試験機による研究開発のみならず、最近では回転式ダイヤモンドアンビル装置を用いた放射光超高压超大歪み変形実験にも取り組みはじめ、地殻表層から下部マントルに至るまでの岩石レオロジーの統一的理解を目指している。また、ICDPオマーンオフィオライト掘削計画へも参加し、掘削コア試料のCTスキャンデータを利用した鉱物組成解析などの変形実験以外の研究も進めている。

以上のように、同会員はプレート沈み込み帯における岩石レオロジー解明に顕著な貢献があり、今後も構造地質を含めた地質学研究を国際的に牽引していくことが嘱望される。岡崎会員の業績および今後の活躍への期待は、棚山雅則賞に値するものである。

日本地質学会欄山雅則賞 (2/2件)



授賞者：宇野正起会員
(東北大学大学院環境科学研究所)
対象研究テーマ：プレート収束帯における動的な流体活動

宇野正起会員は、「プレート収束帯における動的な流体活動」を明らかにするために、相平衡岩石学と地球化学、水理学を融合した独自の手法を開拓し、野外調査・反応輸送解析・水熱反応実験のアプローチから特筆すべき成果を挙げてきた。

従来の変成岩岩石学は、相平衡に基づく温度・圧力といった示強性変数の推定が主流であり、元素移動解析に基づく示量性変数の推定や広域的なマスマバランスを制約しようとする研究はほとんど行われてこなかった。宇野会員は、三波川変成帯の苦鉄質片岩について、詳細な全岩化学組成分析を行い、後退変成反応の進行度と対応させることで、流体が関与した大規模な元素移動が起きたことを示した。最近では、変成岩の元素輸送解析に機械学習の方法論を導入し、決定木を用いた玄武岩質変成岩の原岩化学組成の推定と、元素移動履歴を制約する新手法を開発している。

また同会員は、南極セル・ロンダーネ山地では花崗岩質脈の反応帯を用いた元素移動解析を行い、地殻にメルトから大量の過剰水が供給されることを示した。さらに、鉱物脈反応帯における燐灰石中の塩素濃度プロファイルに着目し、反応輸送モデルを適用することにより、流体流入継続時間が約10時間と非常に短いことを示した。この反応輸送モデルと相平衡解析、水理学解析を組合せることで、流体圧勾配や地殻透水性など、従来は見積もることが困難であった高温高压下での動的な流体流動の物性を、天然岩石から実証的に制約する方法論を確立した。短時間の流体活動を岩石学的に検出できることは、岩石学の枠組みを大きく広げるものであり、地質学的現象と地球物理学的観測を同時スケールで対比可能とする、新たな岩石学の展開と可能性を示した。

さらに北米西岸フランシスカン帯の蛇紋岩についてフィールド調査を展開し、サンアンドレアス断層直上の蛇紋岩体の詳細な反応履歴を明らかにした。蛇紋岩化反応をはじめとした体積膨張反応が引き起こす反応誘起応力に着目し、反応時の応力発生や亀裂生成、透水性変化を計測する独自の水熱反応実験装置を開発した。その結果、体積膨張する加水反応において破壊が生じ、流体流れと反応が自己加速化することを、世界で初めて実験的に示した。さらに無次元化解析から、亀裂生成や空隙閉塞などの力学・水理学応答の多様性を説明するパラメータを提唱するなど、幅広く研究を展開している。

以上のように、宇野会員は、従来の岩石学の枠にとらわれず、独創的なアイデアと研究手法に基づいて研究を進めており、これまで

に蓄積した成果と大いに期待されるその将来性は、欄山雅則賞に値するものである。

Island Arc Award (1件)



対象論文：Isozaki, Yukio, 2019, A visage of early Paleozoic Japan: Geotectonic and paleobiogeographical significance of Greater South China. *Island Arc*,

28: e12296.

Tectonic evolution of Great South China (GSC) during early Paleozoic is fundamental for considering the origin of the Japanese Islands, but has not yet been fully understood. Nevertheless, zircon U-Pb dates of Paleozoic granitoids and sandstones have provided critical information on the continental margin along which proto-Japan began to grow. Based on currently available dataset of the dating as well as paleogeographic data, Isozaki (2019) reconstructed the early Paleozoic evolution of Japan. He suggested that the tectonic setting changed from a passive continental margin (Stage I) to an active margin (Stage II) during Cambrian when the oldest arc granitoid, high-P/T blueschist, and clastic sediments were formed. The predominant occurrence of Neoproterozoic zircons in Paleozoic rocks indicates that the relevant continental block was a part of South China, probably forming a northeastern segment of GSC. He reconstructed that GSC was probably twice as large as the present conterminous South China. In addition, he summarized the faunal characteristics of the Permian marine fauna in Japan, which are in good accordance with the relative position of GSC with respect to the North China block during the late Paleozoic. This extensive summary and novel reconstruction provided clear pictures of the geological history of the Japanese Islands and prospective for future researches for the readers of *Island Arc*. Therefore, we decided that the paper by Isozaki is suitable for Island Arc Award in 2021.

日本地質学会論文賞 (1件)



対象論文：Takashima, R., Hoshi, H., Wada, Y., Shinjoe, H., 2021. Identification of the source caldera for the Middle Miocene ash-flow tuffs in the Kii Peninsula based on apatite trace-element composition. *Island Arc*, 30, e13039. doi: 10.1111/iar.12404

紀伊半島に分布する中新世カルデラ群（大峰、大台、熊野北、熊野カルデラ）の火砕岩類は、鉱物組み合わせや全岩の主成分・微量元素組成が類似していることから、各カルデラの特徴を区別することが困難であった。著者らは、本論文でこれらのカルデラの火砕岩類に含まれるアパタイトの微量元素組成を明らかにし、各カルデラの火砕岩類の特徴を識別可能であることを示すとともに、噴出相である火砕流堆積物とカルデラ地下の火砕岩脈を対比することが可能であることを示した。また、紀伊半島中央部に広く分布する中新統室生火砕流堆積物と石仏凝灰岩のアパタイト微量元素組成も検討し、その組成が大台カルデラのものとは一致することを明らかにした。アパタイトは埋没続成や溶結の影響をほとんど受けないため、本研究で示されたアパタイト微量元素組成に基づく方法は、従来の一般的なテフクロロジーの手法を適用することが困難な変質火砕物や先新第三紀火砕岩の層序対比に大きな進展をもたらすことが期待される。本論文は今後多くの研究に参照されたいと考えられ高く評価される。以上の理由から、本論文に日本地質学会論文賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞 (1/2件)



授賞者：中西 諒 会員
(東京大学大気海洋研究所)

対象論文：中西 諒, 岡村 聡, 2019, 1640年北海道駒ヶ岳噴火による津波堆積物の分布と津波規模

の推定. *地質学雑誌*, 125 (12), 835-851.

本論文では、内浦湾から胆振海岸西部にいたる8地域において1663年有珠山噴火テフラUs-bの下位にあるイベント堆積物を調査した。このイベント堆積物は1640年の駒ヶ岳噴火テフラKo-dに覆われていることから、1640年の駒ヶ岳噴火で引き起こされた山体崩壊津波によるものと判断された。その規模

を推定するため、イベント堆積物の分布調査、層厚・粒度・鉱物組成解析を行い、その結果が妥当であるかを評価するため山体崩壊物流入数値シミュレーションを用いて検討した。その結果、この堆積物は1640年の駒ヶ岳噴火津波で説明可能であることがわかった。この研究では、分布推定地域の各地においてコア等を用いた詳細な堆積物の調査・分析を行っているだけでなく、数値シミュレーションなどの手法を加味して、その規模の検討を行っていることは特筆される。さらに、津波マグニチュードの推定も行っており、津波評価の質のさらなる向上を目指している。本研究は、近年の若手研究者による津波（堆積物）研究を代表するものであり、多面的な角度から検討した姿勢は高く評価される。以上の理由から、中西 諒会員に日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞（2/2件）

受賞者：加藤悠爾 会員
（筑波大学生命環境系）

対象論文：加藤悠爾・柳沢幸夫，2021，秋田県出羽山地の笹森丘陵に分布する新第三系の地質と珪藻化石層序。地質学雑誌，



127（2），105-120.

出羽山地は日本海拡大期以降の東北日本弧の古環境及びテクトニクスの変遷を解明する上で重要であるため、古くから層序・古生物学的研究が行われてきた。東北日本弧日本海側の海成中新統には複数層準に海緑石濃集層が知られており、層序対比や古環境の検討で注目されてきたが、その実態や年代には不明な点が多かった。本論文では、海緑石濃集層を含む出羽山地笹森丘陵の新第三系の地質と珪藻化石層序を詳細に調査し、数多くのセクションでの柱状図作成と岩相層序・珪藻化石層序の観点からのセクション間対比、及び地質図作成などによって、調査地域の約17 Maから4 Maまでの年代層序を確立した。従来整合とされてきた船川層と女川層との間にハイエタスが存在することを明らかにし、海緑石濃集層の年代を推定し、海緑石濃集層で堆積が停滞していたことを実証した。これらの成果は、日本海拡大後の古環境変遷の原因を探究する上で重要な知見になった。地質を調査する若手が減少する状況で、基礎的な地質調査と精緻な研究を行っていることは高く評価される。以上の理由から、加藤悠爾会員に日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会表彰（1件）

受賞者：伊与原 新氏
（小説家・推理作家）

表彰業績：地球惑星科学研究をいかした小説発表とそれによる科学知識の普及



地球科学に関するフィ

クション及びノンフィクション小説は、地球惑星科学に携わる研究者・教育者を含む多くの国民に想像する楽しさを与えるだけでなく、専門的知識も与えてくれる。伊与原新（本名：吉原 新）氏は、固体地球物理学の研究で博士（理学）（東京大学）の学位を取得後、大学教員として地球惑星科学の研究・教育に携わり、小説家として活動するという経歴を持つ。これまでに長編・短編合わせて20編以上の作品を発表し、第30回横溝正史ミステリ大賞受賞、第38回新田次郎文学賞受賞を取得している。小説には、専門とした地球惑星科学だけでなく、広く自然科学のさまざまな専門的知識が効果的に散りばめられており、地層や岩石、化石、ハイエタスなどの専門的知識が含まれた小説もある。初期の『磁極反転の日』や『ルカの方舟』には高度な専門知識が散りばめられていたが、最近の小説ではより科学知識が洗練され読みやすくなっている。これらの伊与原氏の小説では、読者はSFの物語の世界で想像する楽しさを味わいながら、科学の知識と考え方についても知ることができる。小説による国民への地質学の科学知識の普及という点で、伊与原氏の貢献は大きいと評価される。以上の理由により、伊与原新氏に日本地質学会表彰を授与する。

以上

入 会 の ご 案 内

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。

入会には正会員1名の紹介が必要です。近くに紹介者となるべき会員がいない場合はその旨お申し出ください。また、初年度の会費は申込書郵送時から時間の間隔をおかず下記送金先へ速やかにご送金ください。会員としての正式登録は、入会承認後、初年度会費の入金を確認した上でを行い、雑誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書送付先:101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会

送金先:郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会

ゆうちょ銀行 ○一九(ゼロイチキョウ)店/当座 0028067 /一般社団法人日本地質学会 シヤ=ホンチツガツカイ

会費(※1)年額:正会員 12,000円 (学部学生割引※5,000円, 院生割引※8,000円【定収のない方に限る】) ※2)

※1:学会費には地質学雑誌の購読料が含まれています。

※2:学部学生割引, 院生割引を希望される方は、下記の割引申請欄に指導教員の署名, 捺印をもらってください。

一般社団法人日本地質学会入会申込書

Application form for the Geological Society of Japan

太枠内のみにご記入ください(* Official use only)

*会員番号		*会員種別 ☐ 正会員 (☐ 学部学生割引 ・ ☐ 院生割引)	
氏名(ふりがな) Name in Japanese		ローマ字表記 family name	first name
____年Year ____月Mo ____日Day 生born on		Sex: ☐ 男 Male ☐ 女 Female Country:	
学歴 Academic career:			
____学校 High school ____年卒業 Year completed			
____大学 University ____学部 Faculty ____年 ____月 卒業(見込み) Year completed			
修士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年 ____月 修了(見込み) Year completed			
博士 Doctor: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年 ____月 修了(見込み) Year completed			
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code -)			
電話 Phone: ファックス Fax:			
所属機関名称・所属機関住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code -) ※ 郵便物がきちんと届けられるよう、ご記入ください。			
電話 Phone: ファックス Fax:			
e-mail Address: @			
※e-mail Addressは地質学会からのメレマガ配信用、その他連絡用に登録します。携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録いたしません。ご注意ください。 ※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。			
連絡先 Correspondence: ☐ 自宅 Home ☐ 所属機関 Office			
会員名簿の掲載項目:2年に1度、会員名簿を発行しています。氏名・所属先は掲載必須項目です。下記の項目について掲載を拒否する項目には ☐ にチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承諾いただいたものとします)。			
☐ 最終学歴 ☐ 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は「〇〇大学〇〇学部」,「株式会社」までを必須項目として掲載)			
☐ 所属先住所 ☐ 所属先電話・FAX番号 ☐ 自宅住所 ☐ 自宅電話・FAX番号 ☐ e-mail Address			
紹介者名(正・院生会員)		印	
Recommended by (name of member)		Signature	
学部学生割引・院生割引申請欄:運営規則に基づき、学会費の割引申請をいたします。			
上記本学の学生につき、 ☐ 学部学生 ・ ☐ 定収のない院生(研究生) [いずれかにチェックをつけてください] であることを証明いたします。			
指導教員 所属:		氏名: 印	
専門部会:現在、下記の15の専門部会があり活動しています。専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします。所属希望の部会を3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)			
1. 地域地質 2. 層序 3. 堆積地質 4. 海洋地質 5. 構造地質 6. 岩石 7. 火山 8. 応用地質 9. 環境地質 10. 情報地質 11. 古生物 12. 第四紀地質 13. 環境変動史 14. 鉱物資源			
興味専門分野:あなたの興味専門分野を教えてください。3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)			
1. 層位 2. 堆積・堆積岩 3. 古生物 4. 構造地質 5. 火山・火山岩 6. 深成岩 7. 変成岩 8. 鉱床地質(金属・非金属) 9. 鉱床 10. 鉱物 11. 燃料地質 12. 地熱 13. 第四紀 14. 環境地質 15. 都市地質 16. 土质地質 17. 土質工学 18. 水文地質 19. 探査地質 20. 土木工学 21. 情報地質 22. 地震地質 23. 海洋地質 24. 地球物理 25. 地球化学 26. 地質年代学 27. 地理 28. 地学教育 29. 考古学 30. その他 40. 地球惑星			
(注)ご提供いただいた個人情報は、日本地質学会プライバシーポリシーに基づき適切に取り扱います。			
*受付(年 月 日)		*入金(年 月 日) 振替・現金・銀行・他	
*承認(年 月 日)		*送本(巻 号)	

(金融機関用)

令和 年 月 日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書(収加)

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	SMBCファイナンスサービス株式会社	振替日 (払込日)	6日・23日(金融機関休業日の場合は翌営業日)
--------	--------------------	--------------	-------------------------

(フリガナ)		申込人名		申込人住所		〒	
						☎	

ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。

ゆうちょ銀行以外の銀行	金融機関コード		支店コード		預金種目 (どちらかに○印)	口座番号 (右詰めでご記入ください。)			
					1. 普通				
					2. 当座				
	銀行組合	信用組合	本支店	出張所					
	(フリガナ)					金融機関お届け印			
	口座名義人								
	法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。								

お届け印(捺印)
ゆうちょ銀行を除く

金融機関へのお届け印ですか
ご注意ください!

ゆうちょ銀行	(フリガナ)					ゆうちょ銀行お届け印			
	口座名義人								
	法人の場合は、ゆうちょ銀行へお届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。								
	種目コード	契約種別コード	記号(6桁目がある場合は※欄にご記入下さい)	番号(右詰めでご記入ください。)					
	166	301		0	※				
払込先口座番号		00110-5-58830			払込先加入者名	SMBCファイナンスサービス株式会社			

(収納企業使用欄)

収納企業名	一般社団法人 日本地質学会				料金等の種類	会費等													
契約者番号	委託者コード				顧客コード														
	1	8	4	7	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

一預金口座振替規定一 ※ゆうちょ銀行払いは除く。

- 銀行(金庫・組合)に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
- 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
- この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものととして取扱ってさしつかえありません。
- この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。

ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。

(金融機関へお願い)

この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

◎書類の流れ お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関

金融機関使用欄	(不備返却事由)			
	1. 預金(貯金)取引なし 3. 印鑑相違			
	2. 記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、 通帳記号、通帳番号、口座名義			
	4. その他()			
	備考			
	検印	印鑑照合	受付印	

取
扱
店
日
時
出

不備返却先

SMBCファイナンスサービス(株)
決済ビジネス業務センター 口座振替依頼書課
〒105-8625 東京都港区新橋1-8-4 SMBC新橋ビル

裏面のりしろ①

84 円
切 手 付
貼

101-0032

一般社団法人日本地質学会
一丁目八―一五 井桁ビル内
東京都千代田区岩本町

裏面のりしろ③

氏 名
住 所

のりしろ③

のりしろ①

キ
リ
ト
リ
線

オ
リ
線

御 中

のりしろ②

キ
リ
ト
リ
線

裏面のりしろ②



日本地質学会

第129年学術大会 (2022)

東京・早稲田大会

早稲田大学 早稲田キャンパス14,15号館
169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

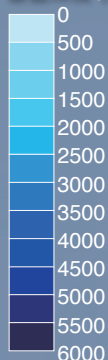


共催：早稲田大学 教育・総合科学学術院

学術プログラム(14号館)

9/4(日)午前 口頭発表
午後 表彰式, 受賞講演会
9/5(月)・9/6(火) 口頭発表
学生のための地質系業界説明会
9/2-3・9/7 (+9/8) 巡検(9コース)
学術講演, 巡検参加: CPD対象
ポスター発表, ジュニアセッションは
9/10(土)~9/11(日)にオンライン開催

基盤深度 (m)



都の西北から
探ってみよう!
新しい地質学

教育・普及プログラム (15号館)

9/3 (土)~9/5 (月) (地階ロビー)

地質情報展「都心の地下を探索」

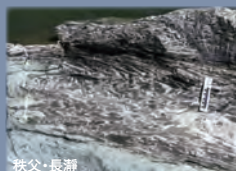
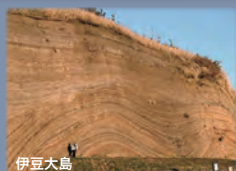
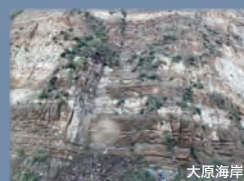
主催：産業技術総合研究所 地質調査総合センター

9/4 (日) 13:00~16:30 (03教室)

市民講演会「関東の自然災害と防災」

穴倉正展氏 関東の海溝型地震・津波履歴に関する最近の解釈
山崎晴雄氏 東京の地形と自然災害
土屋信行氏 東京低地の災害に備える防災まちづくり

早稲田大学



一般社団法人 日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15
井桁ビル6F 電話: 03-5823-1150(代表)
<http://www.geosociety.jp/>

下絵: 高橋(2017) 東西日本の地質学的境界【第九話】,
GSJ地質ニュース, 6, 251-260. (第2図)を改変

地質情報展2022とうきょう

都心の地下を 探る

2022.

9/3-5月

入場
無料

時間

9:30~17:00 最終入場は16:30
※ 5日は16:00終了(入場は15:30)

会場

早稲田大学
早稲田キャンパス 15号館ロビー

内容

地質・地盤に関する展示と講演
体験学習コーナーもあります。

※ 入場制限が付くことがあります

※ 展示内容が予告なく変更される場合があります

「地質情報展2022とうきょう」は、JSPS科研費22HP0010の助成を受けたものです。

国立研究開発法人産業技術総合研究所

主催：地質調査総合センター、
一般社団法人
日本地質学会

共催：早稲田大学 教育・総合科学学術院

一般社団法人 一般社団法人
後援：不動産協会、全国地質調査業協会連合会、
特定非営利活動法人
日本ジオパークネットワーク

【お問い合わせ先】

TEL : 029-861-3540

Email : M-johoten2022-mi@aist.go.jp

URL : <https://www.gsj.jp/event/johoten/>

